THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿年 第九號

十月一日

中央公論

發行

秋期大附錄號

豫告

我「中央公論」は來る十月一日を以て秋期大附錄號を發行せんとし、左の諸大家より寄稿の快諾を得たり（委しくは卷末の編輯だよりを見よ）

小説　夏目漱石氏

小説　島崎藤村氏

小説　國木田獨歩氏

論文　金子筑水氏

論文　綱島梁川氏

論文　山路愛山氏

新思潮、新趣味の代表者たる六大家によつて成る本號の價値を呶々するは却て愚なるべきを信ず。故に吾人はいはず。偏へに江湖の判斷に一任す。（但し綱島梁川氏の病態近來大に宜しく、元氣日に増し恢復せられつゝあるも、大喀血の後なれば或は約を履む能はざるを恐るゝとの事なり。吾人は讀者と共に氏の速かに快方に赴き、其愛に滿ち力に充ちたる文に接せんことを望むや切也。）



中央公論第二十一年第九號目次



第二十一年
第九號
（二百十號）

政事家の凋落

一葉落ちて天下の秋を知る、今や參謀總長陸軍大將兒玉源太郎子逝きて、政界の前途坐ろに蕭殺を感ぜざる能はず。

子や絕代の材人にして、適く所として佳ならざるなく、師團參謀としては智囊と稱せられ、日淸戰役に陸軍次官として蕭何の職に在るや、機畫總て宜しきに適ふて物資の供給より、衞生消毒の末に至るまで、幾んど一の遺算あらず、臺灣總督としては恩威竝び行はれて、遙かに土匪を服し生蕃を懷け、土民をして悉く其の堵に安んぜしめ、山を掘り海を養て地物の利を盡し、統治の蹟擧り財政の礎堅きを致し、僅かに內務大臣と文部大臣を兼ぬる間も、亦聰明敏達を以て聞へ、其の自から下りて參謀次長となるや、露國と開戰すべく決心せる全國民をして一般に信賴せしむ、出てゝ征討帷幄の首斑に列するや、神籌鬼算、勝を決すると幾んど掌を指すが如く、風采應酬の妙、また幕僚をして安んじて智を傾け勇を盡さしむるのみならず、餘力時に本國の政局に及び、世界の趨勢を暗示して外交の活動を促がすに至る、戰局收まるや、竟に昇りて參謀總長となり、又滿洲經營委員長となり、南滿洲鐵道創立委員長を兼ね、戰後の經營として單に軍備擴張の大策に止まらず、利權の擴張にも亦大に其の材力を揮はんと欲し、而して國民の多數また實に子の智能辨力に期待する所多大なりき。

然るに突如として逝く、天下の人皆心よりして之を哀惜せり、蓋し死して惜まれしもの今に及んて僂指に

過あらず、而かも子の如く哀惜せられしものに至つては幾んど鮮矣。

但だ子の逝去によりて何が故に政界の前途蕭殺を感ずるか、曰く、子の材力殊に大に政界に發揮さるべく期待されたればなり、子の突如たる逝去は、幾んど政界より一の明星を取り去りたるが如く覺ゆればなり。

* * * * * * * * * * * *

兒玉子が政事家としての技能は稍々陸軍次官たりし時に於て知られ、次て臺灣總督として近くは清民土匪を操縱し、遠くは本國の政黨を操縱したるにて知られ更らに桂内閣のために政進兩黨の取捨操縱を獻策して着々其の功を奏したるに由て益々明白となりぬ。

且つ子の政事家としての技能の優秀なるを一般に知らるゝと同時に、一代の囑望多く集中し、將來政界の中心となり、總理大臣の印綬を佩ぶるもの必らず子なりと豫想せられたりき。

故に少しく聰明なる政黨員及び政界の慧星を以て任ずるもの、將さに子を擁して起たんと欲し、今次冬期の議會には必らず爲すあらんことを期したりき。(子の參謀總長となれるがため計畫稍々遲滯を來したるも)。

蓋し子の技能の最も傑出したるは、軍人としてよりも寧ろ政事家としてなるべし、メッケル門下の三傑と數へられし故川上操六氏も亦天成の總理大臣なりき、人を識て能く任じ、適材を適處に處くの鑑別と、運籌畫策の利弊長短を辨識する能力とは、幾んど群を絕したりき、然るも其の全力を軍務に盡すの決心牢として動かざりき、桂太郎氏は又軍人としてよりも政事家として多く成功したり、而して我が兒玉子に至つても、また桂太郎氏の上に出づるも絕て其の下に立つこと莫しと豫想せられたりき。其の襟度の大なる、或は桂氏に讓らざるを得ざるも、聰明敏達は寧ろ之に過ぐ、彼此相差引せば、假令桂氏の上に出づるも決して其の下には立つ可らずと信ぜられし也。

然るに子突如として逝く、政界の失望知るべき也、殊に子を推戴して將さに大に爲すあらんとせし人々は

幾んど前途の光明を奪はれたる感なきを得ざるべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

群議衆評假令區々なるも、我が政界の偉大としては到底伊藤、山縣、大隈の三元老を推さゞる能はず、今や其の領域の大小廣狹はあれ、政界の分野は此の三老に配屬せり、別に松方、井上、樺山、高島の諸老あるも、他の無數の小英雄小豪傑あるも、大抵此の三分野を圍繞するのみ、伊、山、大の三恒星に分屬するのみ然らざるも極めて少數の慧星あるのみ。

然りと雖も世間に公道なるは白髮なり、伊山大の三元老も歳月には乃ち敵する能はず、其の頭上漸く雪白を加ふるに隨つて、勢力も亦漸く減少し、光芒徐々に稀薄ならんとす、假令絶えず糖燐酸を服するも、妙齡の佳人を左右より離さゞるも、人間竟に不老不死の仙藥あらず、三老頗ぶる耄して餘生幾許も莫らんとする也。

茲に於て聰明なる伊藤氏は早くも其の後身として西園寺氏を作り、之をして宮中の信用と政友會とを左右にし、貴族院の一角に結びて山縣系とも亦親和せしめつゝあり、大隈氏は其の智未だ蛹にも及ばざるか、曾て代るべきものを有せず、門下に大石、犬養の俊髦在るあるも、當に自から用ゆると厚きに過ぎて後進の推輓を努めず、唯だ近者悟る所あるか、身を轉じて文藝又は社會問題の一角に據らんとする者に似たる、素より板垣氏の轍を踏むに至らざるべきも、思ふに永く政界に蟠踞するとは爲さゞらん乎、山縣氏頗ぶる攝養に細心なるも、蒲柳の質、永く當面に立つに堪えず、多年養成せる門下の偉材多く、桂氏兒玉氏の如き實に其の最たるものにして、山縣氏の遺鉢は此の二氏之を繼ぐべく、山本氏小村氏また之を追隨して大成すべく期待せられたりき。

今や西園寺氏の羽翼全く成りて、全く侮る可らざる大勢力となりぬ、而して氏の健康從來頗ぶる不良なりしも、近時政局を擔當して多忙を極むるや、意氣の揚ると共に心身また太だ旺なりといふ、其の健康の許す

限り、伊藤氏實に後ありとすべし

然れども小村氏は痼疾到底癒えざる人也、桂氏は智術餘りありて調和の材能に富み、頗ぶる度量あり、天下の誹謗と輕侮とを受けながら、尙ほ最も永く最も活動ある內閣を支持して實力の非凡なるヿを示したりき隨つて氏の前途は最も好望なりしも、今や大患を得、假令再び起つも腦力體力また前日の桂氏たらざるべしといへり、果して然らば竟に一個の榮爵光耀たる福德翁として一生を終るを幸ひとせんか、政界さて桂氏を見る可らざる也

玆に於て兒玉子の囑望せらるゝヿ最も多かりき、然るに子や卒然として逝く、政界の前途轉た寂寥を感ぜざらんとするも得べからざるなり。

* * * * *

今や山本權兵衛氏あり、矯々の氣を負ふて一隅に耽視す、曾ては兒玉子と海陸の双璧、政界の兩珍と推重せられたりき、但だ其の機鋒銳利に過ぎて俗衆の惡を察するヿ甚だ強く、容易に群心に應酬して人を容るゝの量あらず、若し玆に勉強して聲望を累ね、能く淸濁を併せ呑みて俗氣銅氣迂氣の芬々たる黨人をも操縱するに倦まずんば、竟に一方の中心となりて政界を動かすに至るや必せり、天下の英材未だ群出せざる、勢ひ氏を驅りて玆に至らしむべきか。

飜つて、政黨の現況を細視するに、進歩黨の大石氏精力度量兩つながら兼備するも、永く黨にのみ依て局面の展開を企てずんば、好男子或は歲月と共に漸く老いん犬養氏機鋒銳に過ぎて人に悅ばれず、帷幄の賓としては絕群なるも、宗岳の群山を率ゆるが如く特立するとは幾んど能はず、政友會の原氏機才あり、行政の長官としては裕に餘力あるも、之を大處に用ゆるの適否は尙ほ未知數也、松田氏頗ぶる老熟なるも、素より偏裨の好將のみ、特立の偉材にはあらず、若し特立せしめば、第二の松方氏たるに止まらん、政進二黨を通じて餘子は乃ち碌々談ずるに足らず。

看來れば西園寺氏の巍然として大成せる外、僅かに

一の山本氏あり、次で大石氏あるのみ、而かも大石氏は尚ほ未知數に屬す、政界の先進漸く老ひ、英材また凋落して前途轉た蕭殺を極む、誰か寂寞を嘆ぜざらんや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

然りと雖も是れ英雄崛起の時なり、藩閥の餘喘、政黨の殘壘、今や人材盡きて自然に衰滅せんとす、未だ著はれざる幾多の英才是より大に起るべし、將來雄飛すべき資質を具ふるもの、政府部內の少壯者中にも之あるべし、民間の草莽にも亦素より多かるべし、彼等宜しく獨力草萊を闢き來つて、自家の新乾坤を作るべし、眞に爲すあるの秋は今日以後にあり、老朽せる藩閥と腐蝕せる政黨とを絶滅せしめて、更に活氣あり光輝ある新日本を建造するは、此等新英雄の任務ならずや政界に志あるもの其の智能を研鑽すると共に、勢力を涵養することを怠る可らざる也。

政界蕭殺の後、天の一角微かに一道の曙光あるを見ずや、此の曙光竟に是れ新日本に新英雄の爲すある舞臺也。

男女の性慾を論ず

性慾は人生自然の情なり、否、動物本來の情なり、故に習はずして覺へ、敎へずして發す、然るに男女間の性慾を戀愛と稱し、戀愛を神聖なりといふが如きは素より文人の誇張のみ、實は嗤ふに耐えたる痴言也。

或は戀愛と性慾とを別異なりとするものあり、其の説にいふ、性慾の極は肉體に屬するも、戀愛の極は然ることなしと、是れ强辨のみ、戀愛の要は他性を獨占するに在り、男は女に愛する丈け又女の愛は己れにのみ注がしめんとし、女も亦男をして我が欲する所のまゝならしめんと欲す、此の獨占は其の肉體的なると精神的なると素より差別を措くの要なし、他性は己れに隸屬せしめて我が心のまゝならしめんとするに於て二者毫も相異なる所なければなり。

凡そ親子男女の愛は總ての動物を通じて之あり、此の愛この時に已れを犠牲とするは雛犬狐狸にも多し、即ち性慾のみ、之あるがため人間を尊しとするは。猶ほ雛犬狐狸をも人の如く尊しとする也。

但し愛の最も崇高なるは親子男女の愛にあらずして博愛にあり、身を殺して仁を爲すにあり、國家及び社會のため、及び眞理、信仰のため一身を犠牲とするものは仁愛也、博愛也、此の愛や性慾にあらず、又動物通有のものに非ず、高尚なる人類にして始めて之れあり、人の事物の靈長として貴き所以のもの又實に玆にあり。

世の昧者動もすれば此の仁愛（博愛）と戀愛とを混同せんとす、或は混同して戀愛を神聖なりとす、理性ある者誰か之を嗤はざらんや。

夫れ性慾を恣にする社會は、同類相噬むに至らざれば止まざる社會也、全く動物の群衆也、故に人類社會を組織して、各々其の生々の目的を遂げ、進歩し向上し行く以上は、必らず此の性慾を抑壓し節制し及び良導せざる可らず、性慾を抑壓し節制し及び良導ずる乃ち道德にして、道德の人生社會に必要なるは之に由て社會の治安を保ち秩序を持するがため也。

人類の最も高尚なる所以は仁愛（博愛）にあり、己れを犠牲として他のために盡すにあり、平時に在ては乃ち人生社會の進歩向上を期するがため學問、宗教、藝術、及び生產の事業職分に努力し盡瘁するに在り、變時に在ては乃ち身を殺しても國家社會のために盡すにあり、義勇公に奉ずるにあり、人たるの根本要義玆に盡く、若し人々個々性慾を逞ふせんとせば、富めるものは驕奢のために他を虐し、貧しきものは忿恚のために他を凌ぎ、放恣狼藉、男女相姦し、老幼相刻し、强弱相屠るに至らざれば止まざるべし、假令斯の如く甚だしからざるも、淸人と爲り露人と爲らん、聽かずや淸人の刻苦勞役、孜々として富を作るは唯だ黃金美人を購ふて之を意のまゝにせんと欲するに在りといふとを、又聽かずや露都の中以上は男女情慾の奴隷となりて亂倫頽俗實に正しく視るに忍びざるもの多しといふ

ことを、露淸兩國の大且つ富を以てして、竟に大に振はざる、抑も其の所ならずや。

故に男女共に性慾を抑へ節して、仁愛（博愛）の大道に向ふことを期するは、動物を遠ざかる也、人格を高くする所以也、而して男は男らしく、女は女らしくして身を修め家を齊へ、共に其の職分に努力し盡瘁するは、是れ男女の性慾を良導する所以也、男をして女らしき女を求めしめ、而して女をして男らしき男を求めしめよ、所謂女らしき女は、貞淑にして能く容姿を正し、家を治め子女を育成する所以を知り、女子の本分を理解するものならずや、男らしき男は、志行堅實にして强健忠實に職分に盡瘁して能く完全なる紳士たるべきものならずや、男女總て斯の如きは相愛し相得て、能く家を成し職に盡せば、啻だに個々の幸福なるのみに止まらず、其の社會は必らず發達せん其の國家は必らず向上すべし。

世の文藝に從事するもの、動もすれば戀愛神聖の異說を眞面目に信奉して、性慾の情燃ゆるが如く靑年男女を惑はし、或は靑年男女の交遊、戀愛の變化等を極力描寫し其の結果抑節すべき性慾を益々挑發し煽動するに至ること多し、而して無識なる父兄も亦戀愛神聖の愚說に惑ふて其の子女の監督を過まつ、靑年男女の性慾を誘發すべき行事を默認するを以て所謂子女の自由を壓せざるものとし、子女をして竟に放恣不羈、性慾の奴隷となりて操行を汚し一生を謬るに至らしむるもの少からざるは慨すべし、知らずや、米國と露國との外は、靑年男女を監督するの嚴格なるを通じて歐人の習ひにして、其の風頗ぶる古の我が武家に似たるもののあることを、妙齡の愛孃を出して何等の拘束監督なき下宿屋に起居せしむるが如き猥藉の習風は世界豈日本の外に多くある可けんや。

吾人は再言す、男女の性慾は習はずして覺へ敎へずして發す、要は之を抑制し良導するに在り、男女を奬めて仁愛博愛の大道に向はしむるにあり、大道は乃ち天下の公道也、坦々として而して安易也、而して安全也、

我家族制度の長短

中嶋半次郎

日露戰爭の結果に就き、歐米人が我國戰勝の原因として數ふる中に、日本の家族制の優れることがその主要なる原因なりと認め、中には歐米の家族制度に我國の家制制度を入れざるべからずと唱ふるものあり、而して又我國人の歐米に遊べるものも、歐米人が此の如く我家族制度を賞賛するより、俄に心付きたりといふにはあらざらんも、歸り來りて此日本の家族制度を破壞せざるのみならず、之を助長せざるべからざるを說くもの尠からず。

その我家族制度の賞賛せらるゝは、如何なる點に在るかといへば、日本の家族にありては個人が單位にあらずして家族そのものが一單位となり、家族の者は己れを思はずして先づ家を思ひ、己れ一人を立てずして家を立てんと志し、家族全體は宛も一身の如くになり家の爲に己れを犧牲にするを厭はず、此故に親子兄弟夫婦親族の間に相依り相助くるといふ暖なる情愛成立し、その間に美はしき道德發達せり、之を今回の戰爭に見るも、召集せられたる人々が君國の爲に出陣するに當りては、その家族はさながら己れも戰場に臨むが如き心得を以て之を送り、君國の爲に盡しゝ家の名、親の名を汚さず、鄉黨の笑ふところとなる勿れと訓戒し、その出征せるものも、君國の爲めに盡すと同時に家の名親の名を思ひ、鄉黨に笑はれざらん覺悟をなし、若しその戰死するに遇へば、一家族のものは家族の上よりいへば非常なる打擊を受けたるに拘らず、その君國の爲に打死せしを以て非常なる名譽とし、鄉黨は又その家に對して尊敬を拂ひ、出來る丈力を盡して之を扶助するといふが如く、個人は個人といふことを思ふよりも先づ家を思ひ、この家を思ふ念が家族的生活をして堅からしめ、味あらしめ、而して之が鄉黨の制裁となり、更に大きくいへば君國の爲に犧牲となるといふ精神の基礎となるを致せりとす。

我家族制度に於て此の如く自己を犧牲となしその家

を立てんと圖るは、之を大にすれば我國體と關聯し、二千有餘年の我歷史の涵養せる風景なりと見ざる可からず、能く世に言ふ如く我國家は一家族の成長發達せるものにして、特に最近七百年間武家の世となりてよりは、家系を重んじ家名を尊ぶ慣習行はれ、家族の主たるものはその君主に、家族のものはその主人に對し、殆んど絕對に服從し、己れを棄てゝ他に盡す素養をなせり、此の如く我國從來の社會制度が下の上に事ふるには己れを棄てざるべからざることをその道德とし、上より下に對して守るべき道德は嚴しく言はざる缺點有りしといへど、斯かる自己を犧牲とする歷史的習慣が今日までも傳はりて、家族生活、國家生活を營み、これが端なく今回の戰爭に於て、家族一致し、鄕黨一致し、國家全體一致すといふ善美なる結果を見るに至れり、歐米人が見て以て之を戰勝の一源因となすは見るところ決して淺しといふべからず。

此の如く現今の我家族制度は、三千年來我歷史的慣習の養成せしところにして、之を光明の方面より見れば、人倫としても美はしく、社會生活の基礎としても健全なるところあるは爭ふべからず、親子の間、兄弟の間、夫婦の間に於て、己れを立つるといふ心を抑えて、家の爲に犧牲となるといふ美風は、之を歐米人の個人主義を基として、家族的生活、國家的生活をも營むものよりして見れば、確かに美はしく且つ健全にも見ゆべし、歐米の家族制度に就き見聞するところを湊合すれば、歐米の家族制度はその弊に堪えずして如何にか之を改めざるべからざる必要に迫られ居るものの如し、その家族制度の弊をいへば、個人主義に立脚せる極、家族の間に美はしき情愛なく、一致共同の同情なく、例へば、親はその子女が獨立すべき年齡に達しながら獨立し得ずして、猶ほ親に依賴する時は、これに對してその衣食住の費用を請求すといふが如き、或は兄弟の間柄に於て、不行跡、若くは失敗の爲に困難に陷りたる場合に、自業自得として、兄弟にてありながらこれを救はんともせず、夫婦の間に於ては、互に己れの快樂を追求するが爲に爭を生じ、その子供の養

育、教育に對しても己れを犧牲とするといふ愛情無きが如き有樣に至り、殆んどその弊に堪えざらんとす、これと同時に從來の宗教的信仰はその熱を失ひ、これが又其家族制度を不健全ならしむる基とはなりぬ、從來の宗教的信仰にありては、男女互に神意を以て結ばるゝ處に夫婦の關係は生ずとなし、その間に生るゝ子は之を神の賜として慈しみ、その家庭は此世に立ちて神意に從ひ、己れが務を盡す神聖なる場所、宗教的空氣に充てる場所と見たるに、此信仰薄らぎ來り、家族の一致を保てる根據は搖ぎ來れり、之に加ふるに生活は困難となり、安んじて家庭の快樂を味ふ如き餘裕は減じ來りぬ、即ち人々、手より口にといふが如き齷齪たる生活狀態、逼迫せる經濟事情の下には、樂しき家庭を作ることの困難となるは固より、よしや作り得たりとするも落着きて樂しく生活するを得ず、更に又近時の文明は社交的の設備、社交的の快樂を增し、家に在りて樂むよりも寧ろ社會に出でゝ快樂をあさるを勝るとするが如き狀態となり、種々の方面よりして、所謂スウヰート、ホームなる語は唯一種の詩歌的意味にて味はゝるべきものとなり了れるが如し、斯くも家族生活の破壞し初めたる歐米人の眼より見て、我家族制の如何にも美はしく、如何にも健全に見ゆるは當然なるべく、歐米人が我家族制度を採り、我家族精神を學ばんとするは、即ち彼等が弊と看做して困難せる點が、我國の制度に在つては恰も能く拯はれ最も美はしく成効せるによるなりこの東西の家族的生活の對照は、軈てこれ歷史を異にせる、二千年來發達せる家族生活が一は個人主義に立脚して破壞し初めたる點に於て、一は家族主義に立脚してその美果を收めたる點に於て、恰好の對比を示せるものといふも可なり

然らば我國の家族制度は歐米人が見て賞讚せる程、確に堅固に確に健全にして、夐かに歐米の家族制度よりも勝れるかといへば左にあらず、歐米人は己れが困難とせる點を我國の制度にては成効し居るが故に、餘りに美はしく之を理想化したる傾なきにあらず、我家族制度は決して歐米人が考ふる程成効せるものとは見

るべからず、何を以て之を言ふか、我家族制度に在りては一家の主人を以てその代表者と見るが故に、一切の事凡て家長の責任となり、從ひて。一面家族が家長の意を奉じて、一致してその家を盛にする長所あると同時に、あらゆる責任を家長に歸し、家長は家族の犧牲となりてその志すところをも、行ふ能はざる如き事實あり、次には妻の位置、母の位置未だ甚だ高からず妻の意見、母の意見がその正理なるに拘らず、家長に抑えられ、爲に因襲的の家族の陋習長く脱する能はざる事實あり、次には親が子に對し、子が親に對する考に到りても甚だ誤れるものあり、親はその子を養ふに老後の杖とも頼む生活の便宜となさんとし、子は又その獨立すべき時機に至りても、尙ほ甘んじて親の惠みを請ふといふが如き自尊自立の考を缺く事實あり、而して又親と子、夫と婦、舅姑と嫁との間に至りても、新舊思想の衝突ありて、外面よりは己れを犧牲にして家の爲に盡すが如く見ゆるも、その裏面には幾多の暗闘行はれつゝある事實の否むべくもあらざるあり、要するに歐米の家庭が個人主義の弊に陷りたるが如くに、我國の家庭は家族主義の弊に陷りて困難せるもの逕路は異なれども、その困難の度に至りては殆んど同じくして、我家族制度は十分に歐米人を敎ゆるに足るとは自負すべからざるなり。

我家族制度の此弊を救ふが爲には、歐米の個人主義を加味し來らざるべからず、個人主義はその弊を擧ぐれば、今の歐米の家庭が困難せる如き歸結に達するもその長所を言へば、自尊自立、己が爲すべきことは何處までも責任を負ひて之を爲し遂げ、親子兄弟の間に依頼せんとするが如き卑屈なる考なく、獨立獨行、公明正大の心情を以て、堅實なる雄々しき家族的生活を營むの點あり、此處に堅固なる家族的生活は成立し大きくいへば健剛なる國家的生活は成立するなり、自重自尊の念なきところに眞の健全なる共同一致は成るべきものにあらず、互に依頼し合ふ處には共同一致はその基礎甚だ薄弱なるものなり、我家族制度の精神よりいへば、己れを犧牲にして家の爲に盡すといふにある

故、卑屈なる依賴心のその間に生ずべき餘地を見ぬ筈なるに、その相依り相助くるところに依賴して、計らずも卑屈なる依賴心を釀成せる缺點あり、之を救ふには須らく歐米に行はるゝ、個人主義の長所を加味し來らざるべからず。

已に我國の民法は我從來の家族主義に加味するに、歐米の個人主義を以てし、家長の權を正當なる範圍に制限し、妻及び母の位置を高め、親子の關係に於て幾分その依賴心を制限せり、之を批評するものは家族主義を取りて之を貫かず、個人主義を入れて之を十分に立てず何れとも付かざる曖昧模糊の立脚地にありて修正の餘地十分に存すとなすものあるも、その二つの調和を爲さゞる可からずと着眼し來りたる點は多しとせざるべからず。

我家族制度を健全に發達せしむるは、民法の如き法理的方面より、之を助成すべきは勿論なるも、同時に道德の方面より家族主義と個人主義との調和を圖り、以て健全なる我家族制度を發達せしめざるべからず、健全なる家族制度を發達せしむるは、同時に健全なる國家を作る所以なり、健全なる世界を作る所以なり、國家は家族より成り、世界は國家より成るとせば、その社會組織の單位といふべき家族制度を健全にするは一切の社會を健全にする本といふべし、我國人は歐米人がその家族制度の改善に苦心せる今日、之に劣らざる熱心を以て、我家族制度の改善に盡力せざるべからず。

社會學上より、個人と家族、若くは個人と社會との關係を如何に見るべきかは、頗る趣味ある問題なるもこれは抽象的の議論に屬するを以て、此處にてはその範圍に入らず、唯具體的の事實問題を捉へて所見を述ぶるに止む。

本邦社會主義の前途

法學博士 桑田熊藏

余輩は社會問題の解決に就て、社會主義と正反對の意見を有する者である、階級の軋轢を調和し、貧富の衝突を防止し、平和的に且つ秩序的に斯問題を解決するは、余輩社會改正主義者の理想である、夫の社會主義の如く、現社會を根底より破壞して、之に代ふるに共産的新社會を以てせんとするは、余輩の極力排斥せんとするものである、社會主義者は余輩の主義を目して因循姑息となさば、余輩は社會主義を名けて異端邪説と云ふに憚らぬなり。

我國社會主義の勃興する日尚ほ淺きも、其勢力や侮る可らざるものあるを見る、政府は之に對して鎮壓の方針を執ること始終一貫せるも、其効果の奈何は疑問である、社會主義は本來思想上の現象であるから、之が蔓延を防ぐには政府の權力を以てするも何等の効力かあらん、思想に對しては思想を以て之に當らねばならぬ、理論に對して理論を以て之に當らねばならぬことは、何人も疑を容れぬてあろー、去れば社會主義を防止するは政府の職責と云はんよりは、寧ろ社會の義務である苟も世を憂ひ國を思ふ我有識者は之に向つて充分の責任を果さねばならぬと思ふ。

社會主義を防止するの方法を立つるに先つて、社會主義の將來を豫測するは必要の事である、此豫測をなすに就ては、社會主義の本場たる歐洲の實例に依り之を我國狀と比較するとが最も切實なることてあろー、歐洲諸國には社會主義は已に政黨の形を以て現はれて居る、所謂社會黨なるもの是れである、今各國に就き社會黨の現況を按するに、最も盛なるは獨逸である、此黨員にして國會の議員たる者百餘名、即ち議員總數の約四分の一を占めて居る、反之して英國にては社會黨の勢力は甚だ微弱なるものであつて、國會に於て社會黨員と名乘る者は一人もない、黨員の數は全國を通じて僅々三萬に過ぎぬのである、抑も社會主義が獨逸に盛にして英國に行はれざる此事實は奈何に之を說明すべきか、之が理由として掲ぐべき事情は先づ五ヶ條あると信するのである。

第一　歐洲各國に就て最も政府を信仰し、權力を崇

拜するの國民を擧ぐるならば、余輩は先つ指を獨逸人に屈するを憚らぬ、專制君主や壓制政府の模範は他に之あるへきも、政府萬能の思想が深く國民の腦裏に沁漸せる獨逸人の如きは其例少なしと云はねばならぬ、獨逸に於ける政府萬能の思想は上より之を強いるに非らずして下より之を求むるのである、是は多年傳はつた專制政治の結果でもあろー、又國民固有の氣風でもあろー、兎も角も獨逸人は政府萬能の信仰に厚き國民と認めざるを得ない、反之して英國人は政府を信仰しない、權力に依賴しない、獨立自尊自ら局に當つて已むを得ざる場合に政府の保護を仰ぐといふのが英國人の理想である、獨逸人が政府萬能理想に富んで居る結果として社會主義が彼等の頭に能く這入る、何となれば社會主義は一種の政府万能主義である、生産事業は凡て官業とし財産は凡て官有とし職業の選擇賃銀の高低勞働の自由等凡て政府に一任するといふのは社會主義の理想である是れは政府万能の極點である、そこで獨逸人は兼て政府萬能の思想に富んで居るのであるから社會主義に對し特に奇異の感を起すことなく之を歡迎するのである、英國人の眼から見ると、社會主義は英國人の思想とは正反對のものであるから此主義に對して毫も敬意を表せぬのみならず寧ろ之を冷笑し去るのである。

第二　富豪の心得が英獨兩國の間に大に異つて居る英國の富豪は公共事業、或は慈善事業に金を投ずることを一種の名譽とし義務として居る學校とか公園とか博物館若しくは貧民院等富豪の箇人事業で建てられて居る者は殆んど枚擧に暇ないのである、或貴族は其收入の半額は之を公共事業に費やすとを家憲として居る者あることを聞いた、然るに獨逸にては之と全たく其趣を異にして社會政策として、政府や、自治體のやつて居る事業は數多あるが、富豪の箇人事業としてやつて居る公共慈善の事業は如何にも少ない、そこで貧民の方から考へると、英國では富豪が其地位に伴ふ責任を自覺して、相當の義務を果たすから、之に對して非難の打ち樣がない、然るに獨逸では、富豪は慈善心に

乏しい公共心に薄いから、貧民が富豪に對して常に不平を言ふ、怨聲を發する、所謂階級の軋轢は强いのである、社會黨は其虛に乘じて貧民を煽動して、お前等の疾苦と逆比例に富豪は實に羨むべき生活をして居る、あれを壞さなければ到底お前等の改良進步は出來ないといふやうなことをいふと、貧民は其富豪を惡むの餘り會社主義の當否は之を研究するの暇なく直ちに社會主義の洗禮を受くることになる。

第三、獨逸にては、經濟と教育との權衡が取れないのである、經濟の進步して居る割合以上に教育が進步し居る、大學の數は殆んど卅に達し其他各種の專門學校等が幾らもある、さうして此等の學校から年々出る卒業生は非常なる數に上ぼるので、是等の人々が學校を出ても職を得ることは容易でない、此人々の多くが社會黨になるのである、教育は十分にある、併し教育に伴ふ資産がないから、自己の逆境に沈淪するは必竟社會制度の罪である、此社會制度を改めねばならぬ、社會に私有財産があつてはいかぬ自由競爭があつてはいかぬ社會制度を社會黨の理想の如くにして始めて安心立命の地を得べしとの思想が頻に青年の間に行はれて居る是れ社會主義が獨逸に盛になる一原因である、之に反して英國では經濟と教育との權衡が善く保たれて居る、由來英國人は理論よりも事實を重んじ、教育よりも寧ろ經驗を貴ぶのである、是は英國人の長處であつて、同時に缺點であろー、英國にて教育の發展せざるは英國人自身も認むる所の事柄である、之を獨逸に比すれば數等の下にありと云はねばならぬ、去り乍ら獨逸の如くに失業の學者高等の遊民はないのである、一文無ても天下の事を論ずる樣な者は少ない、先づ企つて而して後天下の事を論ずると云ふことである、從つて社會主義の如き理論は頭に這入らぬのである。

第四　英國に於ける所謂工業の革命は、十九世紀の初めに起り爾來一世紀を經て今日の進步をしたのである、然るに獨逸の工業の發達は普佛戰爭後三十年間に俄然長足の進步をして今日の如くなつたのである、凡そ工業が發達するに從て勞働者の職は增加する而して

之に伴つて政府事業として、或は個人事業として勞働者保護の計畫を立てゝ社會政策の設備をするの必要がある此點に付て英國は長い時期の間に工業が發達したのであるから、其間に必要に應じて充分に種々の計畫を實行したのである然るに獨逸では急速に工業の進歩した爲めに、其用意をする時間がなかつた、勞働者の數は俄かに增加して何百萬に上ぼつたけれども、其保護の設備は充分に出來ない爲めに、社會黨は勞働者を煽動して政府を攻擊し、資本家を非難するやうになつたのである。

以上述べた所に依れば獨逸の感情は能く日本に似て居る、而かも日本の事情は英國と正反對である、日本は維新以來、文明の進歩發達が總て政府の力に依てのみ出來て居るから、人民は今日に至る迄、政府の力に依るに非らざれば何事も出來ないといふ考がある、殊に產業に就て最も政府を信仰し極力に依賴するの傾向ありて獨立して經營するの考へが少ない、殊に近年政府は財政の必要に迫られて頻りに官業の擴張をなすこと獨逸國以上てあるの事實を認めざるを得ない、それから富豪の慈善心如何と見るに、日本の富豪に對して英國の如くならんことを望むは到底空想に過ぎない近時富豪の慈善事業は發達の緖に就きたるの感なきに非るも之を獨逸に比するも尙ほ對等の下にあることを免れない。

又敎育ある失業者は現今は未だ多からざるも近き將來に於て非常なる數に上るの形勢は歷然として認めらるゝのである事實を輕んじ理想を重んずる我國靑年の間に社會制度を悲觀し富豪を嫉視するの思想の起るは已むを得ざる事と云はざるを得ないそれから工業に從事する勞働者の數の增加せることも旣に日清戰爭後に明なる事實であつたが今回の日露戰爭後に於ては更らに一層の速度を以て進むであろーと思はるゝのである是を勞働者の增加に伴つて、之を保護する施設は奈何なる現狀なるか社會政策の第一着步たる工場法すら未だ制定せられぬてはないか其他は推して知るべしてある是等の施設が到底五年十年の間に充分なる發達をな

すことは望まれないのである。此等の日本の國情を考ふると、餘程獨逸の事情に似て居る所があると思はれる。果して然らば吾國の社會主義の將來は有望である社會主義者が勇往邁進一身を犠牲にして社會主義を鼓吹せらるゝは其將來實に恐るべしと云はねばならぬ、我國朝野の志士は奈何にして之と對戰せんとするか、領土は擴張され、軍備は充實し、天晴れ一等國の伍に加はり、列强と覇を爭ふ我國は已に其内部に社會主義なる一種の病毒に襲はれ、氣息奄々たる病者となるの日遠きに非ることを知らば、誰か寒心せざる者あらん、今時に當りて豫め一方には社會主義を防止するの方法を講じ、一方には社會改良の畫策を立るは、實に經國濟民の急務であると余は斷言するのである。

明治政府の一矛盾

文學博士　三宅雄次郎

明治政府に矛盾とすべきもの固より多し、その重なるものゝ一は教育に關して之を見る。今や小學を卒業して中學に入り得ざるもの多く、中學を卒業して高等學校に入り得ざるもの多く、今年の如き、高等學校に入りたる千五百名に對し、入るを得ざるもの四千名に及べりといふ。此等の徒終にその方向に迷はざらんや、斯くて已むべきにあらず、何等かの處置なかるべからずとは、今日盛んに人の議するところ、惟ふに此趨勢は決して偶然に起りしにあらず。

明治の初年政府は學制を布き、家に不學の人なからしむるに勉め、兒童は必ず小學に入らしめざるべからず、聽かざるものは罰すと稱し、令は次第に行はれて就學兒童の多きを致し、その効果は著しく徴兵の上に顯はる、斯くあらゆる人をして就學せしむるは甚だ可、されど父兄が子弟をして就學せしむるは、一は人としての相應の性格を備へしめ、又た一は職業に就かしめんと欲するなり。職業の選擇に當りて何が最も都合よきかといふに、從來のところにては官吏が最も都合よしと多數人に見られたり、所謂人爵なるもの、爵といひ、位階といひ、勳等といひ、現今その上部を占むる

は概ね官吏にして、啻に官等の一位に居るものゝみに止まらず、施いてそれ以下のものも皆な應分の榮譽を受け、而して利益も亦た伴はずとせず。岩崎、三井に比すべきものあらざれど、元老連は概して一かどの財産家なり、資産のみを以て優に紳商たるに足る。位置の卑きは斯かる譯には行かざれど、さりとて官に就かずして、他の業務に從ひ居るものに比し、利益は頗る多し。官を離れて相應の事業を成し遂げたるもの少しとせざれど、之を企てゝ成効せず、或は全然失敗に了りたるもの、勝げて數ふべからず、同一の才能、同一の勞力を以てすれば官吏となる方最も捷徑たりと謂はざるべからず。會社又は商館に在りては、書記以上に上るの頗る困難なるに、官に多少の經歷を積めば、一躍して直に支配人又は重役と爲ることを得。同窓の友にてありながら、一方は初より忠實にその會社に勤めつゝある間に、他は突然官より來りて上位に就くといへる例珍しからず、大小に限らず、斯かることは頗る多く、地方廳に於ても亦た之を見る。榮譽と利益とが官吏に集ること此の如し、從て父兄が、如何にするが官吏となるに便利多きか、之を計りて子弟をその最も多き方に向はしむるは怪むを要せず。

小學の知識は言ふまでもなく國民に普及せしむべきものなれど、之だけにて職業上の競爭に堪ふること頗る困難にして、斯くて得たる職業よりは幾年かの辛苦の後中學を卒業して得たる職業の方割合ひ良し、中學卒業生の得たる職業よりは高等學校卒業生の得たる職業の方割合ひ良し、之に比し大學卒業生の得たる職業の方更に良し、大學を卒業するまでに要する費用は實に少からざるも、比較的よき職業を得んには此方最も確實なり。競爭場裡に立つには最もよき學校を出たりとの證明が、最も大なる力あり、啻に小、中、大と順序を追ふのみならず、同じく大學と稱するも、大學中の宗家と目せられ居る帝國大學の方が遙に他を凌駕し居るなり。文官試驗は凡ての人に對して門戸を開かれあるも、實際官廳に職を奉するものは多くは帝國大學出身者なり、他の學校の出身者にして勅任官となりたる

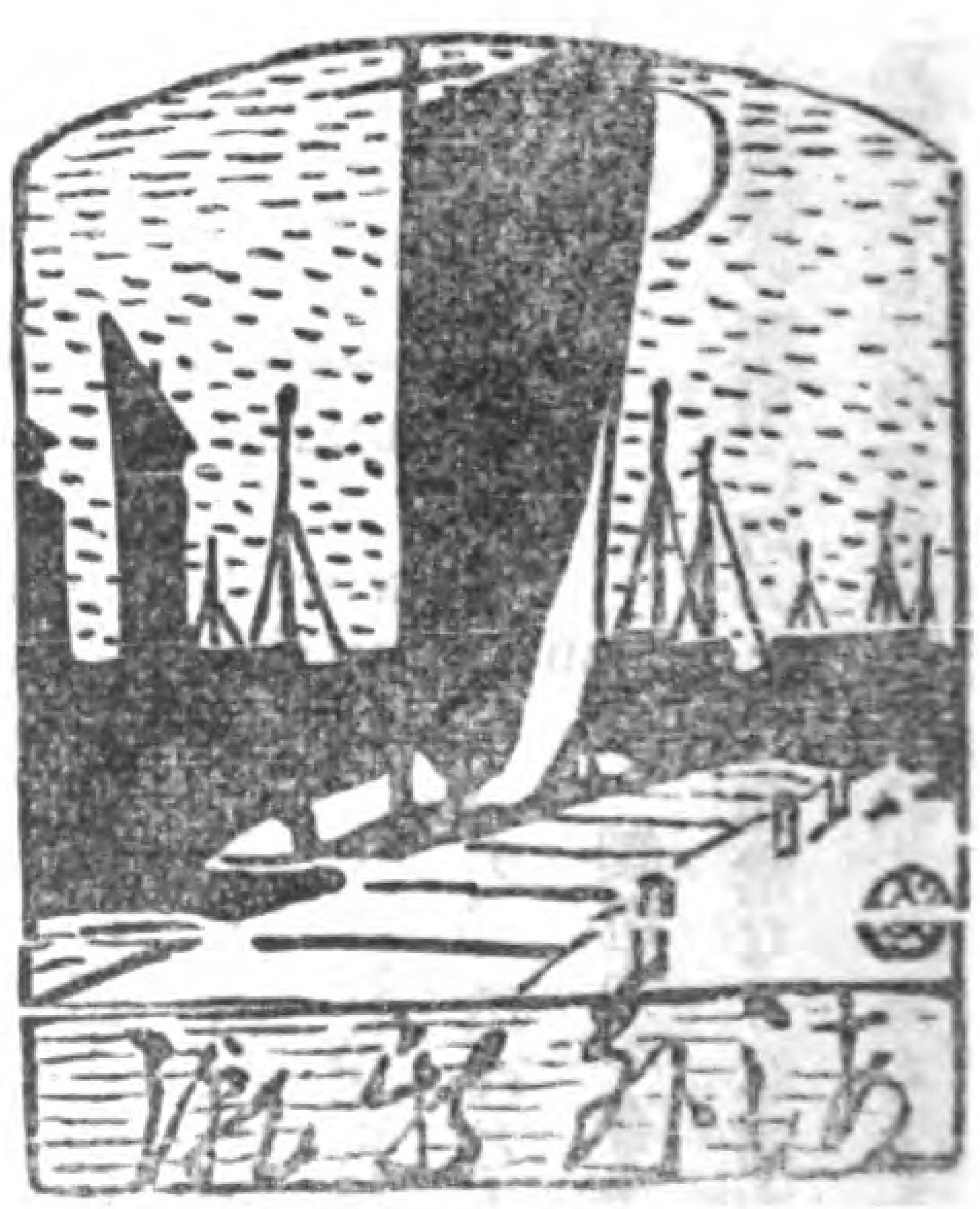
ものは極めて少きが、帝國大學出身者にして已に大臣と爲りたるあり、曾て官廳に多くの人を供給せし慶應義塾も今は殆ど斷念せざる可らざるの觀を呈せり。帝國大學卒業生とて方向に苦しむものなきに非ざれど、そは職業の性質若しくは俸給より考ふるところあるにて、何にもあれ擇ばすとならば、何處にも職はあるなり、私立大學卒業生の全然職を求め得ざるものとは日を同うして語るべきにあらず。勢此の如くなれば、兎に角帝國大學は卒業生に對して就職の可能を保證するものといふも可、中にも官吏となるに最も都合よく、現に世に噂するが如く、元老の後繼となるは多くその門より出てんとする有樣なり。されば全然教育費に堪へざるものは已むを得ずとするも、無理すれば堪へ得るものは無理するに若くはなし。故に小學を卒へしめたるものは無理して中學を卒へしめ、中學を卒へしめたるものは、無理して高等學校、それより帝國大學を卒へしめんとし、何時も志願者の數が收容せらるゝ數の幾倍に上るは、避くべからざる自然の順序なり。

政府が一方には强迫して就學せしめ、他の一方には凡ての名利を官廳に集めたるに原因し、此處に溢るゝまでの多數をして帝國大學の門に踏[illegible]せしむるに至る。而かも見よ、理科に入るの極めて少くして、法科に入るの頗る多きを、これ皆な名利を求むるに最も都合よきを思ふが故ならずや。然り、今のところ之に増して都合よきはあらず、然るに政府は此有樣を目擊し、何が故に斯くも高等の學を望み、又た法政の學に向ふの最も多きか、こは不心得なり、今少し早く實業方面に向はざるべからずといふは、抑もその因つて來るところを辨ぜざる言なり。實業界に投ずとしても、唯だ生活し得て足れりとせば可ならんも、多少位置など望まんものは、官吏となる方便利多し。官には人の力を保證する位階勳等なるものゝ存するあり、四位、三位、勳三等、或は二等といふものが、如何に大阪附近の實業家の信用を博し得るぞ、事の此處に至るはこれ政府が餘りに名利を一手に引受けたる結果なり。政府をしてあらゆる榮譽と利益とを壟斷することなかりせば、

何ぞ今日あるを致さんや。されど何時まで斯くて有るべきにあらず、今より少しく時代を經ば、官廳以外にも自ら名利の位置の生じ來り、强いて官廳に入らずとも活動の舞臺は他に隨處に存するに至らん。唯だ治者と被治者と懸隔ありし封建制破れて幾千もあらず、凡ての名利を政府に集むることゝなりたるが爲に、他の方面に於てその名利割讓を受くべき餘地未だ生ぜず、大勢は次第に移るとしても、今日は猶ほ政府萬能の狀態なり、之を英國に徵するに、彼國にても華族となるには官吏となるが最も捷徑にして、屈指の富豪すら爵を受くれば男爵なるに、內閣大臣にして多少の功勞あらんか、伯爵となるは難事にあらず、各國の勳章を受くる等その他種々の榮譽を專にするを得、故ソル、スベリー卿の如きは、受け得らるゝ限りの勳章を得て、それ以上に受くべき勳章なきに至り、遂には更に最も卑きものを拜受し、これが又最も榮譽とせらるゝに至れり。國の孰れを問はず、官に在ればさる點に於て便利多きは言ふまでもなきが、彼にあつては此等のこと、幾百年の歷史の附隨し居り、單に一階級の一儀式と見られ、名利を得るの便利は他の方面に甚だ多く、政府の上に立つものも爵位なかるべからずと限らず、全然これなくして大なる活動を爲したるもあり、ピットの如き、グラッドストーンの如きは即ち然り。爵位勳等に重きを置かず、一階級の一儀式と見らるゝ外、何等實際上の利害の伴はざる此の如きに至れば則ち可なり。受くるものは受けよ、受けざるものは受けざれ、何れにても妨げなしといふが如きところに在つては、人々豈敢て自ら好んで官廳に入り、却て窮屈極まる生活を送らんとせんや。

然るに我國にては人爲的に新に榮譽を作成してより未だ四十年に滿たず、その榮譽なるものは如何にも重々しく見られ、從つて利益も亦た此に伴ふ事情あり、遂に人々爭ひてこれに就かんとするの風を馴致せり。弊の因つて來るところを追求すれば實に此處に存すといへども、今更これを變ふるも難く、唯だ時代の推移に待つの外なし。されど舊に比すれば今は內閣にも無

爵者の數增加し來れり、或は遠からず、我は無爵者なりと稱するものも現るべく、時としては爵を授けられて辭退するものも有らん。板垣伯が曾て辭せんとして辭せざりし如きは誠に惜むべきことなり、今より後は受くることを餘儀なくせられたりなど觸れ廻はすものなかるべく、之に伴ひて榮譽及び利益を得る方面も廣まるべく、これを急速に望むべからずとするも、漸次に期し得べきや必せり。此處に言はんとするは、入學志願者が方向に迷ふに至れるは一に政府が之を致せるの罪なりといふことなり、人間窮極の目的は所謂榮譽及利益なるものに存せざるも、多數人の力を活動せしむるところのものは先づ此二なり、政府がこれを獨占しながら、而かも多くの人がこれを求めて官廳に入らんとするを咎むる如きは道理に於て甚だ矛盾すといふべし。(筆　記)



英人漸く日本を恐る

「デーリー、メール」

我特別通信員マッケンジー氏は海底電信を以て報じて曰く、極東に於ける英國貿易の進歩は日本の商業權獨占によつて劇烈なる阻礙を蒙りつつありと、而して此報知は倫敦商業團體を驚かすこと極めて大なり。

マーセオン會社の一員マクドナルド氏は曰く、數年來日本の商權は漸次膨脹しつゝありき、而して日露戰爭に於ける彼等の成功は疑もなく其自信力を高めたり。日本人は甚だ活動的にして且つ野心に富めり、而して彼等の勞働は極めて廉價也。加ふるに彼等は東洋市場の眞相を知悉するを以て、能く其需要に應ずる生產をなし得るの利あり。從來と雖も支那は其得意先なりしが今後滿洲及び朝鮮を通じて益々其販路を擴大すべし。又日本は戰爭中多數の船舶を買ひ入れたるが、彼等は總て之を利用

して貿易の發展に從事すべしと。

五十年以上日本と取引をなしたる一會社の支配人は曰く、予は未だ極東に於ける英國の貿易を以て衰微したりとは信ぜず、戰爭中我英國及び米國が日本に向て輸出したる額は實に巨大なり。現今と雖も兩國の日本に向て輸出する額は多大なるも、是れ來る十月より初めらるべき新關稅の豫想に基くものにして、實際に於ては漸次輸出の減少を來すべき傾向あるやも知れず。且つや日本は疑もなく未來に於て商工業に於て第一流の國となるべし、日本人は決して眠りて安んずる國民にあらず。予近來支那を旅行せるに到る處日本人の入り込めるを見たり。而して新聞、鐵道及び商業等は悉く日本人の勢力の下にあつて行はれつゝあり。彼等は嚴に己れの勢力範圍を定めて、一步も之に外人の侵入を許さざるなり。彼等は確かに極東に於ける唯一の生産者となり、支那人をして之が販賣を司らしむべし云々。



EXCHANGE OF COURTESIES BETWEEN THE SOVEREIGNS OF THE DREIBUND.

"Now we two have got together, we must not forget our third ally and remind him of our 'unalterable friendship.'"

—*Fischietto* (Turin.)

他の極東に於ける商業家は曰く、日本人は最も模倣に長じたる人民也。而して其勤勉なることに於ても確かに世界第一流國民の間に置くも遜色を見ず、彼等は何物と雖も之を模倣す。二三年前予は彼等に浚泥機を賣りたり、然るに現今彼等盛んに之れを製造し得。萬般の事物皆斯の如しと。

英國最大會社の一なる某會社の理事も亦曰く、彼等は日本に向て大仕掛の器械を多く賣りたり。大器械の製造に於ては彼等未だ我等の敵にあらず、然れども彼等は非常なる製造力を有する人民也、彼等は模倣力に富み、器械の應用に巧みに、非常なる忍耐力に饒かに——一言すれば工業的國民としての資質に於て缺くる處あるを見ざる也。彼等

は極東に於ける總ての工業に於て其猿臂を伸ばし、遂に吾等に打擊を蒙らすべし云々と。

記者曰く。以上數氏の說を見れば、孰れも皆日本の實業發展が英國のそれを阻礙しつゝあるを危惧するの感情明かに知らるべし。近く英獨兩帝の會見の如き何等政治的意味を包含せずと揚言するものから、誰若し一度極東の商權に及ばゞ、彼の鎧袖演說のカイゼル先生、豈にエドワード陛下に嗾するに以上の數氏の如き說を以てすることなかるべきや。暫らく疑を有して外交界の雲行を注視せん。



THE RUSSIAN PEOPLE ARE NOW AFFORDED AMPIE OPPORTUNITY OF EXERCISING THEMSELVES, BY BUTTING THEIR HEADS AGAINST A WALL. WE SHALL SEE HOW LONG IT WILL LAST.

—*Fischietto* (Turin.)

エズアルド、フォン、ハルトマン氏を弔す

『ベルクーネル、ベルゼン、クーリエ』

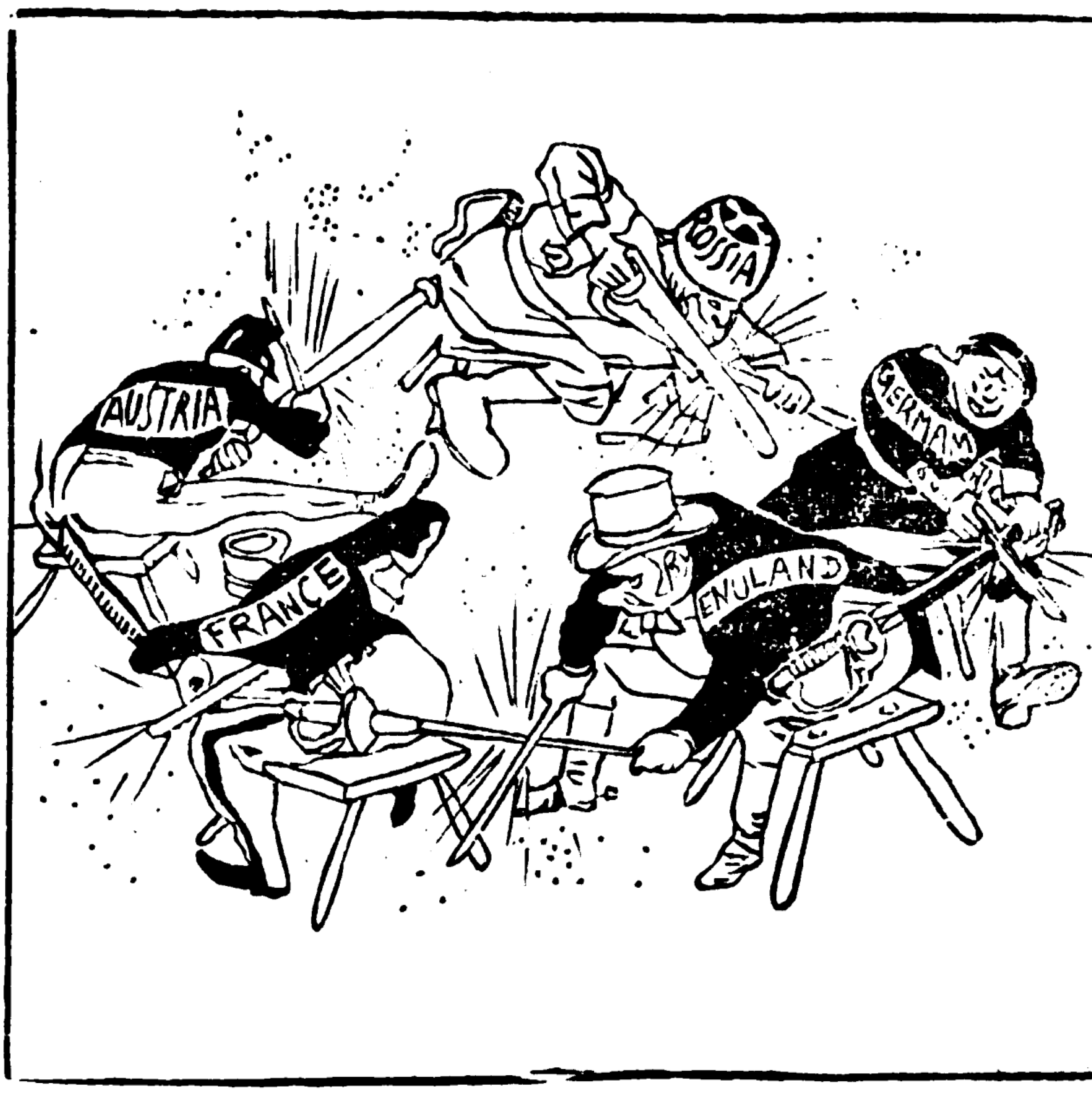
哲學界の一明星エズアルド、フォン、ハルトマン氏は六月五日、その世を隔てたる靜寂なる一僻村グロース、リヒテルフエルデの私宅に於て靜なる永劫の眠に入られたり曾ては哲學壇の一異彩として世界の學界に喧傳せられ論爭せられし、彼天才の哲學者が、今や忽然として吾人が新時代の視界より消え去りし事の事實は、その比較的長き時間の後に漸く公になりし報知と共に、著しく吾人の胸襟に感動を與へたり、卅六年前後の處女作「無意識哲學」(Die philosophie des Unbewussten)の出現は學界より如何に多大の注意を惹きしぞ、然して

そは著作そのものゝ内容と著作が出でたる當時の外部の事情との兩面の原因よりなりき、一青年士官たる彼がその軍帽と劍とを捨て、筆を執つて立ろに哲學上の一大著作をなし、猛然として哲學壇の初舞臺に乘り出でたる破天荒の事情は、先づ世人をして一驚を喫せしめしなり、この「無意識哲學」こそ實に嚴密なる意義に於ける哲學的著作なるなれ、こはたへてかの哲學史的乃至批評的述作にも非れば、又他人の著書より生れ出でたる再生物にもあらで、自らが獨創に出でゝ一個嚴然たる體系の下に建設統一せられたる權威ある世界觀なるなり、この無意識哲學なる語は、直に一種の普遍的成語となりて、偏く世界に流布せらるゝに至り、かくて深遠なる專門の哲學的批評と、淺薄なる三文雜誌の批評とを問はず、等しく多少の度に於てこの新世界觀――そはショーペンハーワエルが否定的悲觀的實在批評にも優りて力ある一個の新世界觀に對して、その論爭の鋒を向けざるはあらざりき、單調なる軍隊の生活より出でゝ、幽玄なる大宇宙の實相を納めたる神秘の堂奧に迷ひ入りし、彼の一青年士官の大膽なる提案がよつて惹起せし世の注意は、これ等の論難によりて毫も妨げらるゝことなかりき、製版は幾度か改められたり、その暢達にして花の如き文章は、説明の淸新と直截とによりて一段の光彩を添へたる「無意識哲學」は世の所謂一流の哲學的著作が絕へて達し得ざりし廣汎なる讀書界を領有するに至り、その用語と結構と説明方法とは全く在來の哲學者と撰を異にし、然かもこれが爲に毫も著作そのものゝ力と眞摯とを失ふことなく、讀者に無盡の興味を與ふると共にその思想界に與へたる影響また頗る深玄なるものありき、ハルトマンが憂愁なる世界觀の上には、彼自らが貫き生命の影の深く宿されたるを見る、この深刻なる頭腦を有したる一個紅顏の美少年は、その少壯時代に於て早くもその足部の重き疾患の爲に軍務を捨つるの止むを得ざるに至り、爾後常に病床と車輪椅子とにありて靜にその病を養ひしが、後年に至るまで遂に再びこれより立つこと能はざりき、然してハルトマンが哲學上の研究は實にこの病床の上に於て大成せられたりしなり、

ハルトマンはその「道德意識現象論」（Phänomenologie des Sittlichen Bewusstsein）に於て、就中その「無意識的實體」の根　思想たる意思と觀念との間の矛盾爭鬪を更に敷衍し解說し、その無意識の理想を多くの自然科學的研究の結果と一致せしめ、然かも同時にその無價値的世界觀が必ずしも世界の呪咀にもあらざれば、又實在の非定にもあらで、却て活動の新活力に歸着すべき所以を論證し、以て世の論難的批評に答へたり。

今より凡そ三十年前、嘗て一人の極端なる神經家が、ハルトマンが悲觀主義の誤解よりして、遂に絕望の極自殺するに至りたることありしが、その當時吾人同業者の一人の筆に成りたる、深刻にして力ある花の如き一論文本誌上に揭げられたり、その筆者は既に長く公法の研究より遠かりて、今は歷史的研究の方面に於て月桂冠を獲得せるの人なり、これに對してハルトマンは本誌と爭はざるべからずと信じたりき、何となればその論文は後の述作にも優りて、頗る力ある美はしき蠱惑的名文なりけ

ればなり、一個の哲學上の系統を法廷の前に出したるこの訴訟は、實にも當時世の多くの注目を惹きたりき、されどその論爭も間もなく終結を告げて、ハルトマンはその後本誌と全く和睦するに至りぬ、ハルトマンが體中には尙ほ一個の操觚者的脉管の通へりしを見る、その時代との密接なる關係に於て生活し、その時代の諸問題と科學的に併立し行かんことの必要を、切實に感得せる哲學者は極めて罕なり、然るに我がハルトマンは後に至り、その大著「宗敎哲學」(Religionsphilosophie)、及び「宗敎的意識」(Religiöses Bewusstsein)等の出版に次いで熱心に時代現象の諸問題に就いての研究に從事したり、靈魂論、學校問題、非猶太主義、社會的運動等は卽ちその主題なりき、尙ほその他吾人をして、その精緻にして深刻なる主張と、眞摯なる研究と、尊き勞力とを觀取せしむべき他の著作としてはかの「時事問題」(Tagesfragen)、「現代史」(zur zeit geschichte)等を數ふるを得べし、然るに氏はその晩年に至り、この時代思潮との交渉並に學識ある上流社會との關係を漸次喪失するに至りたり、斯くの如くにしてその無意識哲學は漸く新時代の人心より忘れ去られんとせり。



REDUCING ARMAMENTS.

No one will begin himself—he prefers to disarm his neighbor.

—*Ulk* (Berlin.)

　その名聲ある夫に最も從順に、最も獻身的に仕へてその間然するところなかりし氏が勝れたる夫人の管理の下にある、グロースリヒテルフエルデの故家に於てまたその善良に養育せられたる小兒等によりて、常に輝々しき活氣に充ちたる僻村の草廬に於て、リヒテルフエルデの尊き精神生活の中心をなせる、一個爽快なる、活氣ある、和氣靄々の團欒は、幾久しき歲月の間遂に變ることなき常住の姿となれり、かくの如くにして氏の夫人は實にハルトマンの悲觀哲學が、尊き生命の肯定に美はしき生活の享樂とに

全く一致すべき所以を事實に於て示したり、著しき特長ある頭と波打つ美髯とを有するこの哲學者は、その生れ故郷伯林を訪ふことは極めて罕なりき、氏は藝術界に於ては著しき所領を有せざりき、されど尙ほ氏の手によりて物せられたる二三の劇詩あることを記せざるべからず、それは元よりカル、ロベルトなる匿名の下に於てなり。

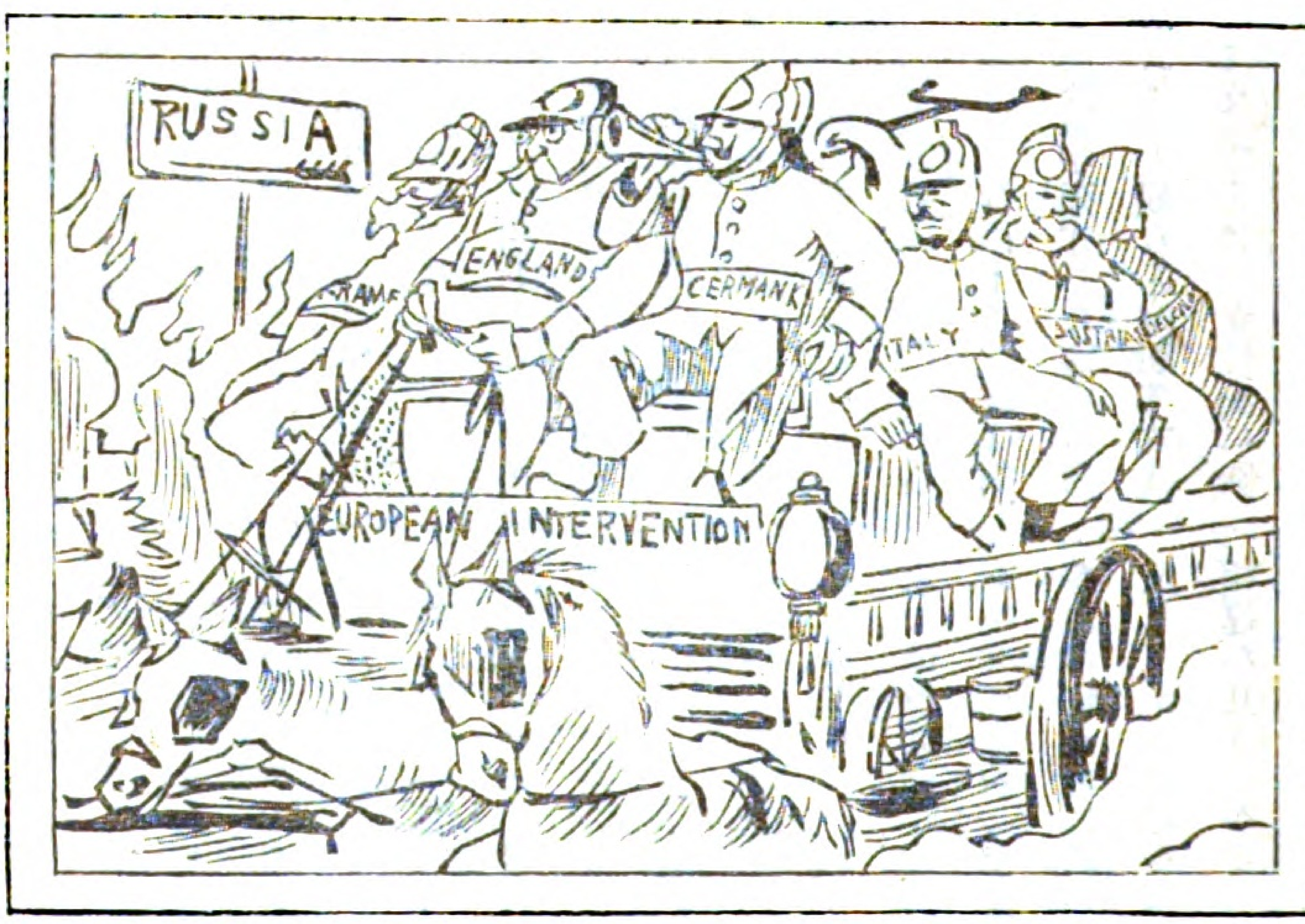
漸く六十四歲にして世界的名聲を有し、世界的批判を受けし大哲學者と化身したる昔の近衞砲兵の一士官は、今や夏夜の流星の如くに消え去りたり、最も出色ある特長ある現象として、氏が生命は永く哲學史上に止まるべし。

トルストイの近業譯せらる

（エヒヨー）

レオ、トルストイは多年の胸算を「日々のつとめ」（ドレスデン、カル、ライスネル版）と題せる一部の書に纏めて上梓し、專ら當來に於ける高尙なる修養敎化の道を說いて、近世人類の處世訓たらしめむとせり、而して其眞摯なる思想を表はすに格言風の文體を以てし、各人が年中日々の行事を示して、惱めるもの疑へるものに慰藉と信仰とを與へむことを期せり。幽遠なる玄理を說けども筆端常に無限の興趣を湛へ、平易なる物語風に物せるを以て、童幼婦女と雖之を讀んで通卷暨く事を知らざらむとす。或は諸國民間の格言を涉獵し、或は古今宗門の龍象逵が非情の草木をも動かしむる底の金言偉蹟に參尋し、或は幾多乾燥なる哲學系統を網羅し盡して、這裡自家の感想信念と相適ふものある時は、周匝の用意を以て掘り取り來り、之を自家園中のものとして栽培せり。故に吾人一度この書に臨まん乎日本、支那、古印度の賢聖は儼として吾人に對し其大精神を披瀝すべく、伯希來の法典は其寶藏の秘扉を開きて、聖書と相駢んで近代幾多の哲人は又吾人の面前に立つて其長廣舌を揮ふを見る。則ちトルストイは斯書中に於て自家獨創の敎儀を以て吾人に敎へむとせるにはあらず、自家の胸臆裡に蘊蓄せる信念の閃きを以て吾人の肺肝裡に信仰の殿堂を築かむとせるにもあらず、秖だ古聖賢が示せる蹤を辿り、踏來れる道を指して之を吾人に說けるに過ぎず、されば渠獨特の思想感情の柱礎を高く雲がくれして、冥々の間に動もすれば發露し來らむとして來らざるの感あり。之れを讀むに當て讀者の心得べきは此等柱礎の依つて確立するを得べき自箇肚裏の大盤石が、如何ばかりの載積力を有せるかを意識して、此箇々の柱礎を取つて自家腦中に於て一大伽藍を經始せむ事是也。トルストイ說いて曰はく、爾は土地の私有を以て一大慘事と心得べきぞ。心せよ各國政府は恐る可く危險なる制度なるを、何者政府を組織せるものは市井の無賴及び適ま惡運の機に綠て贏ち得たる此等無賴漢の後裔の烏合なればなり。忘るとも夢人と事を構へ、法庭に黑白を爭ふが如き振舞をすな。一片たりと雖生物の肉を口に上すべからざるぞ。戰にまれ戰に關れるものにまれ苟且にも爾が手を之に下すべきにはあらざるぞ、假令衞生隊にたりとも加はることあるべからず。法律、牢

獄、病院、瘋狂院、かくの如き物は災厄を癒すべきものなるに、却りて之を募らしむる惡制度たることを深く思ふべきなりと。今若し吾人にして現在此等の教儀を一貫せる感想の端緒を得たらむには、吾人は自然科學に於て採用するが如き思考の方則に對し、又苦心慘憺の結果として蒐集組成せる復雜精緻なる文明の諸機械諸裝置に對して、渠がいかばかり隱忍嫌惡の體度を以て臨めるかを把捉するに苦しまざるべし。此トルストイが叱唾怒罵せる近世風の世界觀に從へば、人間の本然地立びに毫も感覺なしとも見ゆる天地其物とを除いての森羅萬象は、一として科學的論理的に證明せられざるはなく、理智の明鏡の前に一絲違はざるの眞相を顯じ來らざるはなし。故に此種の世界觀よりせば或は饒趣幾多の觀察を這裡に試みて盡くる所あらざるべきも、眞に日常生活の必須なる精神は遂に求め得べからざりし、抑宇宙萬物の體用は秖り神の示せる目的に手段たるの外、何等存在の意氣なしと觀じ來る時に於て、始めて人世の眞相は解せられ人世の眞趣は表はれ來るものなれど、神の本體の研究及び其目的は到底人智の及ぶ所にあらざるものなれば、此等の工夫は暫く之を措き、只吾人は凡ての生物の一大同團結中に一人として存在せるものなりとの意識を持し、知足安分と自己向上とを常に離れずして、吾人刻々の責務を償却し、自家の事業福祉と内心無雜の安慰とを見出でむことを力むべきなり。此高倘なる精神を體したる人はかくの如くにして進化説の意義を蔑如せる所に於て趕はれ、萬物を道德的方面より觀察することの必要より趕はれ、國家を敵とし文明を敵として吾主義を歩むで屈せざる所に於て趕はれたるを知るべし。本書の獨譯はオイゲン、ハインリヒ、シュミット博士の手に仍て成る。トルストイ自身も此譯の忠實にして自箇が思想の首尾名殘りなく傳へられたるを賞嘆せりといふ云々。



WILL THE EUROPEAN FIRE BRIGADE HAVE A CALL TO PUT OUT THE FLAMES IN RUSSIA?

—*Fischietto* (Turin.)

東洋人種の女性觀

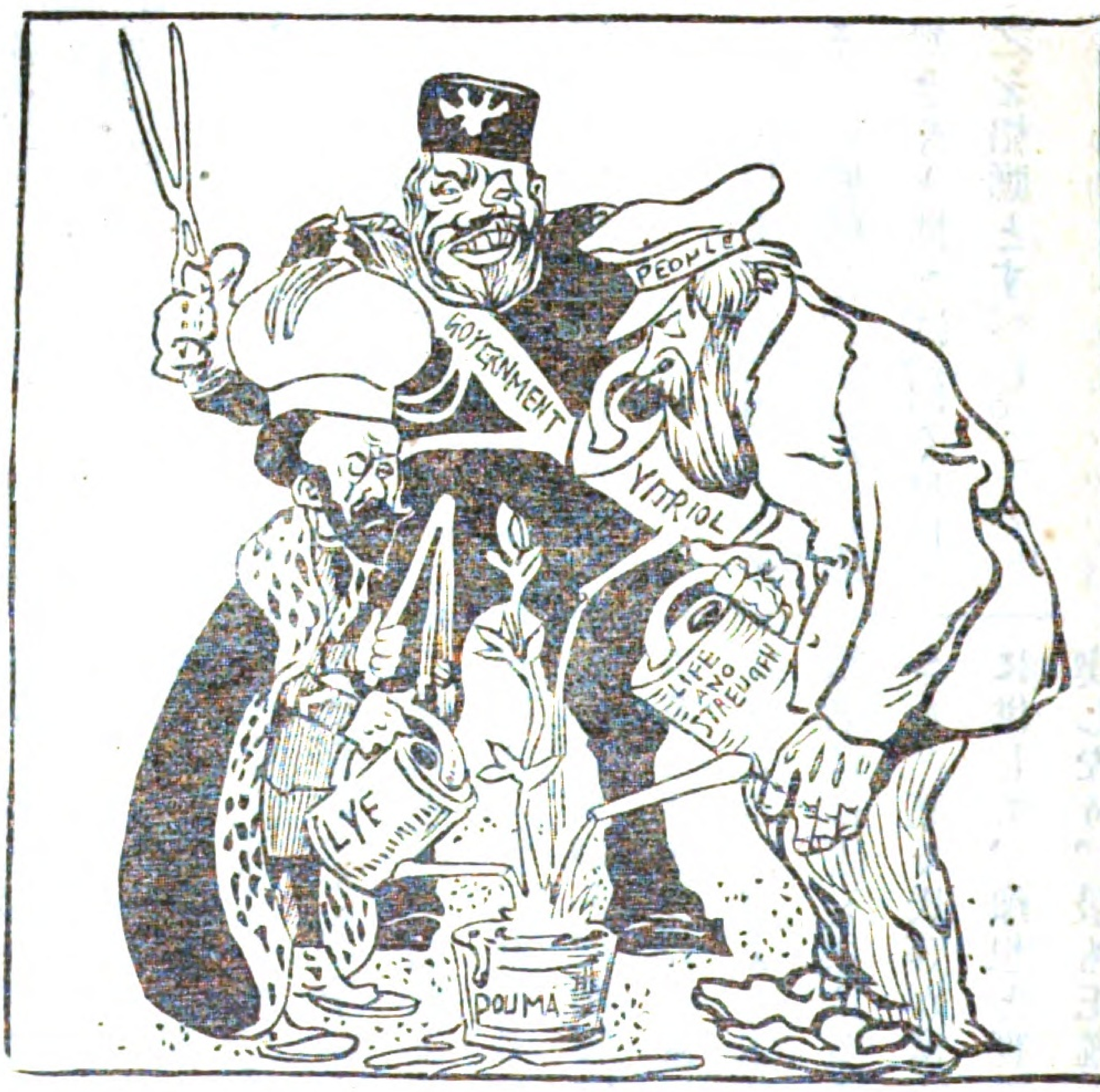
（エヒヨー）

陸軍々制といはず、戰鬪艦といはず、將又た速射砲といはず、日本人の有する所は皆な一として歐洲大陸より學び竊ひ得たるものたらざるはなし。加之辨髮編の股衣やシルクハットや之を襲套して恥づる所なし恰も猿狖の人眞似に異らず。更に進んで彼國土の著作者は、歐洲文學の傑作を自家の藥籠中の物にせんと欲する世人よりはとく〳〵閑却せられたり。殊に近時に至つては、其隱忍不撓の天性よりして古く倣用したる漢字をも廢し之に代ゆるに羅馬字を以てせむとする企さへありといふ。されど渠等とても全然歐洲崇拜といふにはあらず、或範圍に於てはミカドの臣民は其傳來の慣例を株守して偏に破らむことを恐るゝものゝ如し。則ち日出國に生れたる男兒にして、女性の美に就ては歐洲人の思想を趁はむとしたる例は吾人まだ一度も之を聽かず。その祖國と大英國との門に釘結せられたる堅き同盟の誇りより、ミカド陛下の忠實なる臣下は、或は獨逸に對しては香港を、露西亞に對しては印度の國境を死守して悔ゆる所なけむ、さり乍ら吾人が渠日人の英國婦人を美なりと觀むことを期するは百年河淸を待つに類す、渠の沒我と雖鼓までには及ぶとなし。女性美に關する吾歐洲美學の根本原則が「絕東」の人々に感化を與へ其舊來の根帶を動かすべき、此誰强ゆるなき毛嫌の情もエフ、ボイル氏に在つては極めて當然の事とや見えたりけむ。されば氏は「グランド、マガヂン」中に說をなして曰はく、「黃色の光澤を有せる肌膚、細小の眼、極めて廣き下唇、人形然たる面つきの丈低き日本女子と、若々しく體格の魁偉を以て人目を牽く可き强く逞しき英國婦人との間に存する對照は、日本人をして無限の感を催さしむべし。人前をも憚るべき此種の質問をも敢てするが如き不作法なる人々に答へたる岡倉(?)氏の所答は明かに此、大和魂について倫敦に於て大好評をも博したる博學の教授をして、自家所思の凡を高聲に訣り出てしむるには遠慮に過ぎたるかを思はしめき、氏も流石に五呎六吋の英國美人を初めて眺めたる時は掩ふべからざる驚嘆の色を表し居たりきと。事實を爭はんは兒戲に類するをいかんせん。東京にて名ある美形中の美形も年少の英國人の情緒には全く深き印象を止めざるべし。然も一日本人のあるものには腹臟なく語るに於てハアリピオン(英國の古稱)の娘子の尤なるをも實に厭はしく醜きもの也と揚言するに躊躇せざるべし。いかなる國の人民と雖尙他に異れる美の望想を有せるもの也。溫厚從順を女房氣質の第一義と心得居る日人は變化乏しき圓形の輪廓を有せる貌、毫も稜々しき線や直線の有せざる貌にして、氣品と愛嬌とを內に包み外に仄めける如き物と稱して絕世の佳人なりと嘆賞す。之に反してかの地球を家とせる人民則ち英國人にあつては、兩性間に太しき相違を見ざるを主義となせるが故に、要としては世界に制超したるの人種たるべきものを求む、即ち身長高く究强の體格を有し截然たる直線より成れる貌の輪廓、並びに炯々として輝き亘れる双の瞳。

露國軍人の日本に對する惡感情

「東京朝日新聞露都通信の一節」

遠き未來の事は暫く措き今は專ら露國朝廷及軍人が所謂極東に於る「日本の驕慢なる主張」に付如何なる意見を抱けるかを見るべし極東の現狀は露國の有力なる政治家にとりては極めて不滿足の狀態に在ること疑ふべからず露帝が本野公使を大使として迎ふることを好まざりしは列國が如何に日本に對するに拘らず露國のみは日本を「相當の地位」に抑へ置かんと試みたることを示すものなり軍人殊に陸軍軍人に至つては其の日本に對する惡感情を吐露するに毫も憚る所なし北は彼得堡より南はオデッサに至る迄到る處の軍人俱樂部に於て「復讐」の談は盛に試みらるカウルバルス



POOR DOUMA!

It is to be questioned whether this tender plant can stand such handling long. —*Nebelspalter* (Zurich.)

將軍は近頃日英同盟の存在する間は英露協商などは思ひも寄らずといひ日英同盟の期限の盡くるを待たず日本を一擊して復起つ能はざるに至らしむへしと豪語せしことあり／

オウエ、ウレミヤが公表したるレンチンカンプ將軍の演說も亦陸軍軍人間に行はるゝ意見を窺ふに足るべきもいなり露國外務省は之を取消したれども陸軍々人は善くこそいひたれ却つて將軍の放言を喜ぶもの比々皆然らざるは無し要するに目下露國軍人の意向は過般の敗戰を以て是非もなしとすると同時に忍耐して以て他日再び日本と戰ふの準備を爲さゞるべからずといふに在り。

露國　少くも露國軍人の日本に對する意向此の如し。



我観富士

嶽麓瀧河原に於て　伊藤銀月

▲塵紙の紀行

八月十三日、富士山麓瀧河原の與平治が家に在りて此記を作る。

予が携ふる所の紙既に盡きしを以て、主の叟に之を求むれば、塵紙の半紙大なるもの數帖を、無雑作に攫み出して與ふ、是以外に紙無きやと問へば、曰く無し。塵紙の紀行、予が拙文は之を相應とすべし。

▲筆を執れる所以

富士山の歴史、其風景、其氣象、其地質、其植物等の、文學的描寫及び科學的研究は、既に多くの人に試みられたり。

故に、富士に就いての諸般の題目は、世人が新たに予に聞くを要せずして知了せる所也、予も亦屋上屋を架するの愚を敢てするに忍びず、且つ、徒らに天の字、神の字、仙の字、靈の字、秀の字、崇の字、高の字、美の字を臚列して、浅薄なる感情を吐露するの稚態にとゞまるべく、予は少しく年を取りたり。

然れども、富士を主題として刊行せる書籍其他の印刷物より發見せらるゝ誤謬は、其作者の不注意より出でたるものと、頭腦空疎にして精透なる観察をなし得ざるより來りたるものと、爲めにする所ありて故意に作成せる虚僞より生れたるものとの別を問はずして、讀者に損害を與ふること甚だしきもの也、現に予の如きも、某々氏等が富士を紹介するの書籍印刷物を參考に供して、豫想と實際との齟齬に少なからざる驚愕を喫したり、最も正確と信ぜらるゝ案内記にも、一回經驗して直ちに指摘し得る重大なる誤謬を發見せり、是れ予が富士に就いて筆を執るの陳腐を厭はざる所以

也。

加之、富士紀行家の殆んど全部は、秀靈崇高の讚美に忙はしくして、讀者の必要と興味との爲めに必ず記述すべき好題目を逸せり、予は之を遺憾とせざるを得ず、其他普通のありふれたる題目にても、予として特に著しく興味を感じたる點は、之を道はずして已むこと能はず、是れ予が富士に就いて筆を執るの斬新を喜ぶ所以也。

▲例を擧ぐれば

不注意より出でたる誤謬の一例を擧ぐれば、案内記其他の書籍に登山の路程を記すこと精確ならずして、御殿場より太郎坊に至るの間に於てさへ、御殿場瀧河原間を廿八町とも云ひ、一里餘とも云ひ、瀧河原より馬返し迄一里三十町と云ひ、馬返しより太郎坊迄十六町と云ひ、或は瀧河原より太郎坊迄二里とも云ふ、是れ剛力其の他村夫行人の告ぐる所を基礎とするものにして、いゝ加減に云ふ所をいゝ加減に傳ふるの弊也、廿八町と一里餘とは非常の差違なれば、注意して路を歩まば、直ちに其何れかの誤謬なるを發見するに難からざるべし、實際、御殿場より瀧河原迄は一里八町にして、瀧河原より太郎坊迄は一里三十二町十間と云ふが精確の里程也、二十八町と聞いて、最早瀧河原に近からんと思ふ所迄行けど、瀧河原は是より更に十六町の彼方に在らんとは、何人も倦厭の情を催さゞるは無かるべし。

其他、瀧河原、馬返し、太郎坊、何れも宿泊の便を有し、就中太郎坊の宿舍最も廣くして淸しなど記せるものあれど、太郎坊は一室雜居にして、登山の客に家の中を通行せらるゝ、門長屋の變種也、之を普通宿屋の設備ある瀧河原與平治茶屋に較ぶべくもあらず、富士の域内に入りてよりも、何合目の石室最も宿泊に適すなど、己れ自ら總ての石室を比較研究したる上なるが如くに云ふ者あれど、これこそ當てにならぬ事の頂上也、彼等は大抵剛力の云ふ所を其儘鸚鵡的に傳ふる者にして、剛力と石室とは果して相結托しつゝあらざるか、此兩者の間に果して淸潔ならざる利益的關係は

あらざるか等の問題には、毫も注意せざる也、故に、四合目の石室と親しき剛力は四合目を好しと云ひ、六合目と深き者は六合目に過ぎたるは無しと告ぐ、之を正直に信用しては大まちがひ也、之と同時に客は五合目に於てへト／＼になり、此所に投宿せんことを望むの情渇者の水を求むるが如くなりと雖も、之に從へる剛力にして若し七合目と結托しつゝあらんか、彼は其利益の爲めに、客を欺き客を嚇かし、無理に引きずり上げて、其上の六合目にも入らしめず、何がどうあつても七合目にたゝき込まざれば承知せざる也、而も不案內の客は剛力の言を信じ易く、輙ち七合目を以て山中第一等の宿舍となす、其淺薄憫笑すべからずや、其實山中の石室には上等も下等も無し、たゞ頂上に近づくに隨つて設備を減じ行くのみ、運搬の不便より來るの結果也。

　頭腦の空疎なるより誤謬を傳ふるの例は、六合目以上の日の出、絶頂の光景等に接して起るの感情をば、普通の美感快感と混同して人に語る事也、空氣稀薄にして物の色異なり、脈搏急に呼吸迫りて、云ふべからざる一種の惡感に心身を領せらるゝは、如何なる人も免れ難き共通の事實也、決して適度なる空氣の中に於て、適度なる姿態色澤を保てる山水草木に對するが如き、純正の美感快感を起し得るものにあらず、起し得るは痛苦を伴へる崇美の感のみ、たゞ高所にあらずんば接すること能はざる異觀に好奇心を滿足せしむると、地上の最高所に立てりてふ誇負心に依りて意氣を壯ならしむるとの利ありと雖も、之を普通の美感快感と混同して傳ふるは愚昧也。

　倘ほ他に前と同じき一例は、御殿場より太郎坊に至る裾野の風景を非常に美なりと稱する者あり、曰く、草花咲き亂れて錦を舖きたるが如しと、其後富士の裾野は、下界の菜の花畑の如く、百花園の秋の如く、眼を迷はす光景にあらずして、荊棘と雜草との間に點在する種々の草花を見るのみ、色彩鮮明なりと雖も、離れて之を望むべきものにあらずして、一々就いて其趣致を味ふべきもの也、而も撫子と男郎花（をとこへし）とを多しとな

す、御殿場附近には女郎花の黄なるを見れど、裾野の中心の最も花に富める所に至りては、唯男郎花の白きを見る、黄も白も區別の附かぬ紀行文家の多きには恐れ入りたり、且つ、裾野は唯だ路を歩みしだけにて絶景と感じ得る土地にあらず、路を歩みしだけならば、東京より御殿場に至るの間、藤澤以西汽車の窓より見る所盡く裾野に優るの好景也、但し、裾野の中、眞に何れの名勝も比肩し得べからざる絶景の部分あるを知りたる上にて此言をなす者ならば、予は之を尊重するに躊躇せずと雖も、憾むらくは、甲先生も乙文豪も共に通り一遍の盲目的讃嘆者に過ぎざるを、予は後項に於て諸君に裾野の或る絶景なる部分を紹介せんとす。

終りに、爲めにする所ありて故意に作成せる虚僞の案内記の一例を擧げん、本年七月に發行されたる「富士登山案内」てふ冊子あり、御殿場の人の編纂に屬し、其精確にして、客に必要なる條項を網羅せること、文士連が皮相なる著書文章に優ること數等なりと雖も、剛力の事を記して「古の雲助流にあらず親切叮嚀を旨とし途上の案内は勿論中途の疲勞を慰め山醉ひを助くるなど頗る義侠心ある者多し」と云へるが、甚だしき我田引水也、其實、剛力の惡風は急に嚴重なる制裁を加へて改めしむべきもの也、警察の監督を要するもの也、此案内記の本文を正反對に解釋して、始めて剛力の眞相を明らかにし得べし、彼等は、事に托し物に頼りて金錢を貪り、客と宿舍との間に立ちてコンミッションの多少を爭ひ、客の痛苦を意とせずして己れが利に歸する所に導き、客が山上の事に熟せずして、光景の凄慘なるに畏怖心を生じ、氣象の變化に身體の調子を損じたるに乘じ、或は柔に或は剛に、締めつ搖りつして搾り枯らさんことを要する者也、後に至つて其事實を擧ぐべし。

▲予と富士

順序として、予と富士との交渉の顛末を略敍せざるべからず。

三十九年八月十一日午前六時新橋を發し、同十時十分御殿場に着す、下車して直ちに草鞋を着け、蠅の如

くに群がり蜘蛛の如くに網を張る剛力の重圍を切り拔け、一領の單衣、一着の股引、頭に麥稈帽あり、背に綠立蓙あり、此外何の準備無くして、飄然として御殿場を出づ。

御殿場より裾野を行くこと一里八町にして瀧河原に至る、旅舍富士本屋通稱與平治茶屋に於て午餐を喫す。瀧河原より太郎坊に至る一里三十二町十間、太郎坊に於て茶菓を喫し、鷄卵を啜り、繪葉書と金剛杖とを買ひ、故らに徐歩して登る。

既にして日暮れ、三合目の石室に宿す、方に七時、霧深く氣冷か也、蒲團を被りて粗糲の飯を食ひ、箸を投じて即ち臥す、半醒半睡の間に在ること數時、十二日午前二時、起き出でゝ一碗の水に嗽ぎ、飯して後徐ろに發す、霧未だ散ぜずして寒甚だし。

五合を過ぎて霧散ず、六合に近くして日出を觀る、行く〳〵下界の亂雲怒濤の如く起伏せるを貪り看つゝ、六合の石室に入つて憩へば、主叟告げて曰く、貴客何ぞ幸運なる、此の如き日出の美觀は今年未だあらざる所と。

十二時頂上に達す、銀明水を飮み、火口を俯觀し、淺間社に詣り、石室に入り、草鞋を棄てゝ足袋を脫せず、石の如き蒲團に包まれて熟睡すること一時餘、起き出でゝ鷄卵の半熟を命ずれば、三十分を費して纔に成る、甘酒は聞きし如くに旨からず、白湯に却つて好味あり、焚火に煖まり、繪端書に頂上の印を乞ひ、金剛杖に鐵印を打込ましめ、而して後蓮花の二三瓣を踏破し、直ちに降路に就く。

八合に至つて大に瀉す、頃日腸を病みし結果也、然れども、之が爲めに頭忽ち輕く、神氣爽然、朗吟して七合に降る。

七合より砂走りを飛奔直下し、再び霧の大に起るに遭ひ、濛々の裡を三合の石室に降れば、草鞋は何時しか散り失せて、足袋も亦痛く破れたり、新たに草鞋を購うて再び飛奔し、二合二勺に至つて止む。

太郎坊に至れば日將に暮れんとす、梨子を喫して憩ふこと十數分時、天全く黑し。

これより黒夜の裾野を走ること一時餘にして瀧河原に至り、與平治茶屋に投宿す。

据風呂に浴して始めて我の我に歸れるを覺ゆ、此に於て予と富士との交渉了る。

十三十四兩日滯在、十四日與平治樓上に在りて此記を作る。

◎富士の社會的生活

太郎坊を一端とし、頂上の石室を他の一端として、其間に散在する各合の石室を連結せる蛇行線は、一面より之を見れば、飛び〳〵に人家ある異型の村落也、之を平面の上に展開すれば、信飛羽越の山中には此の如き村落を見ること少なしとせずと雖も、下方より上方に向つて延長しつゝあるが故に異型なる也、而して此村落の住民（七八二ヶ月間に限れるにもせよ）の生活、其營業、營業の華客たる登山者及び營業の幇助者たる剛力等と交渉受授の狀態は、頗る觀察描寫に價するに、之を試むる者無きは怪しむべし、之を試むる者無きにあらずと雖も、餘事として極めて輕々に着筆し去るは怪しむべし、是れ興味ある問題也、而して是れ重要なる問題也。

剛力の相語るを聞く、一人高聲に叫んで曰く、『停車場から富士山（サンと云はずヤマと云ふ）の頭迄、俺ア始終悄まれ役だ』此一語、腐敗せる俗惡の空氣が名山の頂上迄漲りつゝあるをトするに足るべきもの也。

石室とは、石にて造りたる室にあらず、天井低く、柱太き木製の小舍に樺皮の屋根を葺き、石を積みて三面を包みたるもの也、中には板を舖きて、廣きものと雖も十坪に充たず、板の上に筵あり、筵の上に薄く堅き蒲團を舖き、客も剛力も小舍の者も、押合ひへシ合ひ重なり合ひつゝ臥す。近頃は婦人小兒の登山の流行となりたるを以て、猥雜殊に甚だし、太郎坊以上に至りては、世界の全く異なれるが故に、一面識無き者と雖も互に親しみをなすのみならず、忽ち狎れて相戲れ易きを免れず、宿舍の一夜、褻瀆の語四もに起り、剛力輩亦客に和して終に客を壓倒し、放屁となり、立狪となり、顚倒となり、嘲笑となり、人をして勘忍袋

の底を破つて大喝一聲せざる能はざらしむ、水を惜むが故に碌に硏かざる糠臭き飯に、一椀の醬油汁、汁の實はトロ、昆布に麩、之に鰹の干物の蛆に吸ひ枯らされたる一枚を添ふるが晩餐、朝も同じ醬油汁にて干物を添へず、これにて宿料五十四錢、此外、梨子あり、鷄卵あり、罐詰ありて、客の需めに應ず、鷄卵一個五錢、草鞋一足五錢、されどこれは三合目の相場にて、上に至れば六錢となる、六合目にて水を呑みしが一盃二錢也、然れども、食物の粗惡と其價の貴きは驚くに足らず、交通運搬の不便より來れる當然の結果なれば也、たゞ忍ぶべからざるは、剛力と石室と結托して、客に宿泊を强ゐ、食物を强ゐ、不當の金錢を貪つて飽くを知らざる事也、客にして若し山の事情に通曉し、若しくは事理を解するの頭と是非を辨ずるの舌とを有して、一段彼等より上は手に出づる時は、彼等は唯々として命の儘にすべく、爾らざる時は何所迄も附け上がる也、予は、七合目の石室に於て、五十許りの婦人が、山の如き黃粉餠を需めざるに侑められ、纔に半個を食つて全部の價數十錢を請求せられ、少なからず憤激せるを見受けたり、又、剛力輩が互に相語りて、六人の外客を二圓宛にて宿泊せしめ、石室に强請して其半額を刎ね得たるに誇れるを聞きたり、猥褻と强慾、斯る俗惡の空氣が、富士の頂上迄吾人を包んで散ぜざるに至つては、折角名山に對して起さんとする崇高の念も、之が爲め大に妨害せらるゝを如何ともすること能はざる也。

極めて滑稽なりしは、他の客に隨ひ來りし剛力と、偶然二合目のほとりにて道連れとなりしに、彼は切に予の爲めに風呂敷包と草鞋とを提げんことを乞うてやまず、之を謝絕すれば、彼は故らに道無き所を進みて、予を薄暮の霧中に迷はし、呵々大笑して身を上方に沒し去りぬ、三合目の石室に至れば、更に他の剛力ありて予が爲めに草鞋を解かんとす、予之を辭すれども肯かず、予が一隻を脫する間に彼は他の一隻を解き、緖を結びて之を一隅に置けり、翌朝發するに臨みて、彼は更らに予と交涉を開かんことを要するの眼光なりし

を、隙かさず機先を制して、前宵の謝辭を述べ、十錢銀貨一個を與へて彼と絶縁するの意を暗示すれば、彼は手に取りて不滿の色あり、默して退いて竟に再び言はず、彼等が陋劣の態、笑ふべくも亦憎むべし。

頂上の神祠だけは特別なるべしと思ひの外、此所も唯だ御賽錢を取る所也、御符を賣る所也、一判一錢づつにて端書に頂上の印を押す所也、錢を取つて有難うと點頭する所也、社殿修理とかの寄附金を勸誘する所也、拜んでも拜まなくても構はぬ所也。

神祠と屋根續きなる石室の中にて、三馬一九の材料に供せられし以來未だ毫も進歩せざる滑稽劇を見たり、四十餘りの男三人何れも上方詞にて、自ら京都の者と稱す、飯を請求せしに、小さき梅干二個と例の鯵の干物一枚との副食物あり、彼等は之を不要なりとて膳の外に排斥し、鑵詰の空殻に入れ來りたる煮豆を出だして、雀の如く突ッつき食ふ、既にして勘定と呼べば、石室の若い者二十五錢宛と答ふ、此に於て、富士の頂上に於て京都者と石室との喧嘩は始まりたり、曰く、副食物は最初より箸を着けず、曰く、爾らば副食物の價五錢を減じて二十錢となさん、曰く、我等は一人一碗宛の飯を食ひしのみ、一碗の飯が二十錢とは無法也、曰く、富士の山にて一膳飯は賣らす候、一盃食はうが十盃食はうが二十錢は二十錢也、曰く、爾らば剛力を呼んで我等の代りに食はしめん、曰く、人が代れば更に二十五錢を請求す、曰く、そないなアホらしいことありやへん、曰く、三國一の富士の山の頭を何所だと思ふ、寢惚け眼をこすつて見ろ馬鹿野郎と、終に京都の敗に歸す。

今少しく山の尊嚴を保つの方法を講ぜよ。

御殿場より往復十三圓五十錢其他駕舁夫の食料宿錢草鞋代等を持ち、悠々道中駕に乘つて登山を試みし婆さんあり、七合目に至りてモウ澤山だと云つて返る、而もへらず口をたゝいて曰く、あすこ迄行けば大抵山の樣子が分かる。

七合目より剛力の背に負はれて登りし六人連れの婆さんあり、背負子と云ふ椅子の如き形の物に肩掛を敷

きて逆に跨がり、重き縕袍を着込みたる、何れも肥り肉の婆さんなれば、總體にて一人十五六貫はあるべし、それを背に載せて、空氣稀薄なる胸突の險を登る、流石は剛力の名を辱かしめぬ實ありと、半ばは敬服に傾きしが、七合より頂上迄僅かの距離を往復五圓の背負賃にて、而も強ゐて勸めしものと聞いては、やう〳〵出掛けし剛力崇拜熱、再び氷點以下に降りぬ。

最も可笑しかりしは、予が瀧河原に宿とりて、梶野の觀察をなしつゝある間に、御殿場より來りて同じ家に泊りたる者あり、大磯とかの金持の息子にて醫者の免狀を持ち居る者なりとか、剛力の外一人の従者を伴ひ馬に乗りて來りしが、日も暮れぬに、これより行くことは厭になりたりとて、與平治方に馬を停む、富士の見ゆる座敷あらば宿からんと云ふに、主の叟予が前に來りて、懇に室を讓らんことを乞ふ、予は快く諾して早速隣室に移れば、大將意氣揚々として、傲然我輩を睥睨しつゝ、與平治樓上第一等の室に入る、軈て飯來れば、粗食口にするに堪へずと叱退して、急に鷄を割かんことを命ず、飯了つて寢ねんとするに、蒲團汚しとて三枚を重ね敷かしめ、不潔なりとて携へ來れる膝掛を其上に展ぶ、而も口に小言を絶たず、不滿を訴へて止まる所を知らざらんとす、我輩之を氣障なりとし、言を極めて富士山上の不便不快を說き、明晩足下が宿すべき石室に比ぶれば、此家の如きは、金殿玉樓王侯の邸宅に匹敵すべしと斷じて、大に此ハイカラ野郎を嚇かす、此に於て野郎驚嘆の色あり、一夜沈吟、翌朝早々に引返して御殿場に向ふ。

蓋し、九歲（數へ歲にては十一二歲ならん）の女兒一たび登りたりてふ世評は、富士山を極めて與し易きものと輕蔑するの念を多數の俗物に起さしめたり、駕籠にて七合目迄登つて返る馬鹿婆々ア、瀧河原迄來りて引返す馬鹿息子等、皆此風潮に漂はされしものに外ならざる也、一面に於ては、剛力と石室とが結托して山の空氣を腐敗せしめ、他の一面に於ては、俗惡なる種屬が山の尊嚴を汚す、今日に於て速かに此風を改むるの法を講ぜずんば、數年の後如何ともすべからざる

に至らん、八合目に郵便局を設くるなど、いらぬ事也。

▲餘談

予は、東表口より登りて東表口に降りたり、故に富士に就いて多くを語るの資格無き者也、然れども、予が一瞥に映じたる所にして既に前述の如し、熟視せば更に多くの厭ふべき點を見出ださんことを懼る。

瀧河原に山王山あり、裾野の中少しく隆起せる地點也、其一端老杉欝々たる所山王の祠を含む、樹の最も大なるは四人を以て圍むべく、四百年以上の物に屬す、御殿場以西絶えて見ざる所也、然れども、是れ未だ珍とするに足らず、祠後の丘上、平かにして壇をなせるの所に立ち、眺矚を縱まゝにするに、始めて裾野の風景の絶佳なるを覺ゆ、未だ此丘に登らず、單に路上を通過したるのみにては、裾野の風景を説くの資格無き也、與平治が老婆曰く、騙されたと思つて行つて御覽なさい、此所から見ては噓のやうですが、行つて御覽なさると御驚きになりますと、此丘の中腹に野中至氏の別莊あり。

裾野に於て見たる天然と人、及び裾野の將來に就いては、更に題を改めて云ふ所あらざるべからず、是れ予が最も興味を感ずるの問題にして、或は、之が爲めに裾野に住める一隱士と共同して著書をなすに至るやも測り難し。

十二日山を降り、裾野に二日を費して、十四日午後歸途に就く、携ふる所、破れたる絲立座、物のためしに買ひたる繪端書に頂上の印を捺したるもの、普通の金剛杖と異なれる一條の長き杖、塵紙に書きたる原稿、是れ也、此杖に就いて少しく記すべき事あり、予の登りし日は、登客多くして普通の金剛杖を賣切りたりとて、手頃の生木を六尺ばかりに切り、上端の小部分を削りて「東表口改」の燒印を施せるものを與へられたり、木質痩勁にして重量に富み、灰白色の皮膚の所々に碧紋を帶び、鬚の如く長き苔を垂る、之をたゝけば鐵聲あり、名を問へば「フジ木」と稱すと、是れ他の山に見ざる所なりと云へど、果して眞なりや否やを知らず、兎に角、予は此杖の趣致を愛して普通の金剛杖

に勝れりとなし、歸つて後之に紀念の數字を刻し、長く珍藏せんとす。

机上小觀

戸川秋骨

七　小説中の生活問題

日本人は由來金錢に對し冷淡なりと稱せらる。少くとも武士道に養成せられし結果は、金錢に冷淡なるを以て貴とする習俗をなせり。然り只此れを貴とする習俗をなせり、然れども果して實際に冷淡なるや否や未だ知るべからず。只表面に於ては金錢の事を口外せざるは事實なり。然れども只これ口外せざるのみ、此を以て直ちに冷淡なりとは必らずしも斷じ得べからず。懐より手を差し出し度きほど、眼前の金錢に渇望しながらも、なほ敢て其意を洩らさゞるが如きは、日常の生活に於て屢々見聞する處なればなり。斯くの如きをも指して冷淡と云ひ得べきか、其所謂冷淡は頗る疑問に屬せずや。余をして言はしむれば、斯くの如きは單に金錢に對しての冷淡にあらずして、人生若くは生活に對しての冷淡より來れるものなりとす。人生に對し宗教的若くは哲學的に剴切なる觀念を抱懐するが如きは頗る吾が邦人の短所たりといふ、然れどもこゝに余が吾が習俗を以て人生若くは生活に對し冷淡なりといふは、斯くの如き高尚なる意義に於て言ふにあらず。只日常の生活に對する吾等邦人の態度の冷淡なるを言ふのみ、而して吾等邦人をして斯くの如くならしめしは一に武士道の罪なりとす。

武士道は吾人に敎ふるに義を以てし、忠孝を以てし、高潔を以てし、貞操を以てし、名譽を重んずるを以てす。其敎訓みな偏に吾人の服膺すべきものたり。然れども人生若くは生活の根本問題たるべき、如何にして生活すべきかとの要義を敎へず。生命及び生活の問題すでに等閑視せらる、如何に名譽を説き忠孝を論ずるも結局無意義に終らずや。武士道は身命を捧げて公に報すべきを敎へ、戰場に於ては敵と渡り合ひて其首級

を掻き切る事を教ふ。則ち己を殺し且つ他を殺す事を教ふ。然れども如何にして己の生を完ふし、他を生育せしむべきかに關しては殆んど不關焉たり。武士道は特殊の狀況にありて格別の特權を有するもの丶道德なり（かくの如き古物的道德を掘り出して刻下急進の社會に用ひんとする教育家ありとよ、而してかれ等は自から先覺者を以て任し憂世家を以て任せりとよ）然り武士道の道德は人生少なくとも生活に關係なき道德なり。何となれば武士は他の庶民の如くに額に汗して働くの要なかりしが故なり、然れども人生は勞働の天地なり、封建の世は知らず、今日の世界は勞働の世界なり。何事も其第一義をこ丶に置かざるべからず。讀者よ余が生活、衣食住の生活を重要視するを咎むる勿れ。余は衣食住を外にして人生なしと信ずるものなり、生命なしと信ずるものなり。此三者に關係なき哲學は空想なり、この三者を重んぜざる宗教は迷信のみ。余は信ず今後の道德今後の宗教今後の哲學は、恰も科學の事實を基礎とすると等しく、生活問題則ち衣食住を基礎とすべきものたるを信ず。顧れば古の宗教は衣食の事に思ひ煩ふ勿れと教へたり。然れども今後の宗教は如何にして、衣食すべきかを教へざるべからず。人生の高遠なる意義は素より衣食住にのみ拘はりて了解せらるべきにあらざるは明けし、壯大幽遠の思想は默想より來るべし。然れども其默想の根底は必らず地にありて、かの三者を基礎とせざるべからず。

武士道に養はれたるものは如何にして生活すべきかを知らず、維新後に於ける士族が生活上の失敗は則ちこれを證す。かれ等は無意識ながら金錢は必らず他より自由に供給せらる丶ものなりとの豫想を有す。故に其社會に對し其政治に對する考量や、極めて利己的に極めて偏狹なり。故に又自からの容れられざるを怒り、他の施設の自己に便ならざるを怨む。要するに武士道の教ふる處は眞の人生々活に沒交涉なり、其生活に對切の念なきや知るべし。則ち其金錢に對するも冷淡なるが如き態度のあるは自然なり。

熊澤蕃山なりとか聞きぬ。「源氏物語」を評して曰く、

この書を讀むに宮廷の貴紳貴女終生を只情事にのみ勞してまた他を顧みざるが如し、然れどもかれ等また其服すべきの義務職掌なからんや、たゞそれ記述せられざるのみと。たゞそれ記述されず、則ち其義務職掌は當時に剴切ならざりしにあらざるか、當時の宮廷は生活と沒交渉なりしにあらざるか。著者紫式部はた生活を思索のうちに置かざりしにあらざるか。「源語」の一篇、當時宮廷雲上の人を描寫したるもの、生活問題に觸れざりしはやみがたしとするも、滔々たる五十四帖、思へば戀を外にしては雛人形を見るが如き感なくばあらず。巣林子の作に至りては往々金錢の窮乏が悲劇の一分子となれり。然れども其金錢は生活上の金錢にあらずして、遊蕩上の金錢なり。巣林子の作は一時不當にも沙翁のそれに比せられし事あれども、そはなほ且つ只戀の一方面に顯はれし人情の波瀾を寫せしに過ぎずして、眞の人生を見るが如き感興を與へざるなり。梅暦一流の情事を叙したる諸作に至りては素より論ずるまでもなし、諸作大低生活問題に入らず、從つて人生の問題に接觸する處極めて稀にして、小説に人生と全然別途に出づるの感あらしむ。現代に及びても紅葉氏以下硯友社同人の才筆燦爛として、而も其作概ね人生に亘らず、殊に紅葉氏に至りては「間貫一」の如き生活問題に關する好個の題目を選びて、なほこれを處理する能はず、其形骸をつくりてこれに魂を入れざるが如き趣あり、露伴氏の幽思また掬するに餘りありて、而も「風流佛」は素より「風流微塵藏」に於てすら、吾等をして吾が生に對するが如くならず、他界に對するが如きの感あらしむ。

嘗てゴールドスミスの「ウエークフイールドの牧師」を讀み、第一に感受せし處は、こゝに言ふ生活問題なりき。劈頭先づ妻女の撰擇より筆を起して、子女が生活結婚の事に終る。さすがに生活問題のために齷齪せる歐洲に於ては、十八世紀に於てすら、すでに此問題は提出せられたるなり。若しそれ十九世紀に至りては社會問題の明確に興起せし時なり、諸家の作品の上に此の問題の顯出するは當然なり、先づデイツケンスを見

るに、余が知れる限り凡て其作はこの問題に接觸す。殊に一種の歷史小說とも見るべき「兩都物語」にさへ其痕跡を認むべし。サッカレーの作はディッケンスの下流の市民を寫したるに反し、上流の社會を以て其舞臺とす。而も其「虛榮市」は徹頭徹尾此の問題を忘却せず、歷史的世話物ともいふべき「エスモンド」も又然り。現代に至りては生活の問題いよ〳〵切實となりて、特殊の問題小說となれり。然れどもこの問題にはむしろ其關係遠きハーデー氏の作の如き、ウエッセクス地方田園の事を書きて、而もまた必らず此問題に觸るゝ處あり。「テス」も然り、「ジュード」も然り。英國小說の此の問題に於ける凡そ斯の如し。更らに翻て大陸現代の文學を見るに、むしろ更らに其著きものあり、これを極言すれば所謂近世思想なるものは此の生活問題より起れりとも謂つべく、こゝに一々これを敍說するのむしろ煩はしきを感ず。果して然らば斯くの如くなる其の起因は何處にありや。余は斷じてかれ等西歐人の社會及びかれ等自身の人生に對する考量の切實眞面目なるにありとなすものなり。吾々ありては、邦人性情の然らしむる處か、はた武士道の如き人生の直接剴切に感受せざる敎義の養成に依りしためか、人生觀のこゝに及ばざりしは甚だ遺憾とする處なり。

然りと雖も余を以て只社會問題を說く問題小說を主張するものとなす勿れ。社會問題金錢問題は末なり、余が望む處は偏に人生に接觸したる剴切なる小說にあるのみ。吾等は沙翁に於て「ヴェニスの商人」に於けるが如き關係の外、金錢問題を認めず。而も其考慮に切實なるや全く人生に接するが如き感を與さしむ。余の淺學寡聞なる未だ吾小說に於て、深く人生に亘れる作品に接せず。さらに推して、これを邦人の人生に對する觀念の不眞面目なるに歸し、なほ武士道がこれを阻害せるを言へり。然れども今や吾が社會は其一轉化に際せり。實際の社會は生活の問題に懊惱せり。この新時代に際してや、新らしき宗敎出づべく、新らしき道德起るべし。左れば自から社會と人生とに對する深厚なる觀念を有する小說の顯出するも亦遠きにあらざる

べし。小栗氏の「青春」の一部、近時讀書界の賞賛を博しつゝある夏目氏の「坊っちやん」島崎氏の「破戒」等が隱約の間に此種の問題に接觸せるは、或はそれ來るべき新時代の前驅たるべきか。

八　文相の訓令出でゝ高野に女人登山の禁制解かる

公ルドヴイコの催しに係る當代の僧侶幷に宗教家の會議に於ける其議題こそ頗る珍奇なれ。曰く、美人は醜婦に比して生殖の力大なりや。曰く、耶蘇磔刑の時其腋より出てし水は身體の何れの部にありしものか。曰く、女子は神の創造物中不完全なるものなりや。凡そ斯くの如し。此珍奇なる會議席に列なりし當代の先覺レオナルド、ダ、ヴインチ、貴婦人等に強られ推されて終にやむなく講壇に登り一場の講話を試みんとす。會衆の僧等みな侮りてこれを迎ふ。ヴインチ徐ろに口を開て曰く、諸君、諸君は貝殼を知れりやと。僧等は己等が心血を注て、かの美人の生殖力を論じ、耶蘇の腋下より出てし流動物の何物なるかを論ずるの時に際し、ヴインチがかくの如き平凡通俗の問題を提起せるを奇み且つこれを憤る事甚し。ヴインチは平然としてさらに云ふ、諸君貝殼は海中若くは海邊にあるものなり。然るに諸君知らずや、此の海中若くは海邊にあるべき貝殼が山中若くは山上にあり、これ抑も何の故ぞやと。問題は果然平凡にあらざりき、通俗にあらざりき。思へ時は十五世紀なり、僧侶宗教家はなほ煩鎖の夢に迷へる時なりき。王公貴族は分裂して主權を爭へる時なりき。此の時に當りて徐ろに一個の貝殼を捉へ、恰も不用意の間になりしが如く、此の科學上の大問題を提出す。ヴインチの奇才また驚くべからずや。侮り且つ怪しむ會衆を見下しヴインチはなほ言を續けて曰ふ、海にあるべき貝殼の山にあるは、これ畢竟今日山嶽の地が嘗て海洋たりしを證するものなりと、所謂滄海の變じて桑田となりし所以を說く、かれは當時すでに世界の表面に於ける變化を觀破し、進化論の奥に入らんとせしなり。然るに列席の僧等此の說明をきゝて

俾はず、或は此の現象を以てノアの洪水に際して山中に殘されたるものとなし、或は單に上帝が攝理中の一變象となし、ヴインチの說に耳をかすものなく、かれが誠意理を說き蒙を啓かんとするを罵り、かれを以て神聖を汚すものとなし、自からが昧を改めず、喧囂底止する處を知らず。其狀舊思想に拘泥する尋常の人には免れがたき處と雖も、また今日よりこれを見れば憫笑に値すべきものあり。此時公ルドヴイコ形勢の宜しからざるを觀て靜かに立ちて曰く、余等俗輩未だ諸君が論する處の貝殼の何たるを解せず。然れども時すでに晩餐に際せり、余が諸君に供せんとする蠣はこれ某處の珍味なりとす、諸君暫らく諸君が論ずる貝殼を措きて、余が貝殼を味へと。こゝに於て會衆一同卓につき、論議は事なくして終れり。

　この一段はメレジコウスキー氏がヴインチを中心として、文藝復興期を描出せし小說「前驅者」の一節なり。思ふに文藝復興の期に際してや、人心自から新しきに向ひ、自然の大勢は春風の草木を芽ぐましむるが如く、世の各方面に亘りて新思想を興起せしめたり。而も舊態を株守するもの、なほ諸方に依然たる其間に於て、意想の外なる斬新奇拔の意見突如として發動す。頑牢の徒の驚奇するは宜なり。ヴインチが當代に於ける其新說は如何に僧侶輩を駭かしゝか。而も事實は枉ぐべからず、貝殼は實に山中に存在するなり。萬人の首肯すべき說明は必らずこれに加へられざるを得ざるなり。

　頑迷なる宗敎の審問はガリレオを禁獄せり。然れども當時より早く地球は太陽を中心として回轉せるなり。それ舊約聖書は日の出沒を云へり、未だ太陽回轉說を主張せず。日の出沒は現象なり、言は一種の表象なり、日の出沒を以て直ちに太陽回轉說を作る、これ當時の僧侶が强て自己の思想を狹隘にせしに過ぎず。これを今日より見れば其愚笑ふにたえたりと雖も、當時にありては此一些事かれ等僧侶の身心に關する大問題たりしならんか、而もこれ一に自から其心眼を閉せしに依るなり。ルナン一たび「耶蘇傳」を公にす。衆俗

喧囂かれを咒詛してやまず。然れども耶蘇のナザレの寒村に生育せし人間なりしは事實否定すべからず。かれは實に自からを神なりと確言したることなし、よしありとするもそはまた一個の表象的言辭たり。たとへば吾は神の子なりといふ、其言にして一種の表象にあらずとせば、何等の意義なきにあらずや。新約聖書は決して耶蘇神子說を標榜せず。これを主張するはまた蒙昧なる宗教家の自縄自縛なり。耶蘇の人格と其敎とはかれが神子たると否とに關するものにあらず、恰も舊約書の詩趣と其敎訓とが、太陽中心說と否とに關せざるが如く然り。神といふ文字すでに表象にあらずや。而も此間の消息を了知せしむるものは時代の大勢にして、これを導くものは先覺者の自覺なり。

故福澤氏は活眼の人なり卓識の人なり。疾くに忠孝の道德を輕侮せり。然れども余の考ふる處にして誤らずば、氏の輕侮はこれを無用視したるにあらずして、これを平凡視したるなり、何人も將に行ふべく、而も行ふて誇りとするに足らざるの德となせり。吾人の要するものは忠孝よりも更らに卓越したるものにありとなせり。氏は實に明治時代の先覺者たり。嘗てヴインチの當時を見るに僧等は、耶蘇が磔刑に付せられし時に用ひられし其釘を尊重しこれを奉戴せり。磔刑に用ひられし釘も亦表象たるを失はじ、これを尊崇するも亦可なり。然れどもこれに奉事するの本末を誤れる事、識者をまたずして知るべし。それ今日の所謂忠孝は耶蘇磔刑の釘の如きものか、素より敬重すべくして而も本尊にあらず、新進の時代の要するものは忠孝以上の思想、それ以上の眞理にあらずや。

請ふ貝殼の例に傚ひて事實を言はんか。單に忠孝の敎に養はれしもの果してこれに安んぜるや、昔日の武士道を以て今日の人心を支配し得べきか、所謂煩悶なるものは如何なる青年にありや。かれ等は忠孝に養はれざりしか、武士道の薫育なかりしか。かれ等はみな此兩者に養はれたり、而もこれに安んせず、これに甘心を得ずして、其極端なるものは身命を擲つに至りしといふにあらずや。而も所謂敎育者と稱する頑迷の徒

は、青年に哲學書を禁じ、小說を禁ぜんとすとか、かれ等の忠孝敎育が青年を驅つて今日の如くならしめしに思ひ到らず、なほかれ等を救濟しかれ等を向上せしむる書冊を禁ぜんとす。其愚笑ふべしと雖も、これ又かの宗敎家が自縄自縛して太陽回轉說をとり、耶蘇を神とし、はた貝殼の山中に存するの理を辯ぜざりしと一斑のみ。幸にして大勢はかれ等を葬り去らんとせり。自然の力は眞に偉大なり。頃日向氏忠孝の奴隷敎育を罵倒し去りてまた餘す處なかりしとか。而も新聞紙にしてこれに辯難を加へしもの只一二に過ぎずして、全部はこれを平常の事とし顧ることなかりし。斯くの如き事件には常に神經質なる文部省また其處置に躊躇せりとか。斯くの如きは事實なり、大勢なり。此れを往年內村氏が聖影に禮拜せずとの難の下に、免官の厄に遇ひしと何等の差異ぞ。

文相の訓令は頗る舊式なり。積年墺國にありて新思想に浴したる文相、豈に事態を解せざるの理あらんや。只急轉目舞ふが如き日本の社會を詳にせず、俗僚に擁せられ其言にきゝて、こゝに此れが發布を見るに至りしものか、文相のため時代のため頗る惜むべし。然るにこれと時を同ふして高野山に女人登山の禁制解かれしとか。山門に女人禁制は敎祖の垂訓なり、これを廢棄するといふ何等の英斷か。其所因の何れにあるかは暫らく問はず、蓋し內頗る顰蹙すべきものあらん、然れども其口を藉る處は、曰く時勢なりと。其可否は暫らく問はず、吾等は時勢の力の偉大なる敎祖の垂訓をも改むるに至れるを驚嘆せずんばあらず。文部省はた敎育界はこの時勢を如何に解せんとするか。抑も識者は此の時勢なる自然の大勢に留意しよく其ゆく處を究め、當代をして如何にこれに處すべきかを指導すべきなり。

動物の群體

理學博士　丘　淺　治　郎

通常人の陸上で見慣れて居る動物は皆個體が互に

相離れて居る、犬でも猫でも鳥でも雀でも皆一疋宛身體が離れて、各獨立に生活して居る、我々は斯かる動物のみを見慣れて居る故、動物とさへ云へば、皆一疋宛身體が離れて生活して居るもののやうに思ひ易い、けれども水中に棲む動物を調べて見ると、澤山の個體の身體が連絡して大きな群體を成して生活して居る種類も決して少なくない、私は以前から群體生活を營む動物のことを調べて居るが、此頃も淡水產の苔蟲と稱する群生動物を採集するために霞か浦へ出掛けた、幸に材料を獲ることが出來て其一部分は、今も活かして養ふてあるが、此動物なども群生動物の模範と見做して宜しいものである、此蟲は最初卵から孵つた一疋のものが水草の葉などに附着し、それが基となつて段々個體の數が增へ、忽ちの中に數百或は數千の個體から成り立つた一大群體が出來上る、その個體の數の殖へる有樣を見るに、恰も植物の芽生に依つて成長するのと同じく、これを人間に譬へて云へば、先づ親の横腹に瘤が出來て、その瘤が漸々成長し、目鼻、手足などが生じて、忽ち一疋の立派な個體と成るのである、子の横腹からは芽生によつて孫が生じ孫の横腹からは又芽生によつて曾孫が生ずると云ふ具合に、代々親の左右兩側の脇腹から幾疋づゝかの子が芽生し、總ての身體が皆連絡したまゝで、一生涯離れずに生活して居る、

斯樣に數多くの個體が皆横腹の邊で互に連合して居ては運動するに甚だ不便であらうとは誰も先づ考へ浮ぶことであるが、實際此蟲は少しも移動することなく、同じ所に固着したまゝで一生涯を送るのである、陸上では座して口を開いて幾ら待つて居ても、食物が先方から口の中へ舞ひ込んで來ることは望まれぬが、水中では隨分蟲の餌となるべき微細な食物が澤山に浮游して居る故、自身は靜座して居ても、手で水を扇ぎ口の方へ流し送るやうにすれば、歩かずしても相應に物を食ふことが出來る、固着生活を營む動物が總て水中に住む動物に限られてあるのは此故である、

さて以上述べた苔蟲の生活の狀態を見ると、一疋宛

に離れて居る普通の動物とは全く趣を異にする點が甚だ多い、たとへば苔蟲などては全群體内を同一の血液が循環して居る故、一定の蟲が食物を食へば、其滋養分は全群體に平等に分配せられる、又全群體内の神經系は皆互に相連絡して居る故、一定の蟲がひどく驚けば總ての蟲が皆同時に縮んで引き込んで仕舞ふ、利害損益ともに一群體内の總ての個體は平均に引き受けるのである、權利も負擔も平等であつて、財産は全く共有の有樣故、若し人間が此蟲の如き狀態にあつたならば如何であらうかと考へながら、今日の法律、政治、經濟等の問題を當て嵌めて見ると餘程面白いことがある、現在或る一部の人々が理想として考へて居る社會の狀態が、此等の蟲ては、已に今日實際に行はれて、居ることも有らう、

先づ苔蟲の國ては國民が皆生れながら平等てあつて、少しも階級の差がない、彼は生れながら華族てあるとか、此は生れながら平民てあるとか云ふ如き區別が全く無い、又總ての國民が同樣に働くのてあるから勞働者を蔑しめるものもなく、勞働の神聖を態々叫ぶものもない、何等かの方法て金を澤山に溜めた者は子々孫々まて、其利子て遊んで暮せると云ふこともなく、又斯かるものに使役せられて、幾ら働いても追付かぬやうな憐れな、境遇に在る貧乏人もない、富籤に當つて寢ながら大金を儲けるものもなく、詐僞に掛つて財産を唯取られるものもない、即ち個體と個體との間に生存のための競爭がない「財産は盜品なり」と云ふたプルドンの言葉は苔蟲の國には其儘に當嵌るのてある。

斯樣に群生動物ては個體間の競爭はないが、凡そ生活して居る以上は競爭を免かれぬもので、苔蟲などに於ても、群體と群體との間の無意識的競爭は隨分劇しいやうてある、これに就て一寸面白く感じるのは米人某の群生動物の生活に關して行ふた實驗である、一群體を取つて之を二つに切り離し、兩半を再び相並べて飼ふて置くと忽ち癒着して一群體と成つて仕舞ふが兩半を別々の器に入れて長い間飼ふて置き、後に至つて

之を相觸れしめて飼ふて見ると、此度は少しも相癒着せぬのみならず、反抗して、互に相壓し合ひ、戰線は次第に延長し、勢の盛な群體が他を包圍しさうになる、初め一群體であつたものも、その兩半が長い間別々に生活し、各自別々の血液が循環して居ると、其間には二者の間に漸々體質の相違が生じて、終には二者相接觸しても到底融合の出來ぬものと成つて仕舞ふのである、此等も一群體を一民族又は一國に比べて見ると、人間の歴史にも全くこれと同樣のことを發見することが多い、例へば英人の一部が米國に移住すれば初めの間暫くは殖民地と本國との間が親密であるが、年月の歴るに從ひ、利害相反する點も多くなり、彼此多少相異なつた方向に進歩して、終には相合して一國を形造り續けることが困難になり、分れて二國と成つて仕舞へば互に劇しい競爭者と成らざるを得ない、又濠洲方面の殖民地も其通りて、日英同盟なども濠洲の新聞で見ると彼地方では必しも賛成するでなく、却て反對して居るものが多い、初め一群のものでも相分れて後長い年代を過ぎれば到底融合の出來ぬまでも性質が相離れるものなることは苦蟲でも人間でも違はぬやうに見える、斯樣の次第である故、法律學者政治學者經濟學者、又は歴史家、社會改良家なども群生動物の生活狀態を參考したならば、隨分面白いことを見出すことが出來るであらうと思ふ。

エスペラント語の要領（續）

藤田季莊

第五則〔形容詞 Adjective〕

凡て形容詞はaを語尾とす

形容詞を名詞に附屬せしむるに當り其位置の先後を撰定するは全く任意なり、但し重きを名詞に置くときは名詞は先にして形容詞を後にし重きを形容詞に置くときは形容詞を先にして名詞は後にすることあり

形容詞は其附屬する名詞の形態に合一するものなるが故に其變形に於ても亦名詞に同じ、但し男女性の區別をなすことなし、唯複數に於ては語尾 j を附し目的格に於ては語尾 n を附するものとす

Nia bona doktoro venis—我等の好き醫師來れり

Oni amas la infanon obean—人は從順なる兒童を好む

Viroj fortaj estas timataj—强き人等は畏怖せらる

Mi vidas grandajn arbojn—我は大なる樹木(複)を見る

形容詞の比較級 Comparaive Degree を示すには形容詞の前に副詞 pli(……より多く)を附するものとす、「より」又は「よりも」に該當する語は ol なり、假令 Pli blanka ol neĝo(雪よりも白く)の如し

形容詞の頂上級 Superative Degree を示すには形容詞の前に冠詞 la 及副詞 plej(最も多く)を附するものとす、但し plej の前に所有代名詞を用ゆるときは冠詞を要せず、「……の中にては」 該當する語は el なり、假令 Mi legas la plej bonan libron el ĉiuj (我は凡ての中にて最も善き書を讀む)又は Via plej karamemoro(汝の最も多く好愛する紀念)の如し

第六則〔數詞 Numeral〕

根數 Cardinal Num. は左に示すが如し、但し變形することなし

1. unu	6. ses	20. dudek	70. sepdek	10,000 dekmil
2. du	7. sep	30. tridek	80. okdek	100,000 centmil
3. tri	8. ok.	40. kvardek	90. naŭdek	1,000,000 milion
4. kvar	9. nau	50. kvindek	100. cent	
5. kvin	10. dek.	60. sesdek	1,000. mil	

其他の根數を編成する方法は日本語に於けるものと同一なり、假令 11. dek unu; 12. dek du; 13. dek tri;24 dudek kvar; 35. tridek kvin; 101 cent unu; 202. du cent du; 303 tricent tri; 4, 000. kvarmil; 1906. mil naŭcent ses; 2566. dumil kvincent ses,, dek ses 等の如し

序數 Ordinal Num. を編成するには根數に形容詞の語尾 a を附加するものとす、但し拾位以上の數に對しては唯單位にある數のみに該語尾を附加するな

り、

unua 第一 dua 第二 tria 第三 kvara 第四
kvina 第五 sesa 第六 sepa 第七 oka 第八
naŭa 第九 deka 第十 centa 第一百 mila 第一千
miliona 第一百萬

エスペラント語に於ては年、月、日、時間等を示すにも亦序數を使用す、假令 je l'dek unua tprito de l'jaro dumil kvimcent sesdek sesa (二千五百六十六年四月十一日) je l'dudek dua Aŭgusto de l'jaro mil naŭ,, cent sesa (千九百〇六年八月二十二日) jel'kvara horo (四時に)等の如し

倍數 Multiplicative Num. を編成するには根數に語尾 obl と形容詞の語尾 a とを附加するものとす、假令 duobla (二倍) triobla (三倍等の如し)

分數 Fractinal Num. を編成するには根數に語尾 on. と場合の如何に據り名詞の語尾 o 又は形容詞の語尾 a とを附加するものとす、假令 La duono de dek estas la kvaroua parto de dudek(拾の半は二拾の四分の一なり)の如し

集數 collective Num. を編成するには根數に語尾 op と副詞の語尾 e とを附加するものとす、duope (假令(二つにて) triope (三つにて) 等の如し

配數 Distributive Num. を編成するには根數の前に前置詞 po を置くものとす、假令 po du (二つづゝ) po tri (三つづゝ) 等の如し

根數に語尾 o を附加するときは數詞を變じて名詞となし語尾 o を附加するときは副詞となすものとす、假令 unuo (一體) duo (双體) trio (三體) kvaue (第四に) kvine (第五に) sese (第六に) 等の如し

第七則 (代名詞 Pronoun)

表人代名詞 Personal Pron. は左の如し

第一人稱 P

		單數	複數
男及女性	主格	mi (我は)	ni (我等は)
	目的格	min (我を)	nin (我等を)

第二人稱

		單數	複數
男及女性	主格	vi (汝は)	vi (汝等は)
	目的格	vin (汝を)	vin (汝等を)

第三人稱

		單數	複數
男性	主格	li (彼は)	ili (彼等は)
	目的格	lin (彼を)	ilin (彼等を)
女性	主格	ŝi (彼の女は)	ili (彼の女等は)
	目的格	ŝin (彼の女を)	ilin (彼の女等を)
中性	主格	ĝi (夫は)	ili (夫等は)
	目的格	ĝin (夫を)	ilin (夫等を)

(註、中性の表人代名詞は男女の性を區別すること能はざるもの其他動物又は物件を代表するに使用するものとす)

以上示したるが如く凡て代名詞は名詞と同一の變形をなすものにして主格及目的格以外の關係を示すにも亦名詞に於けると同様に前置詞を使用するものとす(中央公論第二十一年第八號第四十八丁を參看すべし)

此外猶ほ「自から」に該當するものは si にして「人」に該當するものは oni なり

所有代名詞 possesive pron. は表人代名詞の主格に於ける形態に形容詞の語尾 a を附加して之れを作り形容詞(名詞)と同様の變形をなすものとす、即ち複數を作るには語尾 j を附加し目的格を作るには單複兩數共に語尾 n を附加するなり、假令「我が」mia, miaj「汝が」via, viaj 等の如し

所有代名詞の前に冠詞 la を置くときは代名詞の作用をなさしめ冠詞なきときは形容詞の作用をなさしむるものとす、假令 kies estas viaj libroj? Mi vidis la miajn sed ne vidas la viajn. (汝が書は何處にあるや、我れは我が物を見たれども汝が物を見ず)に於けるが如し

文藝雜考

佐々醒雪

歌詞と聯想

・歌枕

古の歌道では、歌詞の制のみでなく、所謂る歌枕といふものが頗る限られてゐて、芳野は花、更科は月の名所であることは勿論、近江なる雞籠(とた)の山、陸奥の末の松山は戀の歌枕に名高く、和歌の浦波、難波の葦火、讀まれる種は略定まつて居る、だから、雞籠の山の月が明てあつても、末の松山に山櫻が盛てあつても、まづは和歌には入り難い、從つて、古歌に見えない片田舍であつて見ると、月の夕暮花の曙も、固有名詞はぬきにして讀む外はない、强ひて片田舍の地名を讀み込んで見たところて、多くは無用の冗語てある。だから、昔から、歌枕として名のない所の歌は、止を得ず、緣語などの形て、新らしい固有名詞が讀み込んである。例へば「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪こさじとは」とは、契の末といひかけたので「あねはの松の人ならば」と讀んだのは、あねはのあね(姉)を人の緣語にしたのである、其他「吹く風をなこその關」といひ「衣の砦(縦)は綻びにけり」といつたなども皆同じ例て、これ等の歌によつて名高くなつた後にこそ、末の松山も勿來の關も歌詞として特殊の聯想を惹くに至つたものゝ、その以前は畢竟、人間ならば權兵衞八兵衞の類て、到底歌に入るべき價値がなかつたのてある。

政治史或は文藝史の上に何等の意義のない地名が詩歌の中に入るを得ないといふとは、必しも我國ばかりの文學に限つたことてはないが、日本の和歌の形が、極めて小さいといふことは、歌枕の範圍を狹少にした一大原因といはねばならぬ。月瀨や耶馬溪が拙堂や山陽によつて著はれたのは、散文て以つて綿密に描いたが爲て、和歌ではかういふ掘出し物をすることは餘程むづかしい。僕が今一東北の方の海岸を逍遙いて、見

て、獨り旅の暇つぶしに、例の腰折れを試みて見たが、やはり、須磨か明石か和歌の浦か、さもなくても鎌倉か大磯あたりの地名を用ゐればとにかく、拙くとも歌らしくならうと思ふものが、磯原の里、河原子の浦では丸きりものにならない。單にこれだけの問題でも、既に文藝史を離れた文藝の、無意味なる徒勞であることを深く悟つた。

さもあれ、古の歌道の保守的勢力は、今更ながら驚かざるを得ない。近古までは、とにかく、德川期に入つてより後は、江戸を中心として、東北にも歌人が少くないが、因襲の結果は、やはり依然たる京阪あたりの歌枕を反復してゐたことは不思議なばかりである。それ等の歌人が新らしい歌枕を作らなかつたのは、宛も僕が磯原や河原子を詠じ得ない通りであるといはるれば、それまでだが、若し常に企てゝをる人があつたなら、古の歌人が末の松山や勿來關を著名にした樣な事蹟の一つ二つはありさうなものではないか。

だが、それも無理な注文かも知れない、桂園の紀行などには、隨分無名の地の歌もあるが、多くは失敗の作て、ことに「都出てゝまづ三（見）上山面白しまことの富士を思ひこそやれ」といふ風の駄洒落が十の八九である。サゼフチーブといふことを生命とした短歌には、到底、歌枕の擴張は企つべからざるものと見ぇる。近來の新派を見ても、ありなれ川が復活して長白山が加はつた位のもので、京の子に紀伊の霞、依然として京阪が歌の國である。

和歌の新名詞

名所以外の物の名には、流石に新らしい物が加はつた。例の京の子を初め、星や菫や薔薇などは勿論舶來の物さへをり〳〵は見受ける。なるほど、香水臭い香は、香爐の中からは騰らないわけて、當然の變遷てはあらうが、何となく、ぞるこそれの調子にふさはないものが多いのも是非もないことだ。ことに、僕等のやうに、多少國文を研究して言語の時代を區別する習慣のあるものは、何だかお茶席に金緣の油畫を見るやうな心持がして、先づ不調和の感を惹くとが多い。

洋服を着て疊の上に坐る限は、夜會服を着て島田髷に結つたところが、咎むべきでないといへば、理窟はその通てあるが、風俗といふものは推理からは來ない。まづ頭を束髪にして、蝦茶袴から履に筒袖といふ順序が、世潮であれば爭はれない。だから新語の採否も言語の大體の變遷から自ら來たものでなくては、冷評せられても止を得ぬとだらう「わぎもこの何とやらのリボン」といふやうなのは、少し考ものではあるまいか。

聯想の定まりたる詞

和歌の屢用ゐられた詞は、名所と同じやうに、定まつた聯想が附着してゐるものが多い。例へば、落花は惜しいもの、秋風は悲しいものといふ様に、相場がきまつて居て、落花の面白さ、秋風の快さなどは、歌として異様に、感ぜられたことが久しかつた。これも必竟は唯散る花といひ、秋の風といへば、何等の説明を與へずとも、古歌に通じた人は、すべて一定の聯想を惹くことになつてゐるところから、これに反した思想は、餘程綿密に説明する必要があつて、三十一文字に入り難いといふのが、かくの如く聯想の固定して來た一原因て、ことに歌道が成り立つてからは、歌を讀む人は、すべて古歌によつて、詩想を涵養するので、直覺的に得來るといふことは稀であつたのだから、散る花に對して、面白いと感じ、秋風に快く感じたのは、殆んど俗念として退け去つたのであらう。近來の和歌が、この範疇を脱却したのは、甚だ慶すべきことではあるが、その爲にやゝもすると餘情の判明ならぬものも出來た。例へば、「秋風ぞふく白河の關」といふのは都が遠くて寂しい趣を咏じたので、決して殘炎が去つて快く涼しいといふのではない、若し涼しいつもりならば、「秋風涼し」といはないでは、古歌に通じた人にはわからない歌になるのである。尠くも餘情のロケーションが判明を缺くのである。だから、古歌に於て既に定まつた聯想のある語を用ゐて、これと異つた聯想を要求するには、必ず多少の説明がなくてはならぬ。

發句の題

發句の題として屢々用ゐられた語は、大抵聯想が定ま

つて居る。梅といへば清痩なるもの、紅梅は艶なもの、春の風は長閑に、秋の風は寂しく、ことに秋の雨といひ、秋の暮といひ、時雨といへば寂しきもの、限てあつて、この聯想は俳諧では動かすべからざるものとなつてをる。秋とはいつても昨日今日の殘炎にすさまじい夕立めいた雨もある、雪消の山の春風は長閑どころの話ではない。だが、さういふ異例を數へては、十七字の中に詩趣が吟ぜられる餘地がない。そこで止を得ず、(或は必然に)秋風春風の特色のみがこれらの詞の聯想となつたもので、發句の題として用ゐる名詞には、多少この種の聯想の固定してゐないものは稀なのである。

なかにも、長き日は春で、短夜をと夏と限つたのもをかしく、長き夜は秋であつて、冬の夜には長短の形容詞を用ゐないのも奇といへば奇だ、しかしこれらは和歌でも多くはこの例であるが、肌寒、朝寒が秋で、夜寒が冬であるなどは、俳人の發明である。かく時候が定まれば從つて聯想が定まるのであつて、秋の寂しく長い夜といふことを唯「夜長」の一語で表はしてゐて秋口の肌寒き頃を「肌寒や」ですましてゐるなどは、至極簡便ではないか。且は春の月といへば朧々たるものに限られ、秋の月は清いと定まつてゐて、ことに唯月とのみいへば秋の清い月のことであるなどは、門外漢の不思議に思ふところであらう。これほどに、言語の聯想のみならず、意味の上にすら、特別の默契をもつてゐるが爲に、十七字の俳句にも、時とすると、企及すべからざる餘念餘情が表はれるのである。

俳道の門外漢が、往々俳句を難解な謎のやうに思ふのも、この默契に通じない爲である。

音より來る聯想

日本語の如きホノニムの多い國語には、音より來る聯想が多い。ことに中古以來、緣語や掛け語の類を重んじた結果として、浪には夜(寄る)、衣には立つ(裁つ)糸には亂れ心、絶ゆる契などの語を直に聯想するのが歌人の習慣性となつた。かの和歌の傳に、「吹く嵐かな」(福あらじ)といふ語は不吉であるといひ、俳諧の書に

も開店の祝に「霞棚引く」(店引く) などはすべからずといつてあるのも、この習慣性から來つたものだ。その極端な神系質には驚かざるを得ないが、ホノニム詮索の流行が、かくの如き點まで達したことは、文學史上に興味ある事象である。

女郎花が阿波内侍に譬られたり、福壽草が目出度がられたりするのも、必しも實物から直接に來る聯想とは見えぬ、これも、音からではないが、單に名稱から來たものと見える。其他すべて、稀に咏ぜられる草木は宛も名もなき地名と同じやうに、名稱にすがつた句が多くて、從つて拙いものばかりである。

小てまりや上手に咲いて垣の上
高麗菊や我が日の本の香には似じ
蝶々の里下りしてや櫻草
とる人の手によごれけり金銀花

「吹く風を勿來の關」といひ「都いて丶先づ三上山」といふ駄洒落と、つまりは同じ系統であつて、實物に關して十分な聯想がないところから、止を得ず、音や名稱の聯想によつて作つた爲に、失敗の作であることは勿論である。

自然なる聯想

以上は主として、歌道俳道などに、特別に涵養せられた聯想を説いたのであるが、それ等も畢竟は一般の社會に自然に發達し來つた聯想を基礎としたものであつて(强ひてホノニムを詮索したものなどは別であるが) それが最も社會共通の自然な聯想に近い程、その讀者鑑賞者の範固も廣いわけで、從つて詩歌として成功したものである。

單に地名のみに就いていつても、末の松山や勿來關といふ詞の詩的聯想は歌から來たものであるが、今日は既に民衆一般に歌枕と認められてゐる、だが耳梨であるとか、片野であるとか、いなの篠原、井手の里などは唯歌人ばかりの名所である。これと反對に逗子や大磯は俗社會の名所から既に詩的の地に進むだ樣ではあるが、何となく須磨や明石程に時代の寂がなくてなつかしくない。して見ると、今の俗人も古の雅客も等しく

詩的に感ずるところが、最も適當な歌枕てある。

武夫の箭なみつくらふ籠手の上に霰たばしる奈須の篠原

箱根路を我がこえ來れば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

の雄大限ないのは、專ら奈須野の原や箱根、伊豆の海の聯想の然らしむるところてはあるまいか。

發句ていつても「これはこれはとばかり花の芳野山」の芳野山などは何人にも動かし難いもので、或は彼の名高い、

下京や雪降る上の夜の雨

の「下京」なども、美しくて靜かな地名としては、これほど適當なものはなからう。

この下京の句なども、傳ふるところによれば、江戸で出來た句てある。して見れば、若し某の地に於いて認め得た美景、又は某の事物に就いて感じた詩想を咏ずるには、必しもその地名や事物を以てこれを描く必要はないので、磯原や河原子て得來つたものがあるならば、須磨や明石の名て（若し聯想が適當てあるならば）咏じた方が却つて、詩人としての當然の任務てはあるまいか。從つて又梅に對して櫻の句を得閑窓に閉居して白河の關を咏ずるのも、必しも笑ふべきことてはあるまい。かの奈須の篠原や伊豆の海の歌なども、名もなき野原や海原に於いて感じ得た景色てはあるまいかとも疑はれる。

事實（ファクト）は眞理（ツルース）てはない、詩人は眞理を描くもので、事實を寫すものてないとは、こんな邊にも應用せらるべきものかとも思ふ。

二十餘年以前、まだ大阪の高等中學に在學した頃に、奈良から大阪に出ようとして、夕ぐれに暗り峠にかゝつた、折しも頭の上に、おつ被さるやうな夕立雲の絕間を洩れて、赫奕たる入日の光が大阪灣を照した、その壯觀といふものは、今日もまだ忘れることが出來ない。而來和歌や俳句に、その面影を寫さうとしたことは幾度とも知れないが、暗り峠、大阪灣、いづれも詩趣がない、難波の海もやさし過ぎて、かたばかりの句

も出來ない。固有名詞に拘つたことの愚を悟つても未だ〱かの偉大な光景は描き得べくもないが、多少は成功に近づいて來るやうな心持もする。事の序に我が、愚を白狀して、まことに童蒙に示さうと思ふのである。

次號の公論欄には吳秀三氏、小河滋次郎氏、雄辯欄には和田垣謙三氏、藤田季莊氏、佐々醒雪氏、永井一孝氏、戶川秋骨氏、等の佳什を收むべく覆面冠者の怪物傳も必ず現るへし以上の外大附錄として文壇第一流作家の雄篇傑作を揭ぐべし詳しくは本號卷首に於ける豫告を見よ。



露國に後るゝ勿れ

『時事新報』

露國政界の現狀は專制主義と自由思想との衝突にして結局は後者の勝利に歸す可きものなり一國の文化發達し世界文明の大勢に適應せんとする場合に免かれざるの現象にして早晚この行路を經過せざる可からざるの運命なりしに日露戰爭の結果は適ま〱其時機を早からしめたるのみ自然の趨勢、明白の成行なるにも拘はらず眼前の利害に眩惑せられて去就方向に迷ふは自ら是れ人生の弱點なるが戰爭以前、露國が彪然たる大勢力を擁して東西に雄視し恰も官僚政治の全盛を極めたる時代に際しては露國外交の大膽活潑なるに驚嘆し外交は專制國に於て始めて其能事を見る可しなど唱へたるもの外國人の間にも少なからず我國にても政府の部內には內政に就て露國の專制主義を羨ましく思ひ之に倣はんとするの

意を傚ほしたるものありと見え彼の有名なるポベエドノスチッフの著書など飜譯して地方官に頒たしめたるが如き奇談さへなきに非ざりき兎に角に露國の專制主義に對し我國人の中、殊に政府の邊に少なからざる信仰者ありしは實際の事實にして或は施政上にも幾分か其氣風を見るに至りし折しも端なく日露戰爭の破裂に及んで其成行を見れば案外至極、露國の外交は全く鬼面人を嚇かすの筆法にして所謂虛々實々は唯虛のみにて實を缺き甚だ危險なる實相を暴露したるのみならずいよ／＼戰爭の一段と爲るや專制腐敗の惡弊は年來軍隊の內にも蔓延したるより兵士は上官に對し滿腹の不平を湛へながら命令止むを得ず服從を表するのみにて自ら進んで國の爲ため戰はんとするの精神とてはなく一般の人民は政府が外交の失策より無名の師を起して無辜の人を殺し無益の財を費すは畢竟專制政治の然らしむるなりとて敗報の到る每にます／＼政府に對するの憤怨を高め遂に國中の所在に叛亂の發生を見るに至りし其反對に我國の軍人は一兵卒までも孰れも決死の覺悟を以て戰に臨みて如何なる艱苦をも辭せず又國民を代表する帝國議會は猶て軍費の支出に應じ飽くまでも擧國一致の精神を以て事に當りたる結果は即ち每戰每勝、光榮ある成蹟にして彼我勝敗の分岐點を政治上より觀察すれば明に兩國政治仕組の相違に在りと認めざるを得ず彼の專制主義の信仰者は此明白なる實物教示に接して尙ほ昨非を悟らざるや否や抑々世界各國の政治がます／＼憲政自由の一方に趨くのみにて苟めにも專制の古風に復歸するの望なきは文明大勢の命ずる所之を歷史に徵し又實際に驗して萬々疑ある可からず或は一時一局部の成行に於ては專制主義の活潑、時に觀る所きものあるが如しと雖も終局は遂に失敗不幸に歸せざるを得ず流石の露國も專制の餘弊の爲めに戰敗を招き其結果として國民の要求を容れ國會を開かざる可からざるに立至りしこそ眼前の適例なりとして我輩の所見を以てすれば露國目下の政情は甚だ難澁にして一見或は憲法中止專制政治の復活も圖る可からざるが如くなれども元來露國は歐洲自由の邦國に接して夙に其文明を輸入し又その風化を受け國民の自由思想は一般に發達したるに拘はらず今日まで專制政治を維持し來りしは今の世界の時候遲れの甚だしきものにして憲政成立の時機は既に已に熟しつゝあることなれば此際總選の場合とて幾多の波瀾起伏は免がる可からずと雖も國民自由の勢力が遂に官僚政治を壓倒するに至るや疑を容れず否な其の時機の到來は案外、速にして寧ろ人を驚かすこともある可し國民の勢力はます／＼鋭を加ふるに反し官僚政治の根抵は既に朽廢して果して抵抗を永續するの氣力ありや否や頗る覺束なければなり顧みて我國を視れば憲政の開始は露國に先だつこと十數年その經驗敢て短しとせず今度の戰爭に擧國一致の實を擧げたるも憲政の賜に依る所、大なりと云ふと雖も實際の運用に至れば憲政修業の最中、動もすれば專制の舊癖を催ほすは珍しからぬ沙汰にして遺憾ながら未だ其佳境に入りたりと云ふ可からず現內閣の如きは割合に自由思想の聞人を網羅し首相その人も常に憲政自由を口にするの人なれば心の中には自ら期する所あることならんと雖も周圍の事情に自由行動を牽制せられ、竊に不如意の嘆なきや如何、若しも當局者に所信

を斷行するの勇氣を缺き左視右顧、一直線に進む能はざるに於ては專制の舊轍を一掃すること難くして憲政の發達上、露國に對して後れを取るが如き奇態なしとも云ふ可からず世間或は露國に復辟の意あるを云々するものあり復辟戰の如き我邦の深く恐れざる所なれども憲政の發達に於て露國に先んぜらるゝが如きとあらんか吾々日本國民は何の面目ありて世界の文明國に對するを得べけんや此一事に至りては我邦の大に恐るゝ所にして一般國民と共に政府を鞭撻して誓て憲政の發達を期せんと欲するものなり。

等級選擧の惡弊

『東京朝日新聞』

電車賃値上は到底現内閣特に内務當局の失政たるを免れず。三錢を四錢にしたる。固より爭ふべきに、其裁定の順序に至りては更に大に惜むべし。曩に民論の値上問題に喧しかりしに懲りたるを以て、今度は突然不意に之を決し當局者が仕濟し顔なるは、民意を敬重すべき立憲内閣の態度として、吾人の首肯する能はざる所也。吾人は現内閣が多年平民政治を唱導したる政友會と一半の座席を分てるだけ、其れだけ、而して内務大臣が原君たるだけ其れだけ、告貴の理由を有するもの也。然れども翻て思ふ、醇厚博通なる立憲大臣の德義を推して云ふときは此際大に論ずべきものありと雖も、若も法規律令の間に跼蹐する枯乾なる一行政官の措置として見るときは、此度の事も聊か宥すべきものなきにあらず。何となれば當局者は東京市會の決議に從ふたりと藉口するを得ればなり。固より當時の市會の決議なるものが、市民の意思に合せざるとは何人も認むる所なれども、兎も角も市民の表意機關たる市會が彼が如き決議を爲したることは、當局者今度の處置に抗議する市民に取りて、一大弱點たらざるを得ず。是に於て問題は市會の上に移る。何故に市會は斯く市民の意思と乖戾したる決議を爲せしや。蓋し各種の代表機關が其選擧人の負託と合せざる言動を爲すことは、決して珍らしき事にあらず。選擧人の智識發達して其監督嚴正ならざる限り、之を防ぐこと甚だ困難なれども、現制の市町村會には特に此弊を養ふべき重大なる理由あり。等級選擧是なり。何人も熟知せる如く、現制に於ては其納税額に從ひ市町村民を三級若くは二級に分ち、各級同數の被選者を出すを出て、少數の富豪は多數の貧民と同分量の發言權を有す。左なきだに富豪の勢力は何れの方面をも魅せんとするに、特に少數富豪者の爲に指名せられたる議員等が其指名者の利益に反したる行動を爲す能はざると、利害上人情上已むべからざるが故に、問題が富豪者と貧民との間に分岐すべきときは、市町村會の決定が富豪者の利益に解決せらるゝは、自然の數と云ふべし。而して此弊は大都會の如き貧富の懸殊に甚しき所に於て一層多し。論より證據。曩に電車値上問題の當時、芝區選出の某市會議員は電車鐵道會社に強ひられて、已むを得ず値上に贊成したりと傳へらる。他にも又其例なきにあらず。斯の如きは自治制の爲に甚だ憂ふべき現象となす。市町

村制の理由書には等級選擧に就て「其專ら自治の義務を負擔するものに相當の權力を有せしむるは固より當然の理なり」と云へり。則ち多額の租税を納むるものには、多分の發言權を有せしむべし、との謂なるべし。然れども是高尙なる公共團體を以て營利會社と同視するものなり。營利會社の目的は社員の私益に在るを以て、多數の株劵を有するものにて多數の票決權を授くるは當然の事なるべしと雖も、國家其他の公共團體は現在團體員の現實的利益以上に超越して、更に其存續と繁榮とを計るの要あるが故に、單に團體の現在に提供する所多きを以て其私擅を公事に逞しうせしむべきに非ざるや勿論なり。或は納税の義務あれば、此に參政の權利ありと云ふ。然れども租税は公共體の資源を維持する市民の經濟的義務にして其生命財産の保險料にはあらず、又參政の行爲に依りて以て其自恣を遂ぐべき方便にあらずして、其忠實熱誠を捧げて公共體の存續繁榮に貢獻すべき其道德的義務なり。故に財力に饒なるものは、益多く其資財を捧げて義務を盡すべく、智識品性に抽づるものは、其品性智識を傾けて、益多く公事に努力すべし。彼と此とは別種の原則の上に立つべきものにして、連串さるべからず。要するに等級選擧は吾人の嘗て論じたる如く、前世紀來の富豪政治の餘波にして、理論上別段の根據を有せず。而して其實際に於て、弊害を釀生すること前言ふが如し。故に之を廢することは今日の急務なり。前議會に提出され、而して成立せざりし政府の改正案は、此點に於て尙現制を採守せしが、若し再び提出するものとせば、吾人は是非共等級選擧の全廢を見んことを欲するものなり。

犯罪と婦人の關係

『看護婦』

小河滋次郎

△犯罪者は總ての社會、總ての階級を通じて居るが、併し其社會の各階級に依つて、又各個人に就て、各々其種類、其性質が違つて居る、去れど人間は誰でも犯罪を爲す資格を持つて居るもので、モンテエーの如きは『人間の頭腦には犯罪者が宿つて居る、其れが若し强い刺激に逢へば直ちに飛出して犯罪を爲すものである』と言つて居る位である。

△其所で男子と女子と比較して、何れに犯罪者が多いかと言はゞ、無論男子の方に多い殆んど比較にならぬ程である、單に日本のみならず、世界を通じて左樣であらうと思ふ、獨逸の如きは男子の方は十萬人に付其犯罪者一千六百九十四人なるに、女子の方は十萬人に付其犯罪者三百六十一人の少數であるが、日本の如きは獨逸よりも總體に於て犯罪者少數なれど、男子の方は十萬人に付五百五十六人なれど、女子の方は十萬人に付九十一人の少數である、この比較をして見ると獨逸に於ては男子犯罪者百人に對し女子犯罪者二十一人、日本に於ては男子犯罪者百人に對し女子犯罪者十五人となる、統計の上に依れば確かに男子の方が多數の犯罪者を出すこと明かである。

△夫から男子は數に於て多いのみならず、其性質に於て危險の性を持つ

て居るもので、『男子と猛獸とは近け難し』と云ふのが事實の樣である、然らば女子は神の使て、美德を具へて居るものであるかと言はゞ、決して左樣でない又女子は美德を有つて居るから、犯罪者が少いかと言はゞこれ又決して左樣は言はされ、併し男子に比較して少數たるは、何に原因するかと言ふと、全く此は社會的關係に因るものと言はねばならぬ。

△社會的關係の第一は日本在來の家族的制裁に原因するものであらうと思ふ、即ち日本在來の家族的制裁の力に依りて、女子が外に立つて働くことを制する爲に、犯罪を爲す場合に接することが少いからである、其證據には段々社會が進み、經濟上の困難が甚だしくなりし爲に、女子が外に現はれ、動かればならぬ事となり、漸々女子の犯罪數が增加しつゝある、詰り社會變遷の結果女子の犯罪が增加せしめつゝあるのである。

△然らば女子の慣習、風俗が犯罪を少からしむるが故に昔時の家族的制裁が宜いと云ふと、夫は決して左樣でない私は昔時の風俗、慣習が、總體に於て犯罪を多からしむる原因となつた事を信ずるのである、何せなれば犯罪の分量に於ては、前言の如く男子の方甚だ多數なりと雖も、犯罪の實質に就て調査せば、女子は非常に罪業の深い者であつて、其れは時代思想の風俗慣習が女子に迫害を加へる爲に、女子は常に陰に立つて男子をして犯罪を行はしむる故である。

△統計表に現はしたる犯罪表は、刑法に定められたる犯罪名義に依りて示した計りて、其實質に就ては何等も現はしてない、法律の上から言へば、女子の方が影に隱れて居る事が多い、暗々裏に罪に處せられないものが多い外國でも左樣であつて、日本の警察に左樣いふ例が多い能く世間でも言ふ通り、『何うせ婦人の行つた事だから』といつて大目に見逃す傾向が多いのである、若し之を男子に對する如く嚴重にしたならば、必らず統計表に現はれたる者よりも、ズット犯罪數が多くなるに相違ない

△犯罪に就て男子の經路を探つて見ると、必ず酒と博奕と、女との三が伴ふて居る、就中女子に干繫を持たぬ犯罪はないと言つて宜い位で、多くの場合は、婦人の身代に立つて居るやうなもので　男子を操つて犯罪せしむる者は婦人で、男子は人形の樣な有樣である、夫故犯罪の裏面には必らず婦人が隱れて居ると斷言するを憚からぬのである。

△何故婦人が陰に居て、男子を操つて犯罪せしむるかと云ふと、其原因は古來の社會制度の罪である、即ち社會が婦人を迫害して、婦人は家に附屬せる者で男子の下風に立つ可きものと云ふ思想を以て、婦人に向つて獨立の事業を爲し能ふ可く教育を與へて居らぬ爲に、自然社會の裡面に立つて、男子に犯罪せしむるやうな事になつたのである。

△女子は陰性て、男子は陽性であると云ふが、これが犯罪の上に明かに現はれて居る、同一の犯罪でも婦人は陰性、男子は陽性である、夫故其犯罪者を感化して、其精神を直す上に於ても、男子の方は樂であるが、女子の方はナカ〳〵困難である、出獄者の保護でも婦人の方が困難である、之は陰性なるが爲であらうと信ずる、女子の中にも特に困難なるは藝者、女郎、淫賣等に墮落した者であつて、未だしも放火、殺人、窃盜などの方が感化し易い樣である

△犯罪の直接原因は、窮乏、困難に由るが多いのであるが、此れとて男女兩性を比較すると其事情が違つて居る、男子は艱難に處した場合に於て、奮發して善くなるか、反對に罪惡を犯すか兩極端に走るが普通なれど、女子の方は艱難の場合には必ず墮落すると決つて居る、奮發して善に走らず、然らばとて惡にも至らず墮落すると相場は決つて居る、それと言ふのは天然の資本を持つて居て、墮落さへすれば何も困難はないから、直ちにこの天然の資本を見出して墮落するのが普通である夫から如何にするかと言へば、今度は男子を誘惑して墮落に導き、次で犯罪の止むなきに至らしむるのである故に女子は總て犯罪の母であると言つて可い。

△女子を斯樣に墮落せしむるのは、前言の如く社會の思想、慣習、風俗が爲て居るのであるが、元來男子の量見といふものが間違つて居る、『兎角世は酒と女など言つて女子を以て酒と同一に、男子の嗜好物と見做して居る、甚だ不都合な譯で、斯くも男子が女子を對等の者と爲ない爲に、其反對に其報酬として男子は女子の爲に苦しめられ、犯罪に誘惑せらるゝのである、女子を以て犯罪の母たらしむるは、男子の量見が惡いからである。

△然らば之を如何にせば宜いか、云ふ迄もなく男子が女子を高く見て、女性を高めればならぬ、と言つても夫は教育を高めれば出來ぬ事である、女子に大宗教家、大教育家、大文學家等の出ぬのは、結局社會が教育を與えぬからである、昔時でも女子に相當の傑物があるから、昔時から女子に教育を男子同樣に與えて居たなら、今日は豪い女子が出て居るに相違ない、夫故社會的經濟的に女子教育を進めればならぬと思ふ、其證據には犯罪者を年齡に依つて區別して見ると男子は廿五歲より三十歲迄の間に多くて夫より段々少くなる、之は三十歲以上となれば受けたる教育が活用して、思慮分別が漸く善くなり獨立的事業に從事するからである、女子は二十歲より三十歲迄に多くて、夫より以上になつても、男子の樣に少くならない、却つて四十歲より五十歲の間に多くなるといふものは結局教育を受けぬから、獨立的事業に從事する事の出來ぬ故である。

△女子教育の發達は、單に男子が主張した斗りてはいかぬ、女子自身も亦實行せればならぬ、是に就て昨年獨逸に居た頃、ハルレーに於る萬國女子會議に於ては、『女子をして裁判官たらしめよ』といふ決議をした、下田文學士は女子は裁判官に適せずと言つたが、私は適當すると思ふ、今日は人間に適當した處罰をするといふ事になつて居る、さすれば同性の婦人は、婦人が觀察する方が宜い、即ち女子は女子の性格を知得するものであるから、裁判官の如きは婦人を採用するが宜からうと思ふ夫から刑の執行に就ても、女子の刑の執行を男子がする事は宜しくない、之も女子を採用するが宜い現に外國に其例があつて、成績が宜いのである、獄醫でも男子よりは女子の方が注意が行屆く事が多い、檢梅、驅梅なども外國に例ある如く女子をして行はしむるが宜い、左樣いふ風に考えて見たら、女子をして從事せしむるに適當の事業は澤山あるに相違ない、現に日本に於ても女子職業の範圍が漸々擴張せられつゝある際なれば一層

世人が女子教育を重んじて、女權擴張女子職業の進步發達に注意を拂つて貰いたいのである、然らば女子が社會の裏面に隱れて、男子を誘惑し犯罪せしめるやうな事實も減ずるであらうと思ふ。

△序ながら諸君に研究して貰ひたい問題がある、其の一は姦通罪を廢する事て、婦人に限り姦通罪があつて、男子に同樣の罪のないのは不公平てある、而已ならず姦通罪を法律て制する矯正するといふ事は無理な話だから、之を廢止して、不問に附して、姦通を以て離婚の原因として置いたら宜からうと思ふ、其次は墮胎罪の事てあるが之を犯罪とせざる論あれど、それは些と無理て、墮胎罪は必要のものと思ふが、中に除外例を設けて置く必要があらうと思ふ點がある、それは(一)强姦若くは不可抗力の爲に受胎したる場合(二)重い精神病者が女房に受胎せしめたる場合(三)白痴者の受胎(四)泥醉が女房の意思に反して受胎せしめたる場合(五)姙婦が重病に罹りし爲に生れても不能力と認めし場合(六)生れても不具なる者(七)野合の結果受胎せし場合等の墮胎若くは殺害は、醫師が診て確實の判斷を下した場合に限り、其罪を論ぜざる事と爲たらば宜からうかと思ふ、之は唯世人の研究を煩はす問題として附言して置くのてあるが、是等は多少婦人問題の研究と伴ふて注意すべき事てはないかと思ふのである。

二宮先生の倫理說

『斯民』　加藤弘之

二宮先生の說は。善惡は矢張天然には定まつて居らぬ。其譯は此世界の有樣を見てもわかる例へば稻や麥が天然に出來る譯てない、土地を天然に任かせておけば草が勝手次第に蔓るそこて稻や麥を作るのは人工て作らなければならぬ又家を建てるのも人工てある、其建てた家を其儘に打放つて置いたら木の家なら腐朽して仕舞ひ石の家ても矢張損して仕舞ふ、さう云ふやうなものてある、天然に任かせておいたら何事も人間の爲にならぬ、却て害になるものてある、道德のとも同樣てある天然に任せて置いたら道德と云ふものは立つものてない、道德と云ふものも國に君があり又聖人が出て拵らへたものてある、斯う云ふ事が善てある、斯う云ふ事が惡てあると云ふことに立てゝ拵らへたものてある、(中略)人工て以て天然に逆つて……全く逆ふと云ふ譯てはないけれども、聖人とか帝王とか云ふやうな智惠もあり體もあり又權力もある人が道德善惡を人口て以て定めたのてある、それは丁度草の蔓るのを其草を刈つてさうして畑を拵らへて米や麥を蒔くやうなものてある、それと同じて人工てなければ天然のみては行けるものてはない、それて善と云ふのも惡と云ふのも天然てはない全く人工て出來たものてあると、云ふのが二宮先生の說てある。

（拔　萃）

新小説

第拾壹年九卷◎九月一日發行

▲本欄▼

草枕……夏目漱石

舊友……正宗白鳥

▲思潮▼

露西亞の民間に行はれる魔術及卜占……八杉貞利

エドアルド、フォン、ハルトマン……ケイベル博士口述 深田康算譯

▲雜錄▼

色音論の作者……高野斑山

箱根八里……前田曙山

海上の四人……兒玉花外

陰晴不定行……薄田斬雲

故久保田米僊翁……鈴木春浦

▲歐洲文藝見聞譚▼

ピネロの「第二タンカレー夫人」……島村抱月

▲時文▼

文藝と家庭主義……後藤宙外

同揉錄……同上

▲家庭▼

千草百草……前田曙山

貞奴の化粧法……萬松園主

▲譚叢▼

古彫刻物の味……高村光雲

市内の交通機關……耕硯生

▲藝苑▼

人形の「紙治」河庄の型……三木竹二

能界放言……黒田撫泉

▲流行▼

秋の袷……流行子

懸賞吟詠、時報、新刊紹介

▲繪畫▼

表紙(虎)……河村清雄

草枕(口繪)……小林万吾

朝の雨(一情一景)……水野年方

無名の人

舊友(繪葉書)……田代曉舟

實價

一冊廿五錢郵税貳錢五厘
六冊前金郵税共壹圓五十九錢
十二冊前金郵税共三圓十二錢
(郵券代用必ず一割増の事)

發兌元 東京日本橋 春陽堂



船室

いとう政女

一

『こんな和波ぢやア。我家に居るも同じでさア』

白の蚊飛白を着た。デブ〳〵肥ッた男は。船に馴れた調子で。かう云ひながら。甲板から入ッて來た元よりこれは。綿銘仙の矢絣を着た島田の姉さんに。それとなく聞かせるのである

第一東海丸は。一時間と少し前。即ち午前六時十分を以て。靈岸島を發したのだ

上等。一名貸切室は。長四疊なのである。それによくはないが絨緞を敷き詰めて。兩方には。チョイと腰もかけられるやうに出來て居るし。小荷物を揚げとく網もあるし。先づ〳〵。甲板上のテントの下や。豚小屋同然の下積には。はるかにまさッて居るに違ひない

丁度此室には。今入ッて來た男を入れて七人の御客様がゐらつしやる

此男は。新橋の米屋の主人ださうだ

自分てさう仰しやるんだもの

それに。赤十字社歸りの洋服と。その連れの透綾の羽織と。セルの洋服を着た。船には自轉車をあづけてあるハイカラ男と。彼の綿銘仙の娘＝いやな風の娘と、それが姉さん〳〵と呼ぶ。どう見ても達磨茶屋のかみさんとしか思はれぬ女とがゐるのだ

ハイカラは道樂て。房州漫遊をやるのだと云ふ

下司ばつた女二人は。たとへ船にしろ。此上等室の玉ではない

たゞ年增の方が。房州と東京とを跨にかけて。月に幾度となく行つたり來たりする所から。船長以下と懇意になつて。いつも特別にこゝへ入れて貰ふらしい風だ

これて六人は判ッてゐる

たゞ一人判らない人がある

白飛白は眞中に胡座をかいた

赤十字社歸りは。二人とも新聞を讀んでゐる

ハイカラは。米屋の後から。チョイとゝ云ッてマッチを借りた

女二人は。其判らない人を。時々ぬすむやうに見て。何か小聲で云ひ合ッてゐる

判らない人……それは。無論女なのだ縮緬風通の單衣に。絽の長襦袢(？)をかさねてゐる

帯はすだれ織

髪は束髪……であるが。其バラ〳〵と額にかゝる毛の匂やかさ。拔ける程白い顔がいといと美しく。懐かしげに見える

前髪から鬢をグッと張ッて。花月巻には。銀の平打をさし。髱には髱留をやつた風情

どうも丸髷が間に合はなかつたから……と云ひたさうだ

女學生のとりなしではなし

女學生上りの細君の樣子も見えぬ

つゝましく。隅の方に。彼のハイカラとは。斜に座つて。時々は海の方を眺めるのであるが。多くはじいつと俯向いてゐる

男達は。それを目を側めて見るのが失禮だと思つたのだらう

件の如く新聞を讀み。又話をする

船はもう。羽田沖にかゝッて來た

二

赤十字社がへりの洋服が。同じく房州へ歸る。自分より以下の人を見つけて。室から飛出して行くのを

見送つた米屋が。透綾に向ッて

『ありやア。君の方の村長さんかネ』

と。聞いたのはよかつた
米屋は。所謂諧謔百出の男だが。その割に。あんまり警句はないのである
しかし。満更なものばかりではない
お茶が出て。駄菓子が澤山新聞の上に置かれてある
夏蜜柑も二ッ程載つてゐるのだ
お菓子は米屋が奢り。夏蜜柑は。彼の美人が。信玄袋から出したのである
それは。米屋が。しきりに。色々なお咄をしながら。お菓子を呉れたり。始めての船中をいたはッてくれたりするので。何だかたゞ頂くばかりでは濟まないやうな氣がして。世なれぬ樣に取出したのであつた
下司ばつた娘は。鼻緒ずれのした上へ。その海老色が染まつた足袋に臆面もなく。蹶出しもしめて居ぬ裾を蹶つて。出たり入つたり。目まぐらッたしいやうにしてゐるのだ
米屋は。何でも。自分も。房州出身ださうで。頻りに透綾と話をしてゐる
『あゝ。あの新橋の花鳥てすかい。今はもう。あんまりよかァありませんよ。私もちよいと三百ばかり喰ひつかれたゐますもの。えゝ。だからね。見てくればかりよくつたッて。料理屋なんてえものはしかないねえ』

と云ふと、膝を折ッて、腹ん這ひになッてゐた年増が。かぢりかけの微塵棒を手に持つたまゝ起上つて

「へえさうですかね。花鳥も不可ませんかネ」

と横槍を入れた

「新橋だら。あの一角堂も近所だんべえ」

透綾は米屋にかく聞いた

「近處にも何も直ぐ一軒置いて隣でサア。あれもねえお前さん。先代は。天保錢一枚で。あら程の身上を拵へ上げた人だから。まことに傑物だッたつケ。當主がグータラで駄目なのサ。彼處にも私ア千兩ばかりやられてゐますよ」

米屋は。ぢきに身代自慢だ

「私もね。有り難いことには。方々のお邸へ米を入れてるので。シイッとでも云はなければ御目見えの出來ない人達に。つひ歩きながら御挨拶も出來ますのサ。此間もをかしくッて……南部樣ネ。彼邸へ家から米を入れませう‥誰か申上げたか知らないが。殿樣が。丁度私が行くとゝ御門の外で馬車へ御乘りなさらうとする所だッたが。おい。今度の米は惡いぢやないかッて。仰しやるから。此方もぬからぬ顔で。だッて殿樣。ありやアお國のお米ですよと申上げると。さうかい。ぢやアしかたがないナンテ大笑ひになりましたよ。アハヽヽヽ。大名なんてものアいゝ氣なものサ」

馬車。殿樣。大名などゝ云ふ言葉に。彼娘は。又此室の人となつた

米屋は。我咄に引き入れられる人の。次第に多いのを嬉しく思つたらしい

『それに引替へて。石黒の隱居あれもお前さん。御存じかは知らぬが。和田の生れですテ』

又しても。透綾を當の敵にして說き出した

『あの隱居は。夫アなか〳〵皮肉てネ。やつぱし家から米は入れてますが。此間は飛んだ目にあひましたよ……何だッてお前さん。何でもいゝからすばらしいのを持つて來いと云ふ。始めからの註文だから何時だッて。いゝ米〳〵と持つてッてますが。或時ネ。餘程選るやうにしてはやるんだが。二粒三粒石が入つてゐたと云ふんで呼びつけられましたよ。それもちやんと車で迎が來たんだ。何の御用かは知らぬが。來いと云ふのなら行かざアなるまいと。早速飛乘つて伺候すると。隱居所の方へ通して樣々の御馳走になつた……ハテ用は何だかしらと。頻りに此首を傾げてゐると。盃ももう押ッつけ納めやうと云ふ時分になッて。隱居はかう云ふんです。お前ん家の米は。近來ちつと固くなつて來た。おらア御存じの通り齒なしだから。これよかも。もうちつと柔かいのを寄越して貰ひたいよと。出されたのが石二ッ。紙に載ッけてうや〳〵しくてしたからネ。全く穴にも入りたくなッて。早々に逃出したが。あの隱居も。なか〳〵すれてゐますよ』

始めは。皆さんを醉はせないまじなひだと云ッてゐたが。透綾をつかまへてから。こんな事ばかりを云つてゐる

『それからね有り難いのは鍋島さんサ。今の殿樣なんと來たら。夫ア判つてゐる人間て。毎年の正月

御出入り一統へちやん〳〵と五圓づゝ下さる。さうして十五日には御馳走をして下さるんてすよ。私共が。其勸進元だが。龜清あたりて。其御馳走を頂いてると。いゝ加減の時分に。若大將の御出馬て。昨年はどうも能くつとめて呉れた今年も相替らずやつて貰ひたい。何にもないが。目出度く盃をあげてくれと。云つて。後は如才なく歸つてしまふ。あゝいかなくつちやア駄目てさアね」

と云つてゐる時に。年増は。カバンを枕にして。コートを腰のあたりにかけると。ゴロリと横になッた

晴々しい空模樣。風もちつとも有りやアしないが。波は荒くなつた

船は今。觀音崎を過ぎてゐる

彼の美人は。懷中をさぐッて寶丹を取り出したが。幾度も〳〵それを呑むだ

別に醉つたやうな風もない

米屋は。この有樣を見。又娘の煙草をのんてゐるのも見たが

『皆さんは醉はないから感心だが。私は若い時から旅が好きて。方々を歩きましたから。自然色々な目にも逢ひましたよ。だが。一番こまつたのは。船中てお產をされた時てす。而もそれが玄海灘てすからネ。臺灣から夫婦連れてのつた。よしある人なんてす。醉つての上のお產だから。實にみじめて。可愛さうなものだと思ひましたが。いゝ鹽梅に船のお醫者が來て。始末はすつかりつけて行きましたつけ。彼子も。十位にはなりませうよ』

往事を追懷して云ッた

「あかんぼと云へばねえ」

寢返りを打つて。此方を向いた年增は

『あたしは。かうやつて。房州と東京との間を幾度となく行つたり來たりしてゐますが。もう久しい前でしたつけ。あかんぼを落つことした人がありましたよ』

と云ふ

『さう〳〵。そんな話がありましたネ。お前さん見てゐなすつたかね』

是は米屋

『え〻〳〵。見てゐるにも何にも。現在一所に乘つてたんです。何處のおかみさんだか知らないが。下の方で海に向けて。あかんぼに小便をさして居たんですよ。丁度。海はこ〻いらでした……それをネ甲板から覗いてゐた男が。止せば可いのに心切心で。おかみさん櫛が落ちますよと。たつた一言云つたのだが……有り難う……と。そこはほら若いからネ。右の手を離して。あたまに觸る拍子。あかんぼはボチャンとなつてしまつたんです

ハツと思ふ中に。船は一町も進んで行くし。大騷ぎやつて引返したツて。船は一體グルリと一廻り廻らなければ。元の所へは返れないさうだから……戻ツて。救ひ上げは救ひ上げたもの〻。もう蟲の息て。房州へつく迄には。死にましたよ』

『ム、』

これは、米屋ばかりの聲ぢやァなかつた

『こりやァ又ちつと違ふが。つひ四五日前ですよ。房州は金谷あたりから乘り込むだ二人づれ。どうせ東京から。養生がてらに。房州へ行つてたのゝ歸りでさァ。男は美男子だがひどく。窶れて。顏色も惡かつた。女も美女ではあつたが。やつぱりくつたくはしてゐたらしい

夜行ですよ

男は先づ飛込んでしまつたのだらう

二人とも。暫く姿が見えないと思つてゐる中に。女の方が。甲板にゐるのを。船員が見つけた

もう十二時過ぎ。それに女が一人で。こんな所に居るのは危いからと云つて。注意をしたけれども。いゝえ。あつちへ入ると。頭痛がして不可いのよなんて云つて。聞かない。船員も。男の飛込んだのを知らないからあゝさうですか。位で引込んでしまつたが。何時の間にやつたものか。靈岸島についた時は。二人人數が足りなかつたさうですよ』

米屋は語り終つて彼の美しい人を見た

冴々しい目を見張つて。夫人は熱心に此の物語を聞いてゐたが

『それはどこいらで御座いました』

鶴の一聲。一座は始めて美人を正視した米屋は得意顏に

『たしか富津あたりで御座いました』

三

船は金谷に着いた
美人は下りなかつた
誰も下りないのだ
さうして。新らしく客があつた
米屋は。其鯨のやうな目で。新來の人を見上げたが
『ヤア四郎吉か』
いきなり呼び棄てにしたのである
『ヤア叔父さん』
驚いて座つた男は。米屋にピッタリ寄り添ッて
『此船で叔父さんに逢はうとは思はなかつたよ』
『だから悪い事は出來ないと云ふのサ』
『人聞きの悪いことを‥‥』
二十ばかりの男は。女も居るので。耳をあかくした
『和田へ行くか』
『えゝ。ちよいと北條へ寄ッてきます』

「ぢやア一所に行かう」
「叔父さん。お前さん。今朝つからだから。御腹がすいたでせう。如何です。これをやりませんか」
赤い更紗の風呂敷包みを解くと。經木の折が出て來たのだ
「だッて夫アお前のだらう」
「あたしやアもう喰べて來ました。いゝ〳〵ッて云つたんだけど。金谷の叔母さんが。家に折があるからッて。拵へて呉れたんです」
「ぢやア貰はうか」
もうかうなると傍若無人なもので。米屋は若者の手からそれを取ると。ムシヤリ〳〵やり始めた
軈て喰べ終つて。後の一粒々々を拾つてゐたが
「叔父さん。いゝ加減におしなさいよ」
と云はれた
「さうてないよ。商買になると。一粒でも勿體ない。下駄屋がいゝ下駄を穿かないやうなものだ」
かう答へて。平氣で平らげた
「叔父さん。船から見ると。鋸山も格別だネ」
「さうよ。乙ナ鋸もあつたもんサ。當り前なら。下へ向いて居るものだが。當今は。こんな眞仰向きが流行るのだらう。一體何を切る積りだらうか」

『さア』

『雨か雲かを切るのだらう。到底も雪は切れやしまい』

『アハヽヽ。叔父さんは相變らず。氣散じていゝね……やア。彼處に鷹がとまつて居る』

成程。船から一町ばかり彼方の岩には。鷹がとまつてゐるのである

岩だらけて險呑さうな海だが。こゝまで來れば。もう此方のもので。船中の顏も。何やら和らかくなつて來た

美人は。やつぱり座つてゐたが。後の人は出て行つた

尤も米屋と若者はゐる

『叔父さん。鷹て思出したが。まだ外にいゝものを持つてますよ』

『何だ。喰べものか』

『さうてす』

手ごろの箱から。小さな卵を出した

『卵かい。うてゝあるのか』

『卵は卵。うて卵には違ひないが。ちつと違ひますよ』

『何の卵だ』

『山鳥のてすよ』

『是ア珍らしい。おやア何だ。此お嬢さんにも一ッ上げな。お嬢さん。貴女なんかは。こんなものを御存じはあるまい。これは。ほら。百人首にある。山鳥の尾のしだり尾のッてえやつの子ですよ。一ッ御上んなさい』

とすゝめて

『それで何ですか。何處へ御出でなさいます』

『ハイ。あの北條へ』

『御親類でも御有んなさるかネ』

『いゝえ。あの親類のものが。小松屋に居りますので……』

それで米屋は。すつかり讀めたと云ふ顔になつたが。急に思ひ出したさうで。網に上げてある。中位の風呂敷を下ろして。それを解き。伊勢崎銘仙の單衣。絽の羽織。透綾の羽織を。段々にひろげて見てゐたが

『チヨッ。あはてた時はこんなもんだ。お山どんめ。羽織の紐を入れることを忘れやアがつた』

と獨言ちた

さるにても。多くの旅をし。多くの人に接したと威張ッてゐる此米屋は。彼の美人を。果してお嬢さんと見たのであらうか

THE FIGHTER

BY

KIICHI KANEKO

He feels strong, the more and more,
As he hears the voices rise against him,
And the world treats him badly;
And how he loves to fight!

Let his idea be alone and free,
Tho he has no freedom to come
To the country to which he belongs;
Tho his parents are waiting for him.

He will fight with the whole world,
However hard the fight may be,
However cruel the people outside are;
For his duty is to fight.

Let him find no sympathy, if you will,
Even in the home of his own,
And let his idea be scorned at
By those who love worldly success.

Yet, how he loves to fight;
Let the world be hard on him
For he was born for it:—
All the nonsense, all the fools come to him.

Let no hypocrite stand for his part,
He feels stronger when he stands alone.
Willingly he will fight and fight
For the sake of justice and truth.



天日槍

吉野臥城

一

沖つ藻邊つ藻亂れては
妖しの姫のそそけ髪、
白眞裸の身をかゞめ、
眞珠の盤に燃えさかる
美しき灯を吹き消して、
ものの咒はしの長息や、

白がね羽羽箭たばさめる
手力強のあら男浪、
さけび荒らのわれ聲に、
闇の鐵戸を押し開き、
渡殿ぢかくひれ伏して、

一鷗立ち立つ潮ざゐに
い漕ぎ早なる志許小舟、
夕風吹きの薄寒に
泣くたわや女を慰めて、
胸毛あらはの赤火男は、
『生命をこひの新室や、
熱き情に觸れも見よ。
千代を一夜の夢がたり、
新羅の醜の夫忘れ、
女心、幸に溶けなむ。』と
居寄るを、鷹の爪それし
小鳥の尾羽の彩亂れ、
草野葉ぐれに竦むごと、
戰き慄ふたわや女は、
ことば少なの眼つぶりに、
わが世消えよのしみ悶え。――
ああ色慾と排擠と
かたみ鬩ぎに、平和の

淸天地の花を扱く
伊佐那岐の裔の人の子ら、
卑し計略のほこらひに
作りゑらぎの面憎さ。
吼ゆる潮の白沫の
しぶく氷雨の急攻に、
息もつかせず攻め擊ちて、
姬の御領を淨うせむ。」
面擡げする目づかひに、
仰せいかにと伏し待ちぬ。

左手に潮の花を折り、
珊瑚戶による遠ながめ、
「曾ての攻に擊ち洩れし
掠奪敏捷の舟かげに
吾を憚らぬほしいまま――
戀になやめる心弱、
ややに夜に入る闇の今、

島曲近うもいざなはむ、
女波いかに。」と宣へば、
雪白大理石の艶胸や、
若きまろ乳のふくらかに、
透き肌、練の裳を曳きて、
靈鳴沼琴かい擁き、
おましの右に畏まり、
「天は晃星、わが海は
ゆふの妙花時じきて、
常美しの宵ながめ、
目路障りなる志許舟を
擊つ嬉しさよ。――さば、男浪、
吾は奏でむ。」と立ちあがり、
こゝろ勇みの小跳りに、
男浪かがやう眼を据ゑて
もの洩さじの遠狙ひ、
「術はよきや」と宣へば、
「善哉」と奏して、波がしら

西海の鰐に鞍おきて、
さと潮ざゐに乗り入れぬ。

人の叫びのおろ聲に
心たのしみ、奇魂
楽を知らざる赤火男も、
をりから動く戀情、
燃ゆるところ火の閃きに
いざなはれては、大海の
くしびの絃の高鳴を
聞くともなく引かれ寄り、
しばし小島の夜の影、
舟はてむかのたゆたひに、
程を測りし荒男浪、
きほひ疾風を先撃に、
舟を搖蕩す鯨波の聲。
ざはざは潮の上越に
どと崩れ伏す穂白波、

怒りて走る龍濤の
くねり、逆捲き、相搏てば、
傾く舟の腹あがり
噛みつきかへる狂濤、
右往左往に攻め寄する。
「時來りぬ」と荒男浪、
かくれ岩角踏み鳴し、
羽羽箭つがふる強真弓、
風切早に射放てば、
朽ちて老木の倒るごと、
舟覆る潮さけび。

二

新羅群山あまぐもり、
遠野をつゝむ薄雲の
おぼろげ寒の夕暮を、
人目しのびのひた走り、
従者もつれざるみ姿に

怪む民を見かへらで、
天日槍の妻覓ぎゆく
息吹も荒の篠野風、
さやぐ葉ずれの淋しさに、
つと立ちどまる物思。
又ひとしきり吹き狂ふ
風のまぎれに、けだものの
虎の嘯く遠聲に、
「愛妻はや」と口ごもりて、
目を圓かの覗ひや。
百千細川聚め來て
淀む堰の溢れ水、
とどろと落つる直下りに、
白泡吹きて奔るごと、
思ひあまりて、ひた驅けに
道の直路を追ひ驅くる。
辿り着きたる荒磯の

眞砂路踏みの足萎に、
溜息急忙のとぎれ聲、
漁夫呼べば、かしこみて
「こは啻ならぬみいてまし、
何事にか。」と伺へば、
「吾妹——舟出の吾妹、その
舟出を汝知らぬや。」と、
身悶え惱むあはれさに
漁夫そゞろうち咽び、
「思へば惟し、舟人の
魔とぞ恐るゝ赤火男が
夕風待の艤、
泣くたわや女をかい乗せて、
曇空見のほくそゑみ、
諷歌あげて漕ぎ行きぬ。」
「あ」と叫びたる妻覓男は、
物狂ほしの小走りに、
「愛妻はや」と高呼べど、

夕海原ぞ返響せぬ。
岩鼻高に攀ぢ登り、
目庇みれば、海遠に
い漕ぎ逃げゆく一つ舟、
「憎や」と力たにぎりて、
空間を打ちて撓れたる。——
耳の心にふれ鳴るや
金鈴の音におどろけば、
美し夢のまぼろしの
雲のきらひに現れて、
高天原の姫神の
よびます如き麗朗聲、
「目醒めよ、日槍。——愛妻の
ひとり失ひ、ますら雄の
事のことごと終れるや。——
心弱くも青巌の
苔の莚にのけぞりて、

泣のもだえの女々し死、
汝が企てし遠海の
若き島根の國拓き、
我の誓に耻ぢぬかは。
見よ、赤火男のしこわざに、
海の平和、——はた陸の
靜謐をさへ咒はれて、
醜の氣ゆれの汚れ氣に
生命くるしむ清蒼生、
救ふ天職を負へる誰ぞ。
ああ汝は、地にめづらなる
『愛』と『勇』と『憧憬』の
若子益良雄。——覺醒めよ。」と、
天の活息吹き籠めに、
「雄々し、美し、高尚の
心情活きよ」と、吹き込みぬ。
虹の花環の彩の夢、

日檜、覺醒のところ眼に
あたり覓むるただずまひ、
夢の跡追ふ微笑に
雨氣薄月眺めては、
胸晴ごこち、雄力の
とみに身に添ひ、魔が神も
手捕にせむのをたけびや、
譬へば、植ゑし石竹の
一日照る日のうなだれに、
そそぐ夕立强降の
からりと晴の明り庭、
葉莖直立つさながらの
『勇』にかへる若姿。

「いかに日檜よ、醒めたりや。
あゝ大いなる平和は、
奸曲撃ちし健闘の
活歴史にこそ見るべけれ。

わが益良雄よ、小さなる
平和の名を呼ばずして、
正義の爲に健鬪の
場にしも立て――鰐が住む
海の東へ、東へ。」と
天なる聲のささやきに、
眼かがやかの活歩み、
煌に閃く影を見て、
「甦りたる『望』よ。」と、
高鳴る、潮の反の光り、
化性の樂か、夜に響く
海のあなたに眺め入る。

三

過誤なりき。――瀨戸の海、
青繁小島、ここだくの
美し小嶼の近眺め、
島がくれゆく苫舟に、

労く妻が優姿。
戀しげ増る春の日の
もゆる陽炎身をやきて、
「望」忘るる東の闇の
夢見ごこちのあこがれや。
鳴門に落つる渦潮の
遠鳴を聞く海峽千鳥、
波靜なる砂濱の
明石千鳥を慕ひ寄る
ときめき心、妻を覓ぎて、
大洲の咽喉、——難波津や、
青柴垣の蘆さやぎ、
寂音の笛の葉分船、
覗ひ寄れば、水門の神
「誰ぞ」と咎むる猛聲に、
「新羅ますらを妻覓來」と、
日槍をらびて答ふれば、
呵々とゑらがひ、「新羅人、

亡せ妻覓の徒らの
労に汝も死なむより、
雄心おこせ、日槍よ。」と、
示威に放つ鳴鏑、
海どよもして鳴り響く。
「さば思ひ絶ちて、鏑矢の
飛びゆく方に引き返し、
國を占めむ。」と、大鳥の
翼廣櫂漚掻きて、
切浪比禮をうちふるひ、
瑠璃紺青の海原に、
日落つるころを、播磨なる
宇頭川下に舟はつや、
大國知らす葦原の
志擧乎の命が訪ひて、
「汝は國主、とつくにの
さすらひびとに、暫くの

安き棲家を得させよ。」と
請へば、志學乎は「海中の
よきを選べ。」と、高らかの
許のことばに、退きて、
日槍、眞劍ぬき放ち、
雄力ごめのたにぎりに
欛をにぎりて、鋭刃を
夕照眩き海水の
底の小貝もかがやけど、
穂の尖深に挿し入れて、
攪の荒らに攪きなせば、
刃走りまろぶ波の珠、
潮溫凝りの島と化り、
更に攪きなす刃の反りに、
波うち荒に陸削ぎて、
海底知らの浦曲成る。
化成のくしびに畏みて、
「吾を助けます神わざの、

あら尊や。」と、高天を
仰げば、兵衆の踴躍りて、
えいえい聲の彌勇み、
浦曲に舟を漕ぎ入れて
宿れるさまは、大鳥の
翼しばの間收めつつ
眠に就くに似たりけり。

四

山のみむなみ、はた北の
狹國廣邦ことむけて、
勇比びなき英雄神の
志學乎も、海に宿許りし
客神の壘んなる
行かしこみ、先行きて
國を占めむと國巡り、
巡りのぼりて粒丘、
天路花やぐ紅雲の

ほがら日和の朝あけや。
白朮がもとにやすらひて、
食します飯のこころせぎ、
口こぼれ、風に散りしかひ、
小石と化りて地に落ちぬ。
「黄泉平坂間塞の
大石ならで、圓らなる
手ごろの石や。——遠投に、
日槍の夢を破らむ。」と、
地も震ひよの身動ぎに、
力を籠めて投げ撃てば、
飛ぶ鳥なして影消えぬ。
おどろき醒めし日槍らは、
「陸なる神の戯れぞ」と、
怒の聲の告高に、
「物具着けよ。——曙の
風に帆張れよ。いざ行きて、
たかぶる志擧を攻め撃たむ。」
鼓うてば、出づる日の
光黄金矢みだれ射る
雲の照戸を、横ざまに
飛ぶは物見の白鳩か、
落ちぬとみれば飛びあがり、
陸路青山翔りゆく。

磯曲の物見ひと撃に
攻め滅して、押し寄する
日槍の軍、響ふれば
勢ひ狂ふ荒海嘯、
揖保洗ひて直馳に、
宍禾の境うち越えて、
とどろと落つる比治の里、
宇波良の村の表戸を
搖り動して、川音村、
河の畔に陣取りぬ。

一夜水の音擊々と
軍鼓を打つごとく、
あるは乘り切る早馬の
足掻みだりて越す如き、
ざはざは瀨の音高まるに、
日檜は兵衆をいましめつ。
霧のまぎれに青馬の
逸物驅りて、「つづけよ」と、
志擧乎が寄れる奪谷、
蹄はららに突き入れば、
不意の擊たれに、黃葉の
風にわななき散る如く、
影をも止めて引き去るを、
「洩さず擊て」と、鯨波の聲
谷に反響し、樹を震ひ、
高飛ぶ鳥の廣翼、
山を蔽ひて攻めにける。

折こそよけれ、み救ひの
新手兵きたりぬ。」と。
志擧乎は天のはやり馬、
ゆたに鐙を踏み鳴し、
他の軍のよこあひを
征矢つぎばやに射かくれば、
既に驕れる日檜らの
防ぎがてなる驚愕に、
堤壞りし洪水の
勢あまりて奔るごと、
高家の里にしりぞきて、
敗れし軍犒ひぬ。

五

眞夏の神の新粧、
青嶺、綠野若やぎて、
望に活ける國原や。
ひと日、日檜は高丘の

翠したたる璢木かげ、
草にうもるる半身の
化石に凭れ、冥想の
うつらうつらと夢に入る。

雲ちぎれとぶ荒海の
夕日を砕く黄金潮、
燦爛高浪横ぎりて、
鰭は雙羽の鰐五つ、
頭ぞろへの波掻きに、
波渦の輪の潮ぐるま、
とどろき高に軋りゆく、
車に乘れる妖精は、
とをの手綱をかいぐりて、
さばき巧に鰐を驅る。
ああ亡靈か、白妙の
衣被きたる愛妻に、
日槍、「汝」はと驚けば、

「吾は赤火男に奪はれて、
海原わたる船のなか、
醜の情を斥けし
とこしへ清き汝が妻ぞ。
さはあれ船は、綿津見の
妖しの姫に呪はれて、
砕けて沈むしばの間に、
吾が身亡せはも亡せざりし
魂は、幸にぞ生きぬる。」と、
美しゑらぎに鰐を止め、
「ちひさ新羅の國捨てゝ、
遠く東へ海渡り、
英雄志擧と爭ひて
國を占めむの雄々しさよ。
唯一たびの蹉跌に、
思ひくづをれ悲しむな。
心强かれ、吾が夫よ、
海はわれこそ平けめ。——

陸は」と、夫を見かへるや、
白金の小鞭ひとうちに、
五つの鰐を躍らして、
燦爛高浪分け行きぬ。

「ああ夢なりき。——常春の
『愛』かくまでに輝きて、
我をぞ振ひ立たしむる。——
ふたたび軍整へて、
眞菅高原占めむか。」と、
丘の麓に屯せる
もののふを率て、柏野や、
振風比禮をうち振りて、
伊奈加川原の砂煙
大空高く蹴あげつつ、
嘶く馬をひたうちに、
さと中流に乗り入れぬ。
川のむかひの笹葉野に
伏し匿れたる志擧乎らは、
さながら風の粟生畑
靡きし穂波もろ立に、
雲の八重旗ひるがへし、
征矢を霰の逆攻に、
軍のなかば失へる
日槍は遠く落ちのびて、
雲箇の里の波加の村、
はかなく消えし大望の
夢のゆくへを偲ぶかな。

六

朝射香土のはためきに、
烏羽雲のみだれ魔は
ことありの顔に躍りつつ、
渦雲烟盛吐きて、
暗うなりゆく天地を
冷かに見るあざわらひ。

もののものしやと叫び來る
風の男神は鳴鏑
間なく隙なく射かくれば、
雲の魔軍敗られて、
しどろの崩れ、はらはらと
雨の幾粒降りやみて、
天路高照り綠野の
光かがやき渡るころ、
志擧はすぐりの軍兵を
率てこそいそげ、波加の村。
日槍の陣を望み見て、
「あな後れぬ」とひとりごち
「さはあれ擊ちて、國占めむ
ことは易けど、戰鬪に
蒼生の疲瘁も顧みて、
ただ年久に戰ふは、
たとへば熱砂かぎろひて、
紅花ひらく南國の

野邊に、咒の焰吐く
毒蛇ならじか。――まづ會ひて、
かたみの心語らむ。」と、
川ぞひ小野にまぐさかひ、
使を陣へつかはしぬ。

軍の備見めぐれる
日槍は、いたくよろこびて、
「蒼生の疲弊もさりながら、
ふるさとびとの健兒らを、
なほ喪ふに忍びむや。
戰鬪によらで吾と汝との
國を分ちて治むべき
術よ、いかに。」とありければ
かへりごとする使得て、
「諾ひけるか、うれしや。」と、
志擧乎は馬を疾驅に、
青野草蹴えはららかし、

日槍の陣に赴きて、
「倶に黒土志爾嵩に
到りのぼりて、はからはむ。
いざ。」と、ねもごろ誘ひける。
木ぐれ細徑飛廊の
影呼ぶ聲に、益良雄の
ふたり、或はうたがひの
黒き影逐ふ物おもひ、
爪上坂の椎木立、
まぼろし歩むこぼれ日に、
胸はるけゆく草の平、
彩斑の垂尾長曳きて、
日光に矜る山鶏の
姿よ、さながら鳥の王。
「この美しき鳥の棲む
國は誰が手に入るべき。」と、
日槍のいふに、「ことはしも、

廣き國原見ゆる地や。
汝も三條のくろかづら、
(われも三條の黒葛)
み足に著けて投げ放り、
これの落ちたる國占めむ。
狼熊寢る高原を
占むとも、われな恨みそ。」と、
志擧乎ゑらぎて見返れば、
「ただ運命ぞ」と、黒葛
足に著けてぞ投げにける。
志擧乎が投げし一條は、
雲間掠むるほとゝぎす
をちかへりては、但馬路や
氣多の郡に、一條は、
高飛ぶ天の鶚鳥
夜夫の郡に翔りゆき、
また一條は、山鶏の

山越えがての弱翼、
三形の里にはたと落ち、
天日槍がくろかづら
三條は三條、隼の
翔りすばやに、但馬なる
出石の里に落ちゆきぬ。

七

「されば出石に立籠り、
世の風雲を望まなむ。
ああ放浪の吾を容れて、
(たとひ戰鬪は幸なきも)
心いささか慰めし
播磨の川よ、野よ、山よ、
汝はとこしへに青かれ。」と、
幾回顧に別れ去る
ますらを涙なからむや。

翼いためる大鳥の、
草野葉ぐれの餌饗に
地を踏みつつ、青雲の
飛ぶ影慕ひ、鳴くがごと、
しばしをやまぬ雄心や。
一とせ國の境越え、
瀬戸の内海の青潮に、
幸のうるほひ豊かなる
南の國を占めむとて、
勢猛なる八千軍を
率て、ひた奔る勢賀の川
早き流に沿ひ下り、
星肆山の夕風に
馬を飛ばして、多馳に入る。

事は終りぬ。――ここも亦
大國主にまつらひて、
稜威に草木伏し靡き、

いとうらゝかの朝日和、
去りて糠岡たづぬれば、
雲とむらがる神軍、
稲春き糠を高積みて、
あゝさながらの壘かな。
日槍、較壺うち叩き、
憤怒にもゆる身様して、
「たとひ備は堅くとも、
わが勇しき兵衆の
鋒の前には脆からむ。
ただ一揉。」と聲高に
振ひ勵し、迦具土の
末枯草野拂ふごと、
いきほひ荒に攻め入れば、
糠の嵐を先驅に、
石斧、投火矢、投槍を
つくして防ぎ戰ひぬ。

今し戰闘たけなはに、
はざま岩蔭、荒獅子の
狂へる虎と相打ちて、
吼の叫びの山を岑を
どよもすが如、兩軍の
入り亂れたる鯨波の聲。
「見よ、仰向に、うつ伏に
斃れし屍乗りこえて、
荒馬鞭うち、ながれ血の
糠もあらはの駈撃に、
斫りまくられて引き退く
大神、あなや危し。」と、
少彦名の木の間より
つと現れて馳せ向ひ、
新手つはもの指揮して、
日槍が軍攻め撃てば、
春の一日の山雪崩
辷りくづれて落つるごと、

はやたたかひに疲れたる
軍崩れて落ちゆくを、
盛り返さむと馬立てて、
「引くな」と日槍雄たけべど、
敗るる運命奈何せむ。
飛び來る征矢に、その腕
射られて鞍にうつ伏すを、
從者は驚き駈け寄りて、
片手抱きにかい擁き、
かこみ破りて遁れゆく。

ああ事終り、さだまりぬ。――
播磨くがちを占めてより、
幾戰鬪にやぶられて、
雄圖むなしく、天雲に
憧れて鳴く羽折鳥、
こぼれ日動く谷あひの
木ぐれ古巣に潜むごと、

「出石の里に籠り居の、
安き昨日を夢みむ。」と、
いたて忍びの慰藉に、
ひと顧る山の雨。
夜越え急げば、漸ややに
跡追ひすがる敗殘の
兵衆。――されど、百足らぬ
小勢出石に落ちのびて、
曙の城のぞむとき、
ますらを心いかならむ。

(巳の歳初秋作)

歌

尾上柴舟選

○ 渡邊孤帆

大比叡の峯にたゞよふ薄靄の鐘にながれて吹くや朝東風

わが胸のひゞきやかよふ夕暮の雲のみだれのたゞならぬかな

ふる夢のよみがへるべき宵ぞとも暫しともさでもの思ふかな

病みあとの面やせよしとほめられて人はさびしう笑みましにけり

しのび音に歌もうたひて悶々の苦しき胸をまぎらす人よ

寂寥のこまかき歯してわが胸をはむ音ともきく秋の夜の雨

○ 吉岡夕舟

ほとゝぎす卯月ばかりのあけぼのや草も木の葉もうす冷のして

棟あふて汝がまたの名は雲見草くもみて希望足るとし云ふか

猿のごと白き歯をむき柿くへる山伏を見る秋の山かな

野葡萄は君が瞳よきらきらと露に光りて我ぬすみ見る

尖柱戯岩窟にすむ山祇は日ねもす夏の永きを知らず

語部がもの云ふさまにはいかの木青葉さらさら風わたるかな

○ 塚田夕波

またゝ野に泣くと目さめて病む窓の枕にきゝぬ初秋の風

涙して明日なきやうに此の宵をこの木枯を來つると人は

夕空や母ます遠き信濃より湧きても來やとなつかし雲よ

○ 大村流外

わが心赴く方や木犀の匂るに人の立ちてゐまさむ

松並木お江戸へおくるめしうどのとうまる籠に啼くほとゝぎす

磯の家は皆一様に灯ともしぬ海の彼方に月のぼる時

夕立はまろぶがやうにすぎ行きて青き疊に月のかけしぬ

わが吐息天日蔽ひ小雨するさまとくもりぬ野に君まてば

あゝかゝる寂しき宵は故郷の椽に物思ふ母おはすべし

陰府の戸の開く音ともきいてゐぬ黄昏まよふ山なる鐘を

山の雲まくらにせまる石室の晝寐はさめぬ遠雷なりて

ものみなの光流るゝ秋の丘君は立ちけりゆふ日をうけて

水色のおん衣召す子の百人が居ならぶ如し野の白百合は

わが胸に似たりと思ひ夕雲をながめて居ればなみだこぼれぬ

○ 秋田華溪

若草に水うつくしき野の朝をつめたき雲の地に流れたり

目はしひて倚るに壁なき罪人の涙ながらに聞く秋の風

罪負ひて來し身ながらも遠國の春ゆく野邊に母を慕ひぬ

○ 塚田擣衣子

斧のおとに信山の雲動きけり星まだきえぬ朝明けの森

彩雲をそれし光のひろごりてくれなゐさしぬ青葉の森は

旅ながら母が忌日のわびしさよ途に遇ふ人みな

なつかしき
小夜きぬた擣つ手逝きにし姉に似ると灯ほそめてよるや荻の戸

○　上郡葉樹

青葉すべる玉のしづくにふて染めて栄えあるあさの虹うたにせむ

あさばれの岡の小森に詩集よむにとりは馴寄りてよき音を洩らす

潮の香のたからも迫まる夕磯やみたりがかげの白砂になごう

みづ汲めば藻のはなゆらぎみずうみにあさ風白う波吹きてゆく

しら露ははなさゆらぎに蘿すべりかるうまろびし苔の上かな

○　秋山琴泉

天平の甍の香りのすゞしさや斑鳩寺のはつ夏のかぜ

○　川俣蓼紅

なつかしき人の心によく似たる月は古郷の撫子野より

○　山下里子

君まさぬ日は大き野に小さう見し灯の如きさびしき心

○　秋月孤衣

母なけば子のむつかりて子の泣けば母のなやみて夜は明けにけり

○　菅原喜代蔵

行けど行けど綠につゞく夏野道空には浮ぶ雲もなくして

○　香川里霞

百合咲く野少女が歌ののとかさに日はまどろみぬ夢見るやうに

はかなうて逝きにし人のかげも見ぬ栗の花散る森陰にして

○　上村萩江

朝風は夏の樹立のみどり吹いて草家かすめて湖

へとすべる

風たえし夜のしゞまに花すべるつゆのひゞきをかぞへけるかな

うつくしきあや雲うかぶみづうみに白帆の船のならびて來るよ

あさあけや野邊の小草のゆめゆすりすゞしき香してふく夏の風

ほのしろう白蓮かをるおん窓の青簾すゞしうみじか夜明けぬ

すべしらずひと夜ふた夜は御柩に涙そそきて夜を明しけり（以下二首友の父の死せし折り）

ゆめならば覺めよと願ひなきがらに近うもよりて御名とひて見し

〇　曾根朧月

朝月にねざめをかしき里なれや眞夏といふにうぐひすなきて

月おちぬ森のふる沼の藻の花の星より白きひかりのこして

荒原の木かげに入りぬ旅人は母なづみよる子に似るさまに

〇　小宮山春子

烏賊の黒汁潮にながるゝごとしとも空をながめぬ五月の窓に

花かげにねふれる人はうす笑みぬ鴉片に醉へるさまとも見えて

牧場へと檳榔しげる森かげを乳桶さげし子とゆきにけり

夕顏は露てほしけりわが言にさながら君がうなづくさまに

うす紅のはちすの色としののめは明かりそめけり夏花の丘

〇　廣浦藻花

深林や肉桂わけて象を狩るニグロのむれに風かをるなり

護謨を煮る木小屋の人は深林をもれくる夏の日にみどりなり

うろこめきうごかぬうすき水色の花ひかるなり初秋の丘

小羊の毛の色すなるあさ雲は楡の木立をはなれて牧へ

日向雨夢かのやうにゆく帆見る小磯は松の花もまじえて

朝空は小原野菊の白露にぬれたるやうに澄みわたりける

天の川

漱石選

天の川夜涼流るゝ湖上かな　松濤樓
朝立ちの人馬の空や天の川　同
船着けて夜水くむなり天の川　同
天の川ふりさけ見れば蜀の山　同
天の川鹽屋の煙低きかな　同
天の川灣頭高く忠魂碑　同

天の川林沼に影湛へけり　同
屯田の天幕の空や天の川　同
天の川北前船の帆空かな　同
天の川犬吠岬を斜かな　同
天の川一雨過ぎたる灣の上　同
蜩のなほ啼く森や天の川　同
天の川配所の空を流れけり　同
里人の水汲む聲や天の川　葦水
筧落つる水の溜りや天の川　球樓
伊豆の海や大島見えて天の川　方外
天の川端山に灯見ゆるかな　皷雲
天の川窓に夜涼をいるゝ人　四綠
天の川西瓜畑の夜は更けぬ　萍也
天の川荻の上風更けにけり　同
親船の舷燈淡し天の川　小草
明け渡す城の夜更けて天の川　同
天の川蟲七草にすだきけり　磨劍
天の川涼しさ動く蓮の池　同

余吾の湖を斜めになりぬ天の川　桃村
天の川角力櫓の高さかな　同
寺町を更けて戻るや天の川　同
山住や山の上より天の川　冷泉
七夕も過ぎて淋しや天の川　同
天の川餘處心なる星もあり　同
荒磯の空うつ浪や天の川　枸骨
天の川漁火ゆらぐ汀かな　同
天の川あの山蔭の人戀し　同
夜釣して島に一夜や天の川　柳波
天の川島の砧の夜ぞ更けぬ　同
燈臺の灯のまたゝきや天の川　同
水暮れて水車の音や天の川　同
松柏の闇を下山や天の川　梅痩
天の川そのこぼれ水や草の露　同
關越の夜明を待つや天の川　同
草角力の篝に高し天の川　同
天の川あり〳〵として見ゆる也　可居

天の川堤と松の間かな　同
入る月の五日なりけり天の川　同
黍多き背戸に出てけり天の川　同
天の川遠き在所の灯が見ゆる　同
蓮刈りて水白き夜や天の川　夕村
此川の空にうつりて銀河かな　同
着港の船に留守居や天の川　同
天の川舟は孤島に沿ふて行く　同
天の川野の大杉のほの見ゆる　同
花火すみて靜まる空に銀河かな　同
蓬生の十歩の吟や天の川　帆萬千
天の川殘暑の團扇鳴らしけり　同
山低く牛臥すさまや天の川　同
灯して筏の人や天の川　同
天の川傾く庵の芒かな　同
門生の露に語るや天の川　同
向ふ高に芒の丘や天の川　同
草山に烽火揚げけり天の川　同

遲々として運河の船や天の川　同
天の川穂黍の里に風を聽く　同
船に寢て枕に近し天の川　同
十萬の甍に霧や天の川　同
驛に入る鈴の遠音や天の川　同
芒野に柩送るや天の川　同
天の川草家の燈籠更けにけり　同
寢靜まる大草屋根や天の川　同
天の川阿蘇の煙りの薄らぎに　同
三徑に餘る芭蕉や天の川　同
城中に砧を打つや天の川　同
畑守が妻呼ぶ背戸や天の川　同
天の川芒に籠る家細し　同
川べりに漂母が鍋や天の川　同

募集課題　粂山子　九月十五日〆切
　　　　　野菊　十月十五日〆切

應募俳句は東京本郷區駒込曙町大谷正信宛の事

●●附記　此號に又も川柳を休載することになつたのは讀者に對して重々濟まぬ次第であるが岡田三面子か用務多端で選評の任を辭されて以來、まだ適任者が見付からぬからである、といふ譯は、宗匠連といふ宗匠連は、皆此燒くが如き部門の暑さに辟易して、遙に房總又は豆相の海岸、まつた日光鹽原の山奥へと落ち延びられたので本城明け放しといふ態である、選評依賴どころの話でない、今や一風一雨新凉が加つて來たからおつ付け柳樽の材料大仕入で惠比須顏で歸つて來らるゝであらーと思ふ、次號までには乾度適任者を見出して、發表することにする、應募者の原稿はそれまで大切に預つて置く。

應募和歌原稿は小石川區原町百三十三番地尾上柴舟宛

煩悶と人生觀

松　逕子

煩悶それ自體は何も騷ぐ程のものにあらず、業々しく言はでもの事なり、それに又人間オギヤーと生るゝより此方骨身に絡みて來れるもの、漸く母親の膝より這ひ出づる小兒すら、早や何事をか意識して泣く、泣くは煩悶の聲なり、凡そ小兒にのみは限らず、欠(あくび)か嚔(くさみ)か馬鹿笑ひか、單純なる生理作用にて涙脈を壓する場合の外は、涙は仔細なくては出で來ぬものなり、口惜しとか悲しとか將た小癪に障るとか、必ず曰くあつての上なり、奥樣が袖口の紅絹(もみ)うらを反してめそ〳〵するもお爨どんが臺所にて皿針を小突いてほろりとするも、種類に分ちは有らぬことなり、それが、小兒が大人となり又原始時代が文明時代と進みては身のまはり百般の事が千般となり萬般となり、從つていさこさも多ければ意識內容も混雜になり偶とせし物の決斷選り好みも容易(たやす)くはならぬことゝなる、即ち煩悶の多くなるも免れぬこと、朝な夕なに生ひ立つ樹木を見よや、幹伸びれば、枝も繁く葉も密なり、逕路に何れ二つはあらぬもの、枝葉の繁密がやがて幹の伸びたる證左ならば、煩悶の增加は人の世の進步を計るバロメートルの高度を示すとも思はるべく、見樣一つにて時には神が高等動物の誇りとして、特に我等に賜はりし月桂冠とも自惚れ得べし。

されど之が人生觀と結合したる結果は甚だ憂ふべきものなり、世間にて騷ぐは慥に此種の煩悶なるべく、何も日常零細の箸の上げ下げにも着いて廻る左樣のものにはあらざるべし、思ふても見よ、お互悠々と朝な

夕なの日影を仰いて、何はなしとも一椀の味噌汁三杯の米の飯に舌鼓を打ち、近所合壁附き合つても格別澁き顔もせずに通せるものは、獨り人世といふものゝ金剛不壞の現實のものにて、之を踏まへて裟婆の道德は出來たもの、正八幡背きはせぬの誓言も起てねばならぬと思へばこそ、よしや嫁姑の間柄、なさぬ親子の中等にて少々位思はしからぬことありても、一たび此處に氣付けば、先づ〳〵と堪忍の袋を締むる次第、然るに人生とは何ぞやと此大切の地盤が搖ぎ出し、さては道德も作り手の穿議にかゝり、善い加減の喰はせものにあらざるかと訝るに至つては、松の根方とばかり思ひて腰打ち据えたる烟草一服が、思はざりき搖ぐ蟒蛇の胴に、オジヤンと爲る程の狼狽なるべく、さてその果ては何となることぞや、心は入れものとやら、御互の胸の中程あやふやなるものはなし、一志の轉ずるところ、そは傀儡の玉手箱、佛出さんも鬼を出さんも勝手のもの、既に現世の盤石を失ひ、道德の羈絆を離るれば、糸目切れたる奴凧、空にや冲る、水にや潛る、知る、ものにあらず、水に潛る方は世に多き迂者(かたくな)に愚痴を並ぶる輩なり、空に冲る方は何なるべき暫く考へ見よ。

人多く華嚴瀑下の飛沫(しぶき)にのみ目を奪はれ、淺間火坑の噴煙(けむり)にのみ心を惹かれ、煩悶といへば落付く先は自殺と定まりしものゝ樣に、さてはと俄に騷ぎ出だせるも、そは唯楯の半面を見たるのみ、煩悶と死、其處に何等の必然の關係あるものにあらず、忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならずとて、潛に死を熊野の社に祈りし小松內府式あるは事實なれど、封土は奪はれ、頭顱は鼓に代へられたる武士の欝憤、遂には敵は本能寺に在りと絕叫したる光秀式あることも忘るべからず、思へば此世は御互同志の寄合の席、自殺は唯だ無斷にその席を滑らしたるまでにて、害といふも消極の害に過ぎざるが、席の眞中にのさばり出てゝ人も無げの振舞、惡口雜言は愚か皿小鉢を取つて一坐に打ちかゝる痴者(しれもの)に至つては、害も害も積極の害、最早打ち捨て置かるべきにあらず、前にいふ空に冲る

方とは此輩をいふのみ。

世には救世策を云々するもの丶中、煩悶者をして唯煩悶者たらしめよといへるあり、訝しき事どもなり、それにも一應の理なきにはあらず、煩悶すればとて、頭脳秀れたるものは所謂る絶後に甦る底の大悟あるもの、十の十皆がらが死ぬるものにあらず、能く〳〵鈍根のものが刄物調べ繩改めに掛るべきも、さればとていざ壇の浦、死ぬるとなれば何とはなしに逡巡するが普通、されば僅に一二が實際死ぬる丈のこと、案ずるより攄るが易しと見越しての上なるべきも、其處が再應には首肯れぬところ、十の三は大悟の眼を開き、十の一が繩刄物の厄介になるとせば、殘る六は如何に落ち行くぞ、考へものにも非るべし、今日世の同情を失はれたる、切り取り强盜、掏兒、追剝、詐欺師と數ある群の中に、曾ては一掬の涙、秋の永夜の衾の袖をそぼち明したるものはなきか、想ふて玆に至れば百斛の冷水を背に浴せらる丶惡冷もすべく、さるを在るがまゝに捨て置けとは餘りに淺見陋識、且つ又殘忍酷薄なるが上に群羊を驅つて豺狼と化し、我等が生命財產をも危うせしめんとするもの、自衞の上よりしても決して聽くべからざる說なりと信ず。

さらば之を救ふの道如何、繰り返しては言はずもがな、人生問題の正しき解決之なり、之を避け遠廻りする如きは斷じて不可なり、言ひ換ふれば積極的救治策なるべくして消極的救治策ならざるべきことなり、此頃、平素能く天下の憂に先つて憂ふる新公論誌が現代の缺陷に見るところあり、何卒慈悲の大法輪を轉じて苦の衆生を救はんものと「煩悶救治策」なる題目の下にあらゆる耆宿龍象達の高見を集められたるが、さてこそは日頃此道に生ひ立ち、此道に長けたる人々の廣長舌、我所謂積極的救治策を遺憾なく示されたるならんと多大の希望を以て繙きたるに、何かの譯かそれは知らねど、豫期は全く外れて孰れも孰れ、中には娓々數千言憂時の悃誠感佩に堪えぬもあれど、皆厭世的文字を封じ、厭世的演說を戒め、瞑想の餘裕なき樣心身を勞せしむべし、體力を强健にして多感に陷るを防ぐ

べしといふ樣なる消極的救治策なりしには物足らぬ心地しぬ。

物足らぬ心地すといふことゝ不用なりといふことゝは事違へり、予は諸大家が折角示敎せられたる此等の考を全然不用なりするものにはあらざるも、譬はゞ道に爆藥を捨て置きて行く人毎に一々右せよ左せよと世話燒き居らば、如何なる手ぬかり、如何なることの機にてそれを踏むものなしとは限らず、それよりも早く爆藥を取り除くるが增しなる樣に、矢張り積極的救治策を取つて、合點の行くべき人生觀を示す方可なるべく、之ならば地獄の門と梁山伯の門とを一所に鎖したるものにて、死にたくも死ねず、暴れたくも暴れ得ざる道理となるなり、されば予は予か敬愛する諸大家に向ひて此方面に更に一層の力を盡されんことを望むものなり。



社會的文士を評す

夢蝶閑人

○炎熱燬くが如し、堪ゆべからず、偶々人の叺て飯を食ふ貸本屋來る。講談物、探偵物、鏡花、風葉、天外、弦齋物等燦然として目を奪ふ。然かも余は是等の小說を棄てゝ、獨り小說にては島崎藤村の破戒、雜書にては內田魯庵の社會百面相、伊藤銀月の最新東京繁昌記其他二三の雜書を借りぬ。蓋しぺちや〱した、油濃き小說よりも斯くの如きは最も夏日に適して銷夏の料と爲るが故のみ。

○余は社會百面相其の他三四の册子に依りて、聊か文

學者の社會觀を知るを得たり、之を機會として今日文壇の一隅に行はるゝ社會的作物に對する所感を掲げて世人に問ふも妙なるべし。

○坐右に參考書類を缺くるを以て一々精確なる例證を擧ぐる能はずと雖も、社會の文字が世に稱へらるゝに至りしは明治二十五六年以來の事と記臆す、最も民權論の勃興せる明治十五六年の頃、社會平權論などの飜譯あり、當時すでに社會の文字が、新聞紙の上にも現はれたれど、そは粗雜なる政論家の間に稱へられたるのみにして、未だ充分に文學者の頭腦に入らず。其の後國民之友及六合雜誌等に於て、金井延、酒井雄三郎氏等は、社會問題を提供せりと雖も、僅に歐米の社會事情を紹介せるのみにて、同じく世間には何等の反響なかりしやに覺ゆ。而して政治及經濟學者の間に行はれたるのみにして、文學者には坪内逍遙、長谷川四迷山田美妙、尾崎紅葉、幸田露伴の徒起りたれども、社會てふ文字に對しては未だ多くの注意を拂はれざりしなり。

○尾崎紅葉、幸田露伴、山田美妙等を先達として文士四方に起るや、ユーゴー、ゾラ、トルストイの名、批評家の間に拈出せらるゝと同時に、社會的傾向を帶べりと稱せらるゝ某々の文士出づ、即ち神の如くにユーゴーを崇拜せる原抱一庵と、西鶴の文反古胸算用に讚賞せる松原二十三階堂の二人と爲す

○原抱一庵の闇中政治家、松原二十三階堂の長者鑑、今日より見れば、殆んど言ふに足らざれども一は「社會の罪」を描ける森田思軒に師事せるを以て、其の作闇中政治家は、思軒流の筆致に、ユーゴーの面影を示し、之は西鶴流の經濟觀を振舞はして、畸形の戀愛談を綴れり、當時の渠等は一定の社會觀を有せるや否やは、疑はしと雖も、兎に角も當時は其の作物を以て社會的傾向を帶べる者とせられき。

○二十六年に入るや、日本新聞に櫻田大我の貧民窟の探險記事出て、大に世の視線を惹けり。是れ不景氣に影響せるものなるは言ふ迄もなけれど、恰かも英國にはゼネラルブースの『最闇黑の英國』が讀書社會に持て囃されたるも幾分か影響ありしと覺ゆ。

○斯くて社會てふ文學は、徐々として文壇に入り來りしが、日清戰役後

文學の勃興と共に、一方には毎日新聞、國民新聞、時事新報等に、貧民勞働者の記事頻出すると共に、小說界にも『社會小說』といふ名稱起り、文學社會に社會てふ文學が特種の意味を作すに至れり。當時頭角を出せる廣津柳浪、樋口一葉の小說に、おのづから其の傾向あり。

○社會問題の勃興も、日清戰役後の產物なれども、幷は暫らく措き、當時文學社會に深刻或は悲慘の名の下に、社會の實生活を描きたる(或は描かんとせる)は、文壇に記臆ある者の何人も認識する所なるべし。故に當時文壇の勢力たりし、早稻田文学の如きは、其の彙報に社會記事を集め、太陽の如きも、社會の一欄を設けたり。

○特に新聞紙に大小の別滅し、政治以外の記事を以て讀者の嗜好を求めたる以來、社會記事は新聞紙の一大要素とは爲りぬ、今日報知新聞、萬朝報、中央新聞等が發行數多きは警拔にして趣味多き社會記事に依る者のみ。中央新聞の水田南陽、萬朝報の松居松葉、物故せし二六新報の野田正太郎の如きて出色の見あり。

○新聞紙の記事は事實の報道にして文學の中に加ふるは、或は餘りに誤然たるが如しと雖も、其の記事が小說家及社會觀察者を裨益せるは爭ふべからざる事實なれは、新聞紙の社會記者を以て社會觀察者の列に加ふるは、思ふに大なる過誤に陷ざるべし。以上は博ろき意味に於ける社會的文學に拘はる過去の變遷と爲す、顧みて著書及雜誌の上に散見する社會的文章を見るに、全體に於て光彩あり進步あり、また若干の失望もあり。

○余は破戒、百面相等を讀みて、文學者諸君の社會觀を知るを得たり、特に藤村子の破戒は幾多の趣味を以て迎へたり、同書が純文學の上に幾何の價値あるやは余輩局外漢の知る所にあらざれども、新平民てふ特種の階級に無限の同情を注いで一篇の小說を作せるは余の甚だ敬服する所。否、材を新平民に撰べるは曾て德田秋聲も之に指を染め、必らずしも藤村子を以て先鞭者とは爲さじと雖も、子は新平民に對して特種の趣味と研究とを加へたるは多とすべし。

○加之、子は新平民の研究者なると同時に極めて敏妙なる「田舍」の研究者なるを示せり、新平民研究者たるよりも、田舍の研究に於て寧ろ成功する者の如し。蓋し在來の小說家にして土地を田舍に取れるもの甚だ多しと雖も、藤村子の如き特種の眼を以て——社會學者の燃犀と詩人の同情とを以て細緻なる筆を揮へるは藤村子

に有りて他の小説家に有らざる所なり。

○唯、社會觀察者として予の缺點を言へば餘りに詩人的なるにあり、特に新平民の描寫に於て、此の憾多し。余の友に二三の新平民研究者あり、皆破戒中の事實が誇大に失せるを認めり、（併しながら斯くの如きは小説として價値の存するものならんも知るべからず、唯余は余の立場よりして此の言を爲す者のみ）

○翻つて内田魯庵氏の百面相を見るに、氏は批評壇の先輩たり其の社會觀察も事實の眞を得るよりも或傾向を提いて之に批評を試むる者多し、「人道の道德のといふが頭巾を取れば皆鼻の下の建立殿(こんりつでん)だ、慈善事業だなんて生意氣を吐かすと癪に障るが、明らさまに儲け仕事と切り出すなら隨分相談に乘らないもんでもない」、是れ勞働問題提供者を描ける一節と爲す、氏の觀察やちよいと這んな風なり。

○社會百面相を見るに、學生あり、官吏あり、新聞記者あり、敎師あり、精神家あり、變哲學者あり、新學士あり、新高等官あり、勞働問題あり、時代精神あり有らゆる種類に渡りて縱横の筆力と批評とを加へつゝあり、其の注意と趣味の該博は、社會觀察者中氏に匹する者なしと雖も、悉く正鵠を得て謬らざるやと言へば異議を稱ふる者もあるべし。

○爰に別種の社會觀察者あり、最新東京繁昌記の記者たる伊藤銀月是なり、渠は詩的東京に市に隱るゝ大隱と題して、左の如き文字を作れり、

永貴宿無し、犬に尾して山伏町を漫歩し、又カンテラの油煙に鼻の穴を黑ふして、佐竹が原の昏夜を徘徊し見よ、我樂多道具屋の店頭土瓶の蓋、鍋の弦等と雜居し、現在の社會に名を忘られたる、若くは最初より名を記臆されざる作家の詩文及小説を見ることあるべし、價を問へば、曰く一貫十何錢、又其の間より生々しき無落款の畫幅貧乏大黒の彫刻物等、一枚三錢、一個五錢のやくざ物を見出だすに相違なし、然かも冷淡に看過し去ることなく、之に忠實たる鑑賞を與へなば、無慘にも脆ろき天才の痕跡が、消へんとして纔かに一縷を其の上に止めつつあるを認め得べし。

○銀月子は、近時頻りに歴史的著述を出だす、亦小説にも色氣あるが如し。才子往々として可ならざるはなしと雖も、余の見る所を以てすれば、歴史家としては餘りに獨斷に過ぎ、小説家としては、空想に乞しきの憾あり、渠は世間と人間との觀察者にして、社會觀察

者としては絶妙の手腕あり。蓋し氏の傑作は。人情的日本史にもあらず、「大魚に呑まれし人」にもあらず、最新東京繁昌記上下二巻、最も出色と爲す。

○以上は著書の上に見えたる社會觀察者を擧げたるもの更に雜書に散見する社會記者……社會觀察者を見るに、下層社會の風俗を措く者最も多きが如し。

○而して余の最も不思議を覺ゆるは、社會てふ意味種々樣々なるとなり、單に貧民及勞働者の消息を示すを以て足れりとする者あり。或は各職業者の風俗習慣を描くを以てする者あり、表面を描く者あり、裡面を穿つ者あり、批評的なるあり、記實的なるあり、そこで或者は社會問題の材料と爲し、或者は第二の小說若くは風俗記事として其の中に若干の智識を供ふるを以て記事終れりと爲す。斯れは甲は新聞記者が政治を論議すると同じく經世的眼孔を以て筆を執り、乙は低級なる小說家と同じく少量の事實に想像と空想とを加へて、娛樂を與ふるを以て足れりと爲す。甚しきは事實を無視する者さへあり。

○同じく貧民或は勞働者の狀態を描ける中にも、亦た二樣の別あるが如し、曾て本誌に人力車夫の狀態を揭げたる岸上香橘の如き、新紀元社及光紙上に出づる諸人の如き、皆な社會問題の提供者なれども、曾て文藝倶樂部に貧民記事を出せる樋口二葉の如き、大學館より乞食、木賃宿の如き冊子を出せる原田東風、即ち此の中央公論に社會記事を揭げつゝある白眼子の如きは好んで筆を貧民に注ぐと雖も、式亭三馬が浮世風呂に筆を着けたると等しく、其の消息を明らかにするを以て足れるとするに似たり。

○とは言へ、樋口二葉と原田東風とは、相似るが如しと雖も亦其の間に多少の相違あり、二葉は專ら記實に力め、東風は感想を現はすを以て得意とする者の如し二葉は「觀」ありて「察」尠なく、東風は「察」多くして「觀」乏し。兩者おの〳〵長短あれども、二葉は老成にして、東風に鋭氣あり。

○新小說に太田宙花あり、樋口二葉と同じく記實に力むる者の如し。

○近頃新古文林に樂天坊と稱する人の社會記事を一讀す、極めて好文字海賀變哲の工場視察の如き、遙に遜色あり、余は樂天坊其の人が續々此の種の文字を出されんとを囑望す。



今様をかしき

今更かの子

恐ろしいものは三つ減り
承知仕るの地震
教師は卓子の下に隠れ
馬鹿者にも一德
小僧の晴雨計は押入にあり

地震を恐がらぬものはない、地震かみなり火事おやぢの筆頭、世が進歩して避雷柱といふものあり、お江戸の花といはれし毎夜の火事お事もなく濟むやうになり悴が中學を卒業すれば、おやぢも一目置く世の中、さりながら地震だけは何うもならぬ。いくら學術が進歩しても、これだけは避ける法もなく、その根源も確と知れず、地の底に大なる鯰あり、此魚の動くたびに地震ふと云ひ傳ふる昔話、それならば何も心配するに及ばない、其鯰を殺しッちまへば濟む事、即ち地に深い穴を掘りて、そこから毒藥を流し込めば、何の造作は要るものでなし、これ妙藥と我ながら感心した天保老人、御大層に此事を告げて歩くと、まだ〳〵智惠が淺い〳〵、毒に中てられて苦むが世界の破滅、鯰の死ぬ頃は七轉八倒地球は粉微塵になつて了ふといふ者あつて、まだ地震の根本的療法は見つからぬと云ふ事だ。

みり〳〵と動いて一分か二分間、氣味は惡いが、さしたることもないは地平動、恐ろしいのは上下動、ドシン〳〵と來てはぐら〳〵とする、これを或人が命名して承知仕るの地震だといつた、それては地平動は不承

知、成程左右へ振るのがイヤ／＼なら、竪に振るのは承知／＼、生娘は羞かんで承知でも首だけはイヤ／＼の除外例であるが、概して上下動物の首の動かし方は承知仕ると見てよろしと、所謂を聞けば誠にはや國家安康息災延命である。

茲に生れは名古屋もの、なにがしの中學に物理化學の教師を勤める男、授業の最中にびり／＼とばかり微かな不承知動、校舍古びたれば二階は殊更に動くと見えたが、先生大の地震嫌ひ、あッと叫んだが其儘立ち消え、姿は煙のやうに隠れて了つた、先生の悲鳴に生徒も一時總立ちに騷いだもの丶、未だ授業中の時間、席に復して待てど暮らせど教師来らず、氣轉の利いた一人教員室にお迎ひに行つたが、そこにも居らぬといふ、さて校中の大騷ぎ、教師一人が雲がくれ、迷子の先生やあ、迷子の先生やあと、便所から化學室、探し廻れど遂に知れず、大方どうかして皈宅したものとそれなりけりに學校も退けたが、何がさて先生は、地震の時には何か支へのある物を楯にせよとの訓言を守り、アッと叫ぶと早業師、前に控へた卓子の下へもぐり込みの、息を殺して縮かんで居たので、卓子には卓子かけがあり、後には椅子があり、探せども見えぬ筈、そのうちに生徒は先生の雲がくれと騷ぎ出す、自分ながら周章て方の耻しく、今更のこ／＼と出られぬばつ、とう／＼學校の退けた後、四邊を見廻し狐鼠／＼と這出て丶家へ皈つた、その翌日は病氣と稱して、缺席屆が校長の机の上。

それは賢い人の馬鹿な眞似、これは馬鹿者の一德、砲兵工廠に年久しく勤める男、どこやらに一本足らぬ生れつきながら、何うしたものか地震の前兆を知つて居る、明日は屹度ありますといへば、ついぞ外づれた例なし、何故にといへば、あの星が地震星ですと天を指す、中々他人には其星が變つた光りを發するとも思はれぬ、近所の人もこればかりは馬鹿にはならぬとて、此噂かくれもない、馬鹿なものは神に近しとやら、自然の感得は恐ろしいもの、これは水筋、こ丶には水は出ぬと、土の色を見ていふに、これもついぞ外づれた

事のない井戸掘男、同じく少し足らぬ處あつて、阿房の三公とて上方者である。

此話を聞いた商家の小僧、己等だつて雨の降る前兆を知つてるといふ、そんなら當てゝ見ろ、明日は降るか降らぬか、さあどうだ。小僧は早速自分の部屋に駈け込んだが、直ぐに出て來て降りますといふ、果して翌日はしと／＼雨、これに皆々不思議をうち、其後天氣を此小僧に聞くに當らぬと云ふことがない、これには何か仔細があらうと、或時番頭例の如く天候を伺はせると、小僧は部屋へ駈けて入る、そつと後からつけて行つて覗くとは神ならぬ小僧、押入から何か汚い布を取り出して頻りに首を傾げて考へて居る、番頭飛び込んで引つ捕へ、よく／＼見れで豈圖らん、これは小僧の仕汚ごした一筋の越中、さても飛んだ晴雨計だと大笑ひ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

衣紋棹を背負つて歩き
女の湯もじ首に巻き
その赤いのに迷い込み
雪に轉ろんで戀となり
頭巾をとれば戀がさめ

朝は八時に家を出る、さる保險會社員、今朝は少し寢坊して、狼狽てゝ出るも勤の身の辛さ、まだ女房が持たぬ三十男の、よろづに身仕舞の好い、いつも折目のついた三ッ紋の羽織、男やもめには珍らしいと、到る處でほめられるに、此朝ばかりは道すがら、すれ違ふ人毎に、女も笑へば男も可笑がり、さても怒り肩の人もあるものだといへば、羽織の裃はこれが流行り初めと囁ゝ、はて面妖なと思ひながら、何の氣も着かず、會社の用事で社長の家に立寄り、座敷に通つて待つ程に、茶を運ぶ女も口に袖して、次の室へ出て忍び笑ひ、次に煙草盆運ぶ女も、堪へ切れず、次の室では女ども腹を抱へてキヤツキヤと笑ふ、何共一圓合點行かず、眉をひそめて茶を吞む處に、にこ／＼と主人までも笑ひ顏で入つて來る、まだ挨拶もせぬ内に

「君、その肩はどうしたのか」

と問はれて覺えず手をやれば、何だか堅い棒が兩の肩、はッと思つて拔き出せば、これは何うぢや衣紋棹、我ながら可笑しいやら赤面の至り、これを背負つて歩いて來たかと、冷汗は脇の下を流るゝ計り。狼狽へ方にも程があると思へば、妻君の赤い下紐を襟巻と心得、頭に被つて濟まして歩いた男もありと云ふ。我友に白矢といふが、

『それは定めし危險がなかつたてあらう、そも〳〵若い女が赤い褌をするといつば、これ危險物が此處にある、用心してみだりに近付くなとの看板、電車の旗振りを見給へ、赤い旗を振るときは電車も進行を止める、滊車でも赤い旗の出たときは、停車場ならぬ處にても止まらざるを得ぬ、赤い色は危險の合圖、若い女も割れ易いものを包むに赤いものを以つてする所以、誰教へるといふこともなく、天理自然の致すところ、されば其男、妻君の赤い褌を被つて歩いたは、さて〳〵感心なものだ』

と、後先わからぬことを云ふ。併しながら此白矢といふは、中々の危險性、此程の雪の日に、ぶら〳〵と物數寄の一人歩き、折柄來かゝる若い女、蛇の目の傘を斜に、お高祖頭巾、高下駄、蹴出しちらほらと艶かしい、その赤いのに迷ひ込み、思はず後をつけて行くと、處は青山墓地のだら〳〵坂、か弱いは女の足、雪の中へコロ〳〵と轉ぶが最後、なか〳〵に起き上ることも出來ず、その邊り赤いのや白いのや、見るに見兼ねて抱き起し、人目なきを僥倖、雪を拂うて下駄を直しやれば、女限りなく喜びの禮も言ひ盡し、素振りで言を云ふ此場の仕儀、ついに誠の戀となり、打連れて料理屋の二階、麥飯で鯛々釣る不心得の白矢、生憎女悦丸は持合はさず、酒と肴を云ひ付ける、風邪を引きまして失禮します、御免下さいよと頭巾のまゝ、僕も寒いから襟巻のまゝ、さしつ、さゝれつ、陶然として、女もほんのりと、僅かに見ゆる面ざし、紅をさし、どうもいはれず、抱きついて無理往生、頭巾を解けば是は何うぢや、髮づらに大きな剝げ藥鑵、耳から首へ一面

の、赤々と燒斑、流石の白矢も此處に至つて呆然たり、二兩二分の料理屋の拂ひ、併し損はこれだけで濟んだ、

* * * * * *

今時信州の山越へ
何とも知れぬ血みどろの死骸
放さうか放すまいか
親方の惡い洒落
　手にかけたものに咎はない

『それや面白からう、話したまへ』

『夜も長うございますし、ほんとに貴郎お話しなさいな、嘸まあ、面白い事がおあんなすつたでせうね』

『へヽヽヽ、別に面白いといふ事もございやせんがね、實は妙な話があるんです、けれども何だか嘘でも語るやうでね、あんまり不思議なもんでがすから、てんで眞實とは思ひなさるまい』

『それはもう、かつがれるのは知つて居るが、又かつがれて見たいのさ』

『それだから可けません、私がいつもかつぐもんだから、旦那が又かと……今夜のは眞實なのですから、それて眞實でありながら、矢張り嘘らしい武者修行にてもありさうな話ですから、全くは、嘘だと思つて聞かれると辛いのですよ』

『いや、さういふことなら本氣で聞かう』

『何の嘘と思ふもんですか』

『それぢや話しやせう』と煙管をぽんと打き、

『その信州の山越への時でがす、日は暮れて來る、次第に山深くは入る、流石の私も初めて物恐ろしい氣がしやしたね、もし狼にでも喰はれたらと、女房や子供の泣顏が目に見えるでがす、是ではならねえと氣をとり直して、又山深く分け入りやした、すると向ふに火が見えやす、有り難えと喜んで、それを便りに辿り着くと一軒の藁小屋、さし覗くと爺さんと婆さんで、圍爐裡にさし向ひて榾をくべて居ます、聲をかけて、私はかう〳〵した大工でございますが、一晩泊めて貰いたいと申しやすと、ならぬと爺がいひます、そこん處

を一晩だけと漸とのことで承知さして、私も圍爐裡の傍へ坐り、麥飯や芋の御馳走になりやした、いや話をして見ると親切な年寄で次の室へ床を敷いて早く寢ろ疲れて居るだんべいつて貰れます、御免蒙つて先に床へ入りやしたが、一寸うと／＼とした計して目がさえて寢れやせん、圍爐裡ではまだ起きて居る樣子、耳を澄ますと、驚きやした、爺の聲として、例の奴を早く片付けて仕舞う、もう眠つたらうと云ひます、さア大變、よく／＼因果な處へ泊り合はしたと男泣き、逃げる法はないかと考へたが、家は一方口で何とも仕方がない、併しゅう一寸もぢッとして居る譯に行かぬ、何ても逃げ出すに手はねえと、小便に起きた風で表の戸をあけやうとすると、旅のお方、小便は内にあるといふ、小便して、仕方なしに床へ入つて又一思案しやうと思ふと、寢られなけれや此方へ來て話せといふ、圍爐裡の傍へ行くと、お前樣、今話して居た事聞いたらう、聞いたら仕方無えから話すが、實は昨夕お前樣と同じやうな旅の人を泊めた處が、昨夜のうちに死んで了つた、誠に迷惑、そんでお前樣を泊めるのも斷つたのだ、そんで其死骸をこれから裏の崖に捨てに行くので、片付けて仕舞うといつたのはその事、お前樣は何か山賊の家へでも泊つたやうに思つて、小便に行く風で逃げる積りであつたろ、と爺の顏はにやりとしたが、誠に山賊の樣な顏に見えやした、心配することはねえ、お前樣をどうしやうと云やしねえ、併し死骸を捨てに行くに、お前樣も手傳つて呉れ、といつて婆さんと二人て納戸から引出すのを見ると、蓆に包んだ血みどろの死骸、私や、一目見て膽を潰し、殺したものに違ひないと思ひやした、はていよ／＼山賊だなと勘付いたが、顏にも出さず、いふがまゝに篝火を持つて出やした、恐ろしいの何んので……』

『まあねえ』と妻君は氣味惡るさう

『崖といふのは切つて落したやうな處、何千丈とも下は知れぬ谷になつて、折節朧夜であつたが、崖の下は眞暗、こゝへ落として仕舞へば知れつこはねえ、さアといつて爺さん、擔いて來た死骸を突き落した、處が

奥さん、生憎崖の二三間下に二股になつた木が生えて居たのに、その死骸が引つかゝつたと思ひなせえ、落さうにも手も足も屆きやしねえ、爺さんも婆さんも青くなつた、私がそのとき考へ付いて、それを落すのはわけはねえ、爺さんお前の腰に紐をつけて、その紐を私と婆さんとて引張つて居る、お前はその紐を便りにあの木まで下りて落して來れば可い、といふと、爺さん大喜び、早速その通りにして、私と婆さんは崖の上で引張つて居る、爺さんは腹ん這ひになつて下りて行く』、

と此時大工は話を止めて

『餘りほんとうらしくねえから、これから先が面白いんだけれど、もう止しやしやう』

と煙管を筒に入れて腰にさし、早や皈り仕度。

『何に噓だと思ふものか、本氣で聞いて居るに、それからどうした』と主人は急き込む、

『それからどうしました、折角まあ話しかけて、途中で止しちや何んにもなりやしないわ、面白い話だのに、さあ、お話しなさいよ』と妻君むきになる、

『それぢや、話しますがね、放すと爺さんは谷底へおつこちますよ』

『えッ』と妻君、

大工はあはゝと笑つて居る。

『それや、又かつがれた』と主人も笑ふ。

『私しや又、すつかり』と妻君は胸を撫で下ろす。

此後此大工非業の死を遂げた、弟子の若いのを集めてお笑ひ草に、あすこの新墓へ行つて一人で茶碗を持つて來たものに一兩やるといふ、而もその新墓、つい四五日前、毒殺された隣の慾婆、誰とて顏見合はして行くものもない、時に新七とて江戸ッ子氣象、親方一兩たしかですな、と、言ひなり表へかけ出して、家へ皈つて鉞を一丁腰にさし、新墓さして急ぎ行く、親方は惡い洒落、先へ廻つて墓標の裏、新七の來るや否、わアーと黄色い聲をして、茶碗とる手を確と握る。此慾婆と腰のまさかり、滅多切に親方ともしらず、手にかけた新七に咎はない、死に損は親方ばかり、一家のなげき、世の物笑ひになつた。（完）

新刊批評

◆東海遊子吟

土井晩翠著
大日本圖書株式會社發行

明治三十四年から仝三十七年に至る前後四年間即ち著者が歐洲漫遊中に作た新體詩を寄せ集めたものである。中には「司馬子長名山藏書歎」とか、又は「愁」「深夜」とかいふ直接漫遊に關係のなきものもあるが、初めの方に「亞細亞大陸回顧の歌」を置き、終りに「歐羅巴大陸回顧の歌」を置いた處を見ても、先づ漫遊中の吟詠を順序正しく一册に輯めたものというてもよからう。配列は素より選ぶが、多少バイロンの「チヤイルド、ハロルド」的臭味ありと思ふ。吾輩は正直にいふ、吾輩は晩翠氏の詩に隨喜渇仰するものではない。氏の詩を讀んで少しも疵がなく、腹の底から感嘆の聲を絕ち能はずといふやうなのは只の一つもない。或は言葉が六つかし過ぎ、或は句調が餘りごち〳〵し、或は文字妥當ならず、或は感情明瞭ならず、何處にか慊らず思はるゝ點が必ずある。これは著者に今少し推敲あらんことを願いたいものと思ふ「チヤイルド、ハロールド」にある「マイ、ネーテブ、ランド、グード、ナイト」の歌、又は「ウオートルロー」の詩、又は「希臘」の懐古、又は「太洋の歌」等に比すべき名吟は一つもないと思ふ。然しながら吾輩は近來の新體詩集の中では比較的此書に興味を感ずるものである。今日盛んに出版せらる所謂新體詩集の多くは吾輩にはよくわからない。文字の苦心、格調の苦心、成程それも大切のことで、其點に於ては今の新體詩は成効せるものといふて宜しいけれども詩の第一義たる美感、又は詩情を讀者の胸中に湧かしむることが出來なければ詩として、何の尊ぶべき處があるか、詩情を起さしめず美感を起し能はざるも、尙且つ文字を詮義し、格調に專念せざるべからずとすれば、夫れは全く文字の遊戲である。これを詩壇から驅逐して宜しく骨董、茶湯、生花をいぢくる連中と一所にすべきものと思ふ。晩翠氏の詩には幾多の缺點もあるが兎に角遊戲三昧の詩ではない。詩らしき詩である。これを讀めば必らず一種の詩情を起さしむる。暫らく紛々たる俗事より心を轉じていさゝか詩神の恩寵に與り得るやうな氣がする。此點に於て吾輩は此書を今の讀詩界に薦めたいと思ふ。吾輩の讀んだ限りに於ていへば吾輩は藤村氏の新體詩を一番面白く讀んだ。其作何れも皆胸に應ふる處があつた。泣菫氏の「暮笛集」「行く春」なども面白いと思ふた。けれども其「二十五絃」「白羊宮」等に至ては遂に感興を起すとが出來なかつた。有明氏の詩は三つ四つ讀んでわからなかつたから其後手にした事がない泡鳴氏のゝは未製品と思ふ。臥城氏のゝは世間で左程に評判せぬがなか〳〵面白い。殊に本號の「天日槍」など佳作と思ふ。柳村氏の譯詩はよくわからぬ無絃氏の譯詩はつまらぬが實をいふと今の詩壇には吾輩の意に滿つるやうな作物がないので、一刻も早く新詩人の出現して一代の人心に聲を與へ、響を返すやうなものを歌うて呉れればよいと思うて居る。晩翠氏の作についていへば其處女作「天地有情」は最も面白く讀んだ、冥想的抒情詩ともいふべき詩風は吾輩の幼な心を動かす事餘

極深かつた、第二の作「曉鐘」も亦受讃はしなかつたが可なり面白く讀んだ、氏が冥想的抒情詩人より轉じて漸く國民詩人たらんとする徵候は殆もよく「曉鐘」にあらはれた。今此「東海遊子吟」を見れば先きの二つの詩集の特徵が十分〲にあらはれて遂に其の孰れに歸すべきかを疑はしむる。一方には「亞細亞の運命」「極東の將來」「白人の跋扈」等に對する感懷が歌うてあると共に、一方には「永劫」「無窮」「寥」「死」等に對する冥想も窺はれる。又晩翠氏が最も露骨に直情を歌ふ人であることは詩篇の處々に一身上のこと、自分の友人のこと、又は自分の骨肉のこと、換言すれば詩を讀む他人には餘りわかりさうもないことを無遠慮に中に挿んであることを以てもわかる。是等は果して褒むべきことであるや否やは疑問であるが、氏の飾らざる感情を歌ふことを多とすると共に將來未だ〲伸びて行く勢の潜んで居る印であらうと喜ばしく感ずる。吾覽が卷中の白眉と感ずるのは「司馬子長名山藏書歌」であつて之を讀めば雄渾壯大の詩情油然として起る。此詩だけは完璧を以て許してもよいかと思ふ。次には「センヌ江上の別離」が面白いと思ふ。

雲亂れ散り亂れ飛び
水流れ去り流れ來る
離合か集散か世の姿
よし葉は黃ばみ落ちぬとも
同じ一樹の蔭にして
こゝに葡萄の香の高き

セイヌの秋の水おもに
蛙ぶる影のたゞしばし
ゆふべ今はた色染むる

シャンゼリゼイの空のあなた
凱旋門の影暮くれて
見よ鐵橋の四つの隅
石柱高き金馬の姿
燦爛の光落つる日を
返して高き雄々しさや

の如き晩翠一流の詩情である。「亞細亞大陸回顧の歌」と「歐羅巴大陸回顧の歌」は共に可なりの長篇であつて、著者の最も力を入れし處なるべく、隨て拾へば字句に面白き處も多いが全體から見ては少しく散漫に失し、詩格の弛緩したる箇處も少からざるやうに思ふ。「松島」などもわるくはないが今少し力が入れて欲しかつたと思ふ。又中には一向につまらなく、なくもがなと思はるゝものも少くはない。調は多く七五であるが漢語が澤山に交へて一般に勁拔である。殊に處々に八六、七七、八七等を交へて單調を破らんと試みたものがあるが、其爲めにリズムに合はなくなつたものも少からぬやうに見受ける。例へば「歐羅巴大陸回顧の歌」の一節の如きは將さに破調に流れんとしたやうに思ふ。

詩情は酌みて盡きせざる（七七）
南歐の岸、藍の水　（七七）

海燕時に影を照して（七七）
孤舟に歌ふ少女の聲に（七七）
風もしづまる一灣の夕（七八）
次第に波の暮れかゝる（七五）
沖にはるかにイスキアの島（七七）
詩人の戀のおもかげを（七五）
殘す姿のいともいみじく（七七）
天地萬象こゝに靜かに（七七）
夢は星光にたどりよぢて（八六）
高く雲漢の上にのぼりし（八七）
それはた過ぎしたゞの一日(ひとひ)か（七七）
月か歳か千歳も（六五）
永遠の前にたゞ一瞬（八六）

且つ同じ七七といふも其七が或は三四或は四三或は五二等一向定まりがない。句調の上からは今少し苦心ありたきことゝ思ふ。要するに此篇は決して吾輩の理想の詩集てはないが、今の詩壇にあつては稍々詩らしき詩てあると思ふので、長く謎のやうな詩に苦しめられた讀者は一本を買てもよからうと思ふ。不折の畫一寸面白きものあり。（定價一圓）（樗生）

▲俳諧三十六歌僊　夜半亭蕪村書畫　金尾文淵堂發行

蕪村が其角、嵐雪以下谷雛、素堂等俳壇に於ける三十六名家の肖像及び各家の名吟一句づゝを書いたのを木版にしたものてある。世には蕪村の俳句を能く知て居る人は多いが蕪村の繪畫を知て居る人は甚だ少い。蓋し蕪村は大雅と共に文人畫の開拓者てあつて又其巨擘てある。殊に此三十六歌仙の如きは運筆簡勁にして奇抜、一見すれば兒戲の如きも熟視すれば興趣津々として汲めども盡きず、所謂俳畫の上乘なるものてある。吾輩は此珍畫を凸版に附して、弘く世人の渴望を癒した文淵堂主人の功勞を多とするものてある。（定價一圓）（樗生）

▲行脚俳人芭蕉　獺祭書屋主人稿　金尾文淵堂發行

故子規はなかなか文字を甘く書いた。今日ホトトギス派の人の手蹟が一般によいのも、幾分は子規の感化によることだらうと思ふ。此書は子規の原稿其儘を凸版にして且つこれに子規の手の形を押して其れに歌を題したもの、及び碧梧桐氏の手紙（碧梧桐氏の文字は子規よりも一層面白い）の凸版を添へたるものてある。非常に趣味のあるものだ。俳句に志のある人は素より座右に一本を備ふべし。然らざる人も持て居て決して損のないものてある。吾輩などは性來非常の惡筆家てあるが、これを見てから頻りに文字を甘く書きたいなどゝいふ野心が起る。時々之を手本にして習ふかなどゝいふ考を起すこともある位だ。これも前の三十六歌仙と等しく定價一圓てあるが、決して高くない本てある。（樗生）

▲花守日記　横瀨夜雨著　本郷書院發行

卷頭の二小篇「落日」「石」を讀んだ時は吾輩は失望した。夜雨といへば文庫其他の青年雑誌で十年近くも名を賣た人だ。左樣に久しく文壇に立て居た人の作としては慊らぬ點が非常に多くある。實をいふと、夫れより

先へは讀んで行く勇氣がないので其儘に本を下に置かうとした。然し此書を「花守日記」といふのは卷尾の長篇の名から取たのであるから、其れは少しく面白いかも知れぬと思ひ返して、「花守日記」を讀んで見た。處がなかく面白い。自然に對するやさしき情、人間に對する温かき思遣々に閃發し、時には輕妙なる筆づかひなども交りて捨て難き趣味あり卷頭の二篇を讀める時とは大に違た感を起した。靑年にして文を學ばんとする人には參考となること少からざるべしと思ふ。(定價七十錢)

▲闇黑日本史

伊藤銀月著
隆文館發行

本書は「評論的足利十五代史」又は單に「足利史」と題しても差支ないのであるが、奇を好み、新を喜ぶ銀月氏、そんな平凡な名は面白からずといふので「闇黑日本史」と附けられたのであらふ。其自序に曰く「足利史を研究して最も興味多きは義政の時代にして第二は義滿の時代、尊氏の時代は寧ろ第三に屬す。大馬鹿共が集りて天下を玩弄したる時代程面白きは無し。而して足利史の極めて異色なる所以は、政治的方面よりも寧ろ經濟的方面に在る也。乞食と泥棒との經濟を解したる上にて、初めて足利時代の經濟を解すべく、足利時代の經濟を解したる上にて、初めて足利時代の人情を解すべし、而して足利時代の人情を解して庶に徹せずんば凡ての歷史の神髓を得ること能はざる也」と。本書の內容は大抵之によつて察せらるべく、著者の目的の那邊にあるかも大凡之によつて明かであらうと思ふ。歷史家先生をして批評せしめたならば、或は其論斷の大膽に驚き、其は其材料の貧少なるかを罵るかも知れぬ。然しながら、銀月氏一流の史眼を以て足利時代を解釋し、銀月氏一流の才筆を以て足利時代を評論したものとして見ればなかくに捨て難い長所美點がある。其尊氏論、正成論又は足利時代の家庭觀等何れも趣味多き文字である。纖弱にして陰鬱なる文章思想に膽玉を喰はれつゝある靑年などは宜しくこの快活にして且つ雄壯なる書物を讀んで、男子的志氣を盛ならしむべきだと思ふ。(定價六十錢)(樗生)

▲基督敎評論

山路愛山著
警醒社書店發行

現在及び將來に於ける二大問題はと問はゞ僕は言下に社會主義及び基督敎であらうと答へる。愛山氏が常に專ら此二問題に向て研究評論をして居らるゝのは明かに時勢の要求を解し、時代の眞相を看破したものといふべきである。此書は先月の本誌に於て紹介した「社會主義管見」に續いて刊行せられたもので、矢張り「獨立評論」に揭げられたのを集めたものである。收むる所「現代日本敎會史論」「耶蘇傳管見」の二篇、前者は百八十頁、後者は百頁の長論文である。「耶蘇傳」の方も著者一流の史眼、著者一流の叙述、隨分と面白いものであるが、僕は尙一層「現代日本敎會史論」の方が面白いと思ふ。時勢の變遷を經とし、安井息軒、中村正直、新島襄、福澤諭吉諸氏の人物評を緯として縱横に織り成したる大論文、題して「明治文明史論」というても差支ないと思ふ。殊に抽象的の議論ばかりでなく、よく事實を網羅し、引證を擧げて、何人でも如何にもと首肯せざるを得ぬ老實にして周到なる書き振り、世態に通じ人情に明かなる明判官の獄を斷ずるも斯くやと思はしむる。吾輩は熱心眞面目に此

書の熟讀を江湖に推奨するものである。(定價五十錢)(樗生)

▲純正社會主義の哲學　北輝次郎著兼發行

曩きに「國體論及び純正社會主義」と題する二千頁の尨然たる大著を公にして、其筋の忌諱に觸れ、發賣禁止の厄に逢はれた著者が、其第三編に當る「生物進化論と社會哲學」の趣意を書き改められたものである。彼の大著に比すれば三分の一にも足らぬ程のもの、著者の遺憾も多からうし讀者の不滿も亦少くない、此書一名「生物進化論より説明せる社會進化の理法及び理想」といふが、此方が内容に一層よく當て嵌るやうに思ふ。卷中生存競爭論あり、自由戀愛論あり、人口論あり、類神人論あり、奇抜なる觀察、面白き叙述處々に散見すれども概していへば文章垢抜けがせず、思想明晰を缺き、到底名著、好著を以て許す譯には行かぬ、聞く所によれば著者はまだ三十にもならぬ一青年との事、若し然りとせば、其勢力、才力實に驚くべきものである或は天才的面影ありといふも過褒でないかも知れぬ。然し若しかゝる著述を以て世の耳目を驚かした事で滿足し、又は自負して將來の修養を怠るやうな事があらば、只一早熟の才子としての外、人の記憶に止らぬかも知れぬ。吳れ〳〵も著者の奮勵を望みたいと思ふ。要するに此書は未製品である。此書より得る處は處々に散見する天才的直覺的の觀察と叙述とである。著者を評評せんとすれば著者將來の著述、又は少くとも「國體論及純正社會主義」を精讀した上でなければならぬ。然るに其「國體論及純正社會主義」の方は吾輩未だ精讀せぬ、又精讀しても其の細評を公にするのは今其時期であるまいかとも思ふ。依て只こゝには以上の紹介丈けに止め置く。(定價八十五錢)

▲青春雜筆　高須梅溪著　美世古書房發行

健筆十年、一枝の筆に奔放の想を洩らし來りし氏のことゝて、曩に出したる「學生坐右訓」、「我散文詩」等に收めたるもの丶外、餘すところの舊稿猶ほ二尺の高さを爲すとは左もあるべし。本書はそを集めたるもの菊版二百六十五頁の可なりの大冊子にて、青年の煩悶と現代の小説以下收むるところの評論、漫筆等五十二篇、「乙女の採」は見ざれば知らず、「坐右訓」は唯坐右訓のみ、「我が散文詩」こそは想ふに氏の自ら許すところなるべく、此篇の如きは不用意にして成れりといはんも知れず、されど力を勞せずして成し得るは即ち力の餘りあるによるとも見るべく、予は氏の文の長所は依然此方面ならずやと思ふ、淙々の流れ、絕えて亂石朽株の妨ぐるなき和諧の調、青年紙に臨んで筆端の窘束を憂へん時、之を取つて讀むこと暫くならば、必ず救はるゝところあるべし。(定價金七十錢)

▲原始佛教史　舟橋水哉著　文明堂藏版

阿含哲學、婆娑哲學、俱舍哲學の三期に分ちて原始佛教史を詳述せられしもの、著者が忠實なる研究の餘に成りしを疑はず、由來、俱舍、成實、法相、三論、天台、華嚴と幾多の教系を有する佛教哲學が、極めて尨雜なる經卷の外、古今に亘りて通觀し得る一部の哲學史を有せざるは研究者の常に不便を感ずるところ、著者も亦實に之に慨して筆を取れりといふ、吾人は其勞を多として斯ゝる著書を世に推薦するものなり。(定

價金五十五錢。

▲明暗　水野葉舟蓮田通治著　金曜社發行

此篇にて見るところによれば、葉舟氏は純主觀詩人にして、最もたわゝしきか弱き情緒の纏綿を寫すところに生命あるが如く、その情景即かず離れざる趣を傳ふるものに往々佳句の諷誦に値するあり

歡喜の鐘鳴る堂の朝臨に君と並びて野を遠く見そ

寂寞は我を包みてわれを引きて道なき森に深く入らしむ、

の如きそれなり、通治氏に至つては多く言ふを欲せず、主觀詩とは限らされど詞餘りて情及ばざるもの、趣は寫し了せても何等の美感起らざるもの之はと個々目を留めても心の辿りの不自然なるが見出さるなど尙ほ飽かぬ節多き心地す（定價金四十錢）

▲詳註二日物語　幸田露伴著沼田頼川註　東亞堂書房發行

今より殆んど十歳の昔、一たび文藝倶樂部に現はれてより、忽ち秋成をも凌ぎ、馬琴にも超えたりとの評を得し一雄篇、内容は已に世人の熟知するところなるべし、唯字來句纏、一々典據あり、中には難解者のあるべきを思ひ、此度評註を添へて單行本となしたるもの附錄に頼川氏のものせる西行法師略傳あり（定價金四十錢）

▲笑の國　巖谷小波著　博文館

輕妙洒落、筆の命毛に桃䑓の潜むが如く、年寄子供婦人とのみはいはず、顰蹙の滋面親爺にも、アハゝと罪の無き笑を催す權利あるもの、今の世我國に在つて誰か漣山人の向を張るものぞ、此處暫くの間は先づ々々氏の獨擅場なるべし、此著收むるところ短篇十二、狂言六、小說四、附錄に喜劇ふられ聟あり、徵兵檢査、借衣聟、馬盜人等、尤も御酒の宿替に奏効確實なるべく、此せち辛き世を、時には笑の國に遁るゝも可ならん（定價金六十錢）

▲予の半面　伊藤銀月著　弘道館發行

少壯鬱勃の意氣、一志凝りに凝つては宇宙も何の大ぞ、掌上に取つて果ては揉み潰しもなさんず勢、胸に此烈々の火氣を秘めて自らその苦みに堪えず、鼠花火とばかり隨處に熱を吐きて狂ひ廻れる足跡は、北秋田の故國より南臺灣の邊土に及ぶ、當年の奇、當年の放、一個の銀月狂生躍つて紙表に在り、筆路跌宕、文も亦その人に異ならず、坐り固めては柳州、東坡にも似るべきところを、胡坐に頽して傍若無人、三馬一九の冷えものでござい調、飽くまで不敵なるところが氏の擅場なるべく、江戸子の好くべききびくしたる文字なり（定價金七十五錢）

▲英雄觀　中野天心著　文明堂發兌

英雄の天樂、英雄の天職、英雄の識見等十四章に分ち獨自一己の英雄觀を公にせるもの、附錄として日露戰役從軍陣中日記抄錄を添ふ（定價金五十五錢）

紙數增加せし爲、寢覺草、青年の修養、人生の行路（續篇）、倶舍哲學、英文練習會の批評は次號に廻す

編輯だより

▲暑の中の暑さ位は讀者も記者もお互に我慢せざるべからざる儀と存じ候。今や朝夕は全く靜思の時、冥想の時、はた又讀書の時と相成りたるに候はずや。されば最早や世はお互の天地也と申しても差支なかるべしと信じ候。記者等は此好時期に於てます／＼熱心に職務に努め、讀者年來の御眷遇に酬えんことを期し居り候。

▲本誌は次號に於て「秋期大附錄號」を發行し、我丙午文壇をして陸離たる光彩を發揮せしめんことを努めつゝあり候。こは本誌卷頭に於ける豫告を一讀せられなば瞭然たることゝ存じ候。附錄に執筆の快諾を與へられたる六大家は悉く是れ現代の新思想、新趣味の代表者たることも亦記者等の吹聽を待たざる次第に候。近來はがき又は書簡を以て内容及び定價等を問合せらるゝ向も少からず候。定價は未だ詳しく分らず候も、倍號に候へば大凡そ二倍、即ち三十錢内外となるべく候。内容も深く秘してお氣を揉ましむるも餘り罪深き業と存じ候まゝ、左にいさゝかお洩らしいたすべく候。然しホンのいさゝかに候。

▲夏目漱石先生の小說は大凡そ四五十頁位の見當にて書かるゝ積りに候。夢幻的なるか、寫實的なるか、世話物的なるか、時代物的なるか、快濶なる作か、陰鬱なる作か、滑稽なる作か、悲哀なる作か、或は悉く此等の要素を包含したるものか、先生自身と雖も出來上つて見れば分らぬと申し居られ候。然し讀者諸君安心して可なり。こゝに一事の確かなること有之候。先生の靈感の動く處、何處に筆を染めらるゝも必らず先人未想到底の詩境に於て大傑作を得らるべきことに候。こは先生の從來の作物を通讀したるものゝ何人も認めざるを得ざる處に候。次號に公にせらるべき作物も其取材の何たるに拘らず、必らず我文壇の驚嘆を贏ち得べく候。少くとも記者は斯く信じて疑はず候、

▲島崎藤村先生の小說は長短未だ詳かならず候。先生は決して多作せらるゝ人にあらざるやうに見受け申候。況んや或一派の文士の如く濫作などは最も先生の忌み嫌はるゝ所なるべしと推せられ候。先生の作一篇出づる毎に必らず新生命、新主張の漲るが如きを感ぜしむるも大に理由あることゝ存じ候。深く思ひ、靜かに究め、先づ腹案を作り、豫め結構を立てゝ然る後春蠶の糸を吐くが如く經營苦心以て作を成さるゝにあらずやと思はれ候、兎に角次號に出づべき小說は、明治文壇の大作たる「破戒」以後初めて作られたるものに候。記者等は先生の手より再び文壇を驚かすべき佳作の出づべきを信じ居り候。讀者諸君の期待も亦記者等と同一なるべしと存じ候。

▲國木田獨歩先生は只今湯河原に御旅行中の由に候。之は俗界繁き都會の中にありては思ふやうなる作が出來ずとて思ひ立たれ候事にて、つまり小說を書く爲めの御旅行と承り候。常に人生の眞實を描破するを得意とせらるゝ先生が、詩神と相對して想を行り、天地と相面して筆を執らる。記者等が先生によつて一大作物を世に紹介するの榮を荷ふ、近く來月にあるべきを信じ申候。

▲金子筑水先生の論文は「近代思想界の趨勢」と題するものに御座候。常々四十頁の大論文、暗遷默移暫らくも休まざる近代思想界の趨勢、說き盡し、論じ去て些の遺憾なきを覺え候。材料一々精確、所說一々憑據あり、而して其が上に獨自一己の卓拔なる論斷を築く。穩健といふも盡さず。痛快といふも未だし。穩健にして痛快の評語、字面矛盾するが如きも、而かも讀み畢ての感情は即ち之に庶幾く候。

▲山路愛山先生の論題は「平政子論」に御座候。先生の史眼、才識、文章、共に當今の第一人たることは今更ら珍らげに吹聽するの愚かなるを覺え候。古を知るは即ち今を知る所以に候。先生が鎌倉時代の一女傑を捉へて縱横に論議せらるゝも、たゞ／＼興味ある史論を作らんが爲めのみにあらずと推せられ候。之を現今の「自由戀愛論」「女權問題」等に關聯して論ぜられたるの趣旨も亦其處にあるべきを信じ候。

▲綱島梁川先生は入梅頃より病態殊に勝れず、一時は危篤に陷られ候由なるも、近來は大に元氣を恢復せられ候。文壇の慶事、思想界の大悅、之に過ぎたるあらず候。先生は素より已に悟の人に候。而かも大死一番して絕後に大歡喜を得る底の經驗は今回の大苦惱によつて更に／＼深められ候事と推せられ候。記者等は秋風碧落より吹き初むる此好時期、再び先生に其靈筆を揮ふべき力を與へ、次號に於て其愛に滿ち力に充ちたる賢人の教訓に接せんことを祈るものに候。（社末一記者）

附録

現時の新體詩の價値

田能村秋皐
小栗風葉
正宗白鳥
伊藤まさ女
阪井久良岐
河井醉茗

高安月郊
笹川臨風
五十嵐力
戸川秋骨
高濱虚子
大和田建樹

現時の新體詩の價値

田能村秋皐

はしがき

現時の新體詩に就いて聊か願ふところあり、左の書翰

謹啓時下筆硯益々御清適奉賀候。扨弊社發行の『中央公論』は政治、宗教、社會等の諸問題に對し、公平なる批評を下し、以て健全なる思潮の普及を圖ると同時に、更に文學上の製作に向て多大の注意を拂ひ、以て高尚なる趣味の鼓吹に勉めつゝあるは大方諸彦の諒知せらるゝところに御座候。竊に思ふに現時の文壇に在りて最も群疑の府となり居るものは新體詩なるべしと存じ候。或は字句に、語格に、思想に、今日の新體詩は到底一の謎語のみ、作家等自身の圏内を離れて了解せらるべきものにあらずと難ずるものあり、或は新事象、新詩情を歌ふには凡てに於て新を許さゞるべからず、之を謎語となすは新詩趣を解せざる凡俗の見なりと辨ずるものあり、孰れか是、孰れか非、之を現時のまゝに遺るべきか、之を根底より打砕して新に建設すべきか、蓋し瓦礫を什襲する愚は寶珠を委棄するの愚と擇ばず、斯る諸説紛々の時に當り、文壇諸大家の御判定を得て、その眞價値幾何なるかを江湖に知らしむるは極めて有益の事と信じ候。御多忙の處恐縮の至りに御座候へ共『現時の新體詩の價値』について御教示を惜まれざらんことを伏して奉懇願候。尙御執筆の御暇あらせられずは御一報次第社員拜趨御高話筆記仕るべく候敬具

を普く當代知名の大家に致し、高見を求めたるところ、何れも請に應じて快く返書を賜はりたること吾人の榮として深く感謝するところなり、一分は已に前號の附錄に收め、今その殘れる稿の幾分を、又本號の附錄として添ゆ、前號のそれと併せ讀まば、啻に現時の新體詩に就きて一隻眼を開き得るのみならず、奇、正、諷、諧、諸體該れ備はる各樣の文致は、各家の風神を遢り出して宛然絶好の寫眞帖に對する想あらしめん、唯それ限りある紙面は又も遺憾ながら金玉の文字を收め盡す能はず次號の御樂みに多くを殘すに至りたること、偏に寄稿諸大家並に讀者の諒恕を望む。

○

用語非なり

現時の新體詩の價値如何は實際尙問題たるを免れず候て、貴社が之に付て、廣く諸大家の意見を徵され候は、此際最も有益の擧たるべく存候、小生の如き雜魚のとゝ交りは、汗顏の至に候へども、折角の盛意に對し、鄙見極めて簡短に開陳致度候

詩形としては、句の長短、篇の長短、共に自由なる新體詩の、最も適當の詩形たるを信じ、將來最も發達すべきは、此詩形の詩の外あらずと信じ申候

乍去、小生が最も不服なるは、現時の新體詩の用語に候

如何なる詩形に論なく、總ての詩が、其國其時代の言語を以て用語と爲すべきことは、當然の約束と存候、故に當派の和歌者流が、雅言の名の下に、古代の死語を用ひ候事は、詩の約束に反し候ものにて、近時衰運に屬し候は、此點に職由すと信候、現時の新體詩が、新派和歌と共に、死語を用ひざることは、小生の最も贊同致候處に候も、新體詩は、死語を用ひざる代りに、一種新奇の語を用ひ、我邦現代の言語に付て相當の學識ある者さへ理解し能はざる語を用ゆること多く、此が爲に現時の新體詩は、貴社の所謂一の謎語たるを免れずと信じ候、

蓋しマジメなる詩は、川柳へなぶり等の滑稽詩の如く、俚言俗語を用ふべからざるは、勿論にて、現代の言語中、高尙雅馴のものを用ふべきは、申迄も無之候へども、現代の新體詩の用語は、雅馴といふべき平正穩健の言語に非ず、非常なる新奇異樣の語に充ち、耳に聞いて理解さるべき詩の本色を失ひ候のみか、目にて讀みてさへ、尙凡人には理解され不申、隨て直覺的に感興を起さしむべき、詩の特性は、

全く之を失へるものと斷言致候も、過言ならずと信候
現時の新體詩人が、此の如く生硬澁晦なる奇怪の用語を、喜んて用ひ候は、二種の理由あるべく、其一は何人にも理解さるゝ現代平正の言語にては、何となくエラク見えざるに因り、鬼面嚇兒の手段に出てんとするものにて、其二は想の平凡空疎を蔽はんため、故さらに其の外形を塗抹粉飾するの必要を感ぜしもの、には無之哉と、内々邪猜致され候
故に小生は、用語の點に於て、新體詩人の一反省を得ば、新體詩は最も適當なる、而して最も發達すべき好箇の詩たるべく信候

○　高安月郊

現時の新體詩の價値に付て御尋、それにも種々有之候へば一概には申難候が、最群疑の府となり居るものとは、目下流行する一詩風の事なるべく、そは字句に語格に思想に一の謎語の如しとの非難も一理無きにあらず、されどこれ社會の激變につれて明治十年以後に生まれたるものは全く古來の日本趣味の系統を斷ち、寧ろ十九世紀末の歐洲趣味の方其嗜好に適當なるも一因なるべく、近代文明の多忙なるより悠久の觀念よりも新奇を競ふ傾向あるも一因なるべく、人格より才能を先んずる流風より、詩も技術も混同して技巧を尊ぶも一因なるべく、先づ暫くは經過せざるべからざる一顯象と存候殊に天分は如何ともすべからざるものにて技術的に出來たる才人に天籟を望むも無益に候へば寧ろ貧しき邦語、狹き詩形に様々の新案を試むる勞力を多とし、先覺の士はこれを判別して好果のみを納め、更に後進に向て大雅

を指示するが肝要と存候

東山客

○

小栗風葉

御訊ねの趣「文學上の製作に向て多大の注意を拂ひ以て高尚なる趣味の皷吹に勉めつゝある」貴社の御辭も覺えず候、小生も一新事象新詩情を歌ふには凡てに於て新を許さゞるべからず之を謎語となすは新詩趣を解せず凡俗の見なり」と辯ずるものに候希くは新興の此の新文藝に同情あられよ。

○

笹川臨風

如何にも今の新體詩と云ふものゝうちには不思議なものが多くあるてす。讀者こそいゝ迷惑て、作者の獨りよがりを聞かされてる譯てす。是は詮ずるに理想が高くつて、腕が口ほどに伴なはないからてせう。云はゞ初期の美術院派の繪畫を見るやうです。しかし是も進歩の階段であらうと思はれる。故外山ゝ山先生などの我は官軍あたりから比較すると、兎に角進歩したものてす。云はゞ今は猶ほ創設時代に屬されて居るから、混和紛雜の狀體てあるのは、自然のことゝ存じます。その間には、中々、面白い想、旨い句などが、所々に突兀として聳えて居るやうてすから、そろ／＼そのうちに修養時代にはいつて、作者が古今東西の詩を研究し、色々自分も發明して來れば、新體詩の好機大に熟し、面目一新して、立派なものになるてあらうと信じます。既に晩翠君などは、此頃ミルトンの失樂園を飜譯したり、バイロンのチャイルド、ハロルドなどを譯するつもりてあるさうてすが、是は君自らの爲めにも一進境を拓く基てあると思はれるし、また新體詩界の爲にも至極結構な事てあると存じます。藤村君は此頃は小說宗

に歸依のやうてあるが、その材料結構着想に苦心する、その影響が又今後同君の詩の上にも現はれて來ると思はれます。芭蕉が蕉風を興すにしても、杜甫だの、西行だのと、餘程色々と深く研究したのですから、何事にも修養が肝心と信じます。作者も獨りよがりの天狗となるよりか、大に古來の詩を研究して工夫がありたいものです。斯くして新詩體は發達すると思ふ。兎に角我輩は新體詩の現境は進歩の階段にあると信じ、次第々々に向上して往くものなるを確として疑はざるのであります。

近來新體詩界のうちて注意すべきものは、白羊宮だの、東海遊子吟だのてありませうが、前者は見なければ知らず、後者は流石に規模が大きい。しかし千篇一律と云ふ誹があるかも知らぬと思ふ。不如歸だの、又は其他當つた小說を新體詩に作り替へるなどは、智惠のない話て、是は西詩の飜譯なぞとは、まるて譯が違ふ。又近松の作だの、其他古人の作を新體詩に作るのも、餘り感服が出來ないのです。實は浦島だの、羽衣だの、熊野などを作り替へて、樂劇とか何とかにするのも開拓の爲めかは知らぬが、ひどく面白く思はぬのです。古傳說を材料にするのにしても、もそッと目新しい、工夫の出來るものが澤山あるやうに思はれる。譬へば井上巽軒先生の比沼山の歌、あれは中絕をしたし、又色々非難もあつたが、古傳說の材料としては、浦島や羽衣に執着するよりか、餘程面白いと存じます。

それに新體詩と云ふと、星や菫と關係があるやうで、雄大なるもの、悲壯なるものに乏しい。東海游子吟などには、日本海の海戰を歌つたものがあるが、振古未曾有の大戰が在つても、是に就て詩人が椽大の筆を揮ふのが殆どない。又朝日新聞社の大阪市歌にしろ、文部省の國運の歌にしろ、新體詩人は與ら

ず、素人の下らぬものが採用されて居る。何、彼奴等に我輩の歌が分るものかなどゝ詩人連は大氣焔であらうが、餘りさう新體詩超然主義も感服が出來ないのです。兎に角その歌を以て、その調を以て一世を風靡するぐらゐの抱負がありたいものです。キップリン流の意氣込を持て大帝國主義を鼓吹するものもあってよからうと思ふのですか、どうでせうか畢竟するに、今の新體詩は世間とかけ離れ過ぎて居るものが多い。何も必ずしも世間的になれと云ふのではないが、餘り獨りよがりが多いからちつとその弊を矯めたらよからうと思ふ。反省社から、此う云ふ問題が出るのも、つまりその證據に外ならないのでせう。

○　　　正　宗　生

拜啓新體詩については追つて愚見申上べきかも計りがたく候が、炎熱の候とても六ヶ敷議論など致すに堪へず候間平に御宥免下されたく候。

○　　　五　十　嵐　力

新體詩に就いての御下問恐縮に奉存候。されど其の價値の如きは、作家により著しき相違ありて概括的評論を下し難く、又小生等門外漢の容喙し得べきことに無之候へば、玆には唯だ現今の新體詩に對する平生の感想をかいつまみ申上ぐべく候。

今の新體詩人の注意を乞ふべき事、大別すれば下の二點に歸し申すべきか。第一は價値ある思想の育成に候。古來言ひ古るされたることにて候へども、詩人は言はざるを得ずして言ひ、言ふ所即ち詩を成す。

極端なる清教徒的獨斷のやうには候へども、其の裡には爭ふべからざる眞理ありと存じ候。今の新體詩を作る人、心底眞に言はざるを得ざることありて、少なくとも言はざるを得ざるてふ意識に動かされて作する人幾許ありや。又其の思想を、言はざるを得ざるまでに育て上げて後に之れを言ひ表はす人幾許ありや。今の新體詩は多くは喉頭三寸の間より出づる聲にあらずや。若しくは、流産し、墮胎したるものにあらずや。是を以て小生は價値ある思想を成熟する迄育て上げて後に言表する事、第一に注意を乞ふべきことかと存じ候。

第二は思想と言語と、言ひ換ふれば内容と形式との調和に候。凡そ文章に於ける思想發表の理想とすべき原則は、内容に最も適合せる形式を取らしむるに在り、其の思想を最もよく表はし得べき言語を用ゐるに在り。更に換言すれば、最も容易に而かも impressive に思想内容を知解し翫味し得るやうなる言語、形式を取るに在り。尤も、知解の文と情感の文とはひとし並に論ずべからず、情感の文の中にても、散文と律語とはおのづから發表の形式を異にすべき理由あり、情の文殊に律語に於いては detail するを貴ばずして suggest し、symbolize するを貴ぶといふが如き差別はあれども、そが内容形式の調和を要とすることは爭ふべからず。此の點より見れば、今日最も進歩せりと稱せらるゝ種類の新體詩が、第一流の智者にだに了解せられざるが如き或は十人十樣に解せらるゝが如きは、（幾多の辯護すべき理由あるにもせよ）良心あり、向上の意氣ある作家の反省を促すべきものにあらずや。或は『古事記』、『萬葉』、若しくは儒老佛等の經典中より、取置きの名文句、難文句を拔き來たりて不調和なる象嵌を爲すが如きは

頗る戒愼を要することにあらずや。

然れども現時は詩歌界の過渡期なり、新體詩に取りては創業の時代なり。今の新體詩作家の努力は決して徒爾なりといふべからず。之れを荒野の道を闢くに譬ふ。彼等は一草一石を排し去りてやうやく自家通行の小徑を作り得たるなり、新らしけれども餘りに自己的、一家言的にして、未だ公衆をして天下の公道と認めしむるに足らず。異日大才現はれ、彼等の爲す所を綜合するに及びて、始めて坦々たる大道を見るを得べきか。

今の新體詩の舊調によれるもの、例へば今様ぶり若しくは奈良時代の長歌ぶりの如きは、右の第二の非難を免るべきものに候へども、想調共に概ね陳腐にして、特に現代詩人の作として明治の詩歌界を飾るべきものとも覺えず。故に今は其の論を略し候。

以上一の引例をも爲さず、誠に無責任なる抽象的漫言のやうにて恥入候へども、御下問にあまえて申進じ候以上。

○

いとう政女

ホンの素人考へを申上候

新體詩は隨分拜見する方にて。御名前丈け位は覺え居り候

御作りになる方が。みんなさうだとは申上げがたく候へ共。近松のきれッぱし。御經文の燒直し。漢詩の崩しみたやうなもの。さては。この方はわたくし至ッてのわからず屋なれど。西詩そのまゝのが多く

見當り候は。どう云ふものにて候か。
こけおどしに。六ケしい字をつかひ。わからない文句を並べるのは氣障だと存じ候
こんなものならば。何も新體詩と號するがものはなく候
久しいやつなれど。法華經や天の網島の方が。よッぽど面白く候
しかし。其内。成程とわたくしに合點させて下さる方が。新體詩界にも御現はれなさることゝ存じ候
先は御返りごとまで

○　戸川秋骨

拜啓（中略）扨て過般は新體詩の事につき御下問に有之候が小生詩につきては和洋とも近時全く門外漢に有之候殊に現時の新體詩につきては何等の卑見をも述ぶる資格なきものに候只星菫などの文學が過ぎし頃の新體詩若くは美文などより出し事を思へば現時のそれにも何者かひそみ居候事とやゝ氣味わろく思はれ候次第に御座候　右まで早々

○　阪井久良岐

新體詩の社會上に於ける現在の價値如何に就いての問題は尤興味ある問題かと存じ申候、其道の人々に云はせれば、苟も新體詩の價値を知らぬ者は、尤時代後れの人間て、靈性に缺くるものゝやう申され候へども、又實社會の上に立ちて觀察すれば、美はしき謎語と云ふが尤適評かと存ぜられ申し候、國語を大切に思ふ了見のある人々には、到底此時代の生みたる畸形兒的文字を味はふに餘裕乏しと存じ申し候、

ソレは「我は官軍吾敵は古今無双の英雄ぞ」の萠芽時代「七里半なり」オット違がッた「一里半なり」一里半、進みて乗入る八百騎」時代の軍歌式新體詩より比較すれば、現今の新體詩は無上の進歩成功なるべく候、巽軒博士の比沼山の歌「空氣も大氣もせりに出しせりに出し」的の毬唄スチ、コ調に比べては確かに、大進歩に候も、其代り解らなくなッた事も一段と存じ候、ある人の申し候には、新體詩は三十歳以上の人間には分らぬ者と申し候、成程適評に候、到底新體詩は未成品、乃至出來損品たるの缺點は掩ふべからずと存じ候、これ國語國文通の新體詩家には想に乏しく、舶來の假色に通じたる新體詩家には國語の素養に缺けたる爲め、随分と無鐵砲の鵺語や五目鮨流を振蒔かるゝが爲めかと存じ候、本居宣長翁は古體今體の歌の區別を説かれ、鵺語を排斥せられ候も、今日の新體詩は上は古事記萬葉の語法を用ひ、下は俗間の明治詞さへ遠慮なく使用され候ため、我々の如き日本人には殆ど滑稽の感じがして、抱腹絶倒にたへざらしめ申し候、ある人の「白羊宮」とか云ふ詩集を一寸一行見ても

　　勇み勇みし伊邪那岐は

と有之候、私にはどうしても浪花節の一節としか感じられ不申候、吾が　皇祖と拜戴する天津神と云ふ感じは浮かび不申候、神話を叙するに浪花節形式を用ゐらるゝは尤滑稽かと存じ候、ソレよりも勸進帳の「勇みかゝれる有様は、いかなる天魔剛力も恐れつべうぞ見えにける」の方が遥に感興を起し候又此人の詩に最初は古事記片歌あたりの調子で古語が用ゐあるかと思へば、突如として相媾(アヒヽキ)なる俗語が出てまゐり、ウンザリ致し候、相　など云ふ語をきくと野良出合感をひき起し、折角高崇な古語の感じを打破

し申し候、又ある人のも、一節は萬葉式、一節は今樣式、一節は俗語式、と云ふやうな調子にて、トテモ卒讀にたへ不申、「イ照らしの」などイと云ふ萬葉式の語を添へて見たり、又俗語が續いて出たり、イヤハヤ驚くの外これなく候、又象徵派とやらについて名高いお方のも尙滑稽なるか多く候

照らしの光りアビシニヤ

の如く、照らしと云ふと私には上方の面ら明りを連想し、突如アビシニヤと出られるので、大阪とアビシニヤと何の關係なきものが一句の中で混線し申し候、又

沃度に鹽にさ丹づらふ

の如き、沃度と云ふと藥店なり醫者を連想し、さ丹づらふと云へば萬葉式奈良朝を連想し候、此人のも一節は謠曲式一曲は直譯式一節は古言式、テント溜まつたものに無之候、要するに國語的眼孔から見ては、トント幼稚拙劣よくまあコンナものを四號活字で麗々しく出したものと思はせ申候(内容は兎に角)ソコで一句

通譯のさて〳〵拙づい新體詩

生長い囈語を云ふ新體詩

漢詩輸入時代にても、樂天の詩のよく國語に混和されたる如く、外國の思想にももう少し旨い假色が出來そうなものと存ぜられ候、土井晩翠君の日本海の大戰の一節などは一寸氣持よく咏まれ候は、自己の感興に觸れ、又作家が一家の風調を自得するによるなるべしと存じ候、新體詩はまだ假色時代、情を僞ら

ざる詩人の本體に反し、川柳の如く眞情を表裏なく率直に現はすに缺け候、故人を動かすに足らず、徒らに生硬不熟なる文字を驢列すると云ふ一面に大缺點ありと信じ候、尤内容思想は立派なるもの可有之と存じ候も、未だ試驗中の未成品かと存じ候、國文國語の修養を積み思想豐富の天才が出ぬ限りは、現下の新體詩は中學生徒の賞鑑に止まり、二三の詩人仲間の樂屋落、手前味噌に止まるやうに存じ候と思つたまゝを申上候、尤小子の淺見寡聞、時代後れの然らしむる所かも知れ不申候も、まあ今日の新體詩は新體詩人の自惚れる程の眞價値は無之かと存じ申し候、併し製本丈は確に立派に相成申し候、萬一新體詩人にて大なる抱負あらば、一ッ野口米の向うを張つて、歐文の立派な詩でも作ッても、世界の人を驚かす方が宜しく、私も外國語稽古の際そんな考も一寸浮かび候も、生憎と途中で廢學したので手前味噌も申されず殘念々々と逃口上を申し候

○　　　　高濱虛子

拜啓先日は夏季讀ものについて御質問を受け候處かゝる事はあまり小生に不似合故御返事も不致打過候段御寛恕願上候。扨今回の御質問も別に定見無之、申上ぐるもいかゞと存候へど度々貴意に負くも心ならず候まゝ申譯迄に申上候

新體詩の事は新體詩家に任せ置くべし。新體詩をどうするかうするといふ事は實際やつて見ねばわかるものに非ず。若し今の新體詩家に任せ置くが不安心とならば自分でやつて見るがよろし。

右の通りに有之候。御取捨願上候。

○

河井醉茗

私は詩を作るが詩を論じた事はない、他の詩を論ずるのは好んで聽くが、自ら好んで論じた事はない、自然議論をして立派な事は申上られないが、折角のお尋ねであるから、詩に就いて思ひ浮んだ事を二つ三つ斷片的に言つて見ませう。

今後の詩風は一轉するか何うかと云ふお尋ねであるが、無論一轉も二轉も三轉四轉して、轉々して行く中に進歩するものであらう。今の藝術界で最も能く轉移するものは何かと云へば、恐らく新體詩であらう。小説其他散文の方は何と云つても歷史が永い、永い歷史の間には大分轉々して來て居るから、其移り變りが大きく一年や二年の間に眼に立つて變ると云ふ事はない。處が新體詩は創始から僅に二十年餘りであつて、其間に他の藝術に追附いたのみならず、先んじやうとするのであるから、目まぐろしい程忙しい、一年はさて措いて一月の間にでも新機軸を出さうと、互に努力して居る、詩に現狀維持と言ふ事はない、進まなければ退く、内觀的に修養して居る人と、技巧的に工夫して居る人の差はあるが、兎に角詩を作る人は何事か新しい處あらしめやうと氣を附けて居る、それだけ新體詩は開拓して行く餘地があると云つても宜し、新體詩は未だ凝り固つて居ないと云ふ事も出來る。それでは何う言ふ風に進んで行けば好いかと言ふに、各家それ〴〵意見もあらうし、方針もあらうし、各家を離れて思想界の大勢もあらうし、將來の新體詩は一言に斷じ難い。

現下の詩壇に象徵派と稱する者がある、佛蘭西にもあり、獨逸にもあり、而して日本にもある、詩とし

ては最も難解なりと稱されてゐる、難解と可解は程度問題であるが、昨今の趨勢は讀む方では大分に詩を味ふ力が着いて來、作る方では餘りに獨斷的を避けて手加減を柔かにして居るやうであるから、恐ろしく難解の詩は尠ない。そこで此象徵派の詩は若干か解し難いとしても、其神秘な點、其幽婉な點に於ても、聲價を保つは勿論、獨創的の詩想は多く此派に依りて歌はれる場合が多い、人若し象徵派を目して異端邪道と謂はゞ、私は決して其れに與みしない、けれども亦象徵派が詩の全部を占領し得べからざるは勿論の事で、今日の詩壇は象徵派以外にも何派か起るべきは當然であらう。

茲で少し散文の現狀を觀て、詩の上に及ぼしたい、散文と云つても主に小說を指すので、最近の傾向、所謂新興の精神を代表したとも見るべき一二の作は、文致から言ふと分り易く、內容から言ふと生活に交涉し、現世と密接して來て居る、此現時代と接近すると謂ふ事は、坪內博士が始めて寫實小說を唱へた頃からの精神ではあつたが、硯友社全盛時代には猶然う言ひながらも、多少江戶式の面影が殘り、德川文學の名殘を止めて居た、然うでもあるまいと新たに興つたものに、所謂家庭小說と稱するものもあり、所謂寫實小說と稱するものもあり、家庭小說の方は狙ふべき的が違つて居るから、一藝術上の立場から嚴しく論議する價値はない。所謂寫實小說と稱する物は今後何うにかなるべき希待もある。處が是等以外最近の思想を代表し、最近の文章を代表して居る二三の作は、大歐の思想を最も能く消化し、文章は自然に平易に、人物は現代の活きた人間を捉えて居る、單に文章だけに就いて言つても、分り易く、率直に、飾り氣なく感情を言ひ表はさうとするのは、著しい現象である。紅葉の書いたやうな字々刻畵

の文章は現はれて來ない、滔々として大きい文章は出て來るであらうが、一字一句に骨を刻むやうな技巧に重きを置いた文章は出て來ない、單り小說に止まらず、論文であらうが、講義であらうが、凡ての散文が、文字を離れて適切に意を傳へやうとするる傾向あるのは、事實に徵して歷々と明かな處である。顧つて詩壇の方を見るに必ずしも然うでない、散文の分り易くなつた如く、詩は分り難くなつた處もある、散文の爲には辭書を捨てるべき時代が來て、詩の爲には辭書を拾ふべき時代が來た、之れ不思議なる現象であつて、出て來る原因も一筋ではなからう。

詩語の不自由など云ふ事は、多くの詩人を驅つて、成る可く他の使はない新しい語を發見するに努めしめ、古く使ひ熟れた語には、何うしても使ひ熟らした意味が附纏つて、新しい感情を盛る器として物足らない、同じ意味でも新しい語で言ひ表はすと、別種の味ひが湧く、殊に一字一句を吟味する詩の方では、散文のやうに大まかでは行かぬ、何うしても新しい辭を見出さねばならぬ、新しい語と言つても日本の國語は甚だ狹少だから、餘り人の使ひ古さない語を發見するには、勢ひ古く遡るか、新造語を製する外は無い、其弊は耳遠い古語の復活となつて來た、私は古語復活に餘程手加減が入ると思ふ。

神代の事を書いた書物に一つや二つ出た語を今新しく使つても、一寸意味を解するに苦しむ、一種の古典派文藝としては、有つても宜しからうけれど、新進の詩家が皆之を眞似ては、詩の爲に災を爲す事が多からう、詩を作る事が一つの辭書詮索、古語研究と云ふ事業に伴ふやうでは困り物であらう。日本の國語は少しと雖、銘々使はない語を辭書から探し出さねば、詩が出來ないほど不自由でもなからう。私

は決して素養を無視せぬ、平素讀書の間に得たる美くしい語、新しい語、忘れられたる語、無理てない新造語を場合々々に使ふ事は、詩人が當然に盡すべき努力てあらうと思ふ、餘り深入して、好んで古語癖や造語癖に陷る事は避けて貰ひたい。泣菫君にして甫めて古語を上手に活かす事も出來るが、外の人が之を眞似ると、京橋の中央へ應天門の凱旋門が出來たやうに、莊嚴でもなければ、古雅でもない。田舍者おどかしに過ぎない、威嚇て價値を占めやうとしても、識者は之を一笑に附すに止まる、新進少壯の詩人中には態と怪僻な語や、苦しい造語を使うて、金箔銀箔の箔細工を試みやうとする者もあるが甚だ笑止千萬と言はねばならぬ、詩を作るに語で苦しむやうては大いに達する事はむづかしい。昨今の詩壇が稍行惱みの姿あるのも、畢竟此詩語の困難から來たのが一つの理由て、皆て少しむづかしく凝り固めた氣味がある、もう少しらくに出來ねばならぬ、作る方も讀む方もらくにならねばなるまい。今に一方を切り開いて此詩語難澁の谿谷を出て、大自由の境に踴躍する者が現はれたら愉快てあらう、確かに現れるべき時期が近づきつゝある。

曩に散文が西歐の思想を能く消化し來つた事を述べたが、抑も此西歐の思想を最も早く、又最も努力して我文藝に注入したのは新體詩の功勞てある、此頃の散文に新しい感化を與へた點に於て、詩は確かに水先案內てあつた、社會は十年後れて居る時に、詩は十年進んで居る、此頃やッと星菫黨の名を詩人に附けて欣んで居る社會は、詩人が疾うの昔に星や菫を歌ひ盡くした事に氣が附かぬ。且又星や菫を詩人が發見した功を今になつて是認した譯てある、星のやうな美くしい天體を迂遠なる日本の歌人は二千餘

年間も忘れて居た、菫のやうな懐かしい花を最近二十年前までは歌人俳人の眼に映らなかつた。是等の邦人に忘られたる詩材を發見する事に於て、我新體詩人は日夜努力して居る、西歐の文藝思潮に早く觸れ、早く吸入する事は確かに詩人であらうけれど、茲に一つ心すべきは成る可く早く新しい思想を歌うとする結果、勢ひ不消化の詩が出來る。散文では漸く消化されるだけの逕路が附いたけれど、詩には未だ消化されて居ない方面もある、右に言ふ新しい思想を早く傳へやうとする結果からでもあらうが、今少し西歐の思想も日本の詩人に消化されて然るべきであらう、譯詩專門の人は別として、一家を樹立すべき詩人が、大部分を西洋より持來ると云ふ事は、卑怯でもあり心細くもある、素養としては西洋の詩を味ふより外、宜しき方法はないが、直ぐ口うつしはいけない、之は昨今の散文と比較して感じた事で、詩は進んで居るに違いないが、又消化しきれない處もあるとは、免れ難い譯であらう、從つて將來に出やうとする詩人は、能く歐米の詩想を消化して措く事は必要であらう。

能く散文と比較するやうだが、之も時代の大勢であらうと思はれるのは、詩を作るにもつと人世に接觸する事で成程先覺の詩人は現代に近寄りつゝあるには相違ないが、未だ思ひ切つて接觸しない。稍遠慮がちにジリジリ手近な方面から詩材とするやうて、之も開拓する事はなかなか骨が折れる。昔の武士は米の値を聞くのを以て恥辱として居たが、今は生活の意義も甚だ高くなつた、人間の生活状態は活きた詩、活きた文として捉える事が出來る、切れば血の出るやうな詩は或は此生活の一面に觸れた思想から作られるかも知れない、多くの人は茲に煩悶し、苦闘して居る、理性の文も、感情の詩も、此生活の裏

面に宿る面影でなければ生氣が無い。活動とか、努力とか、進化とかを歌ひ出すやうになり、電車とか、汽車とか、見世物とかを捉えるやうになつたが、此傾向は必ず來るべき詩風の豫言者で、形式も、内容も、場所も伴ふて一轉するであらう、今は僅に其穗尖を見せた迄て、今後如何に此詩風が發展して行くか、共に研究し、共に試作をやりたいと思ふ。

要するに技巧は重んずべきものに相違ないが、近くは餘り技巧に傾き過ぎて、一轉すべき期に迫つてゐる、思ひ切つて現代に接觸し感情の能く表はれた癖の少くない詩が欲いと思ふ、斯くして我が新體詩は充分に進歩の餘地がある。

恰も少年に教ふるやうな分り切つた事ばかり申上て濟みませんてした。

○　大和田建樹

花墨拜誦現時新體詩の價値について愚見御尋に御座候處小生は作る事は作り候へ共確と御答申上候程の智識も定說も無之赤面至極に奉存候あしからず思召のほど萬々奉願上候頓首



第四版

CHARACTER

SMILES

博士 スマイルス原著
文學士 竹村 修譯述

品性論

全三冊完成
美装合本
定價金壹圓廿錢
小包郵税金拾錢

『日本人』評 人生の常道と人間社會に處する大道を說きて穩健にして着實、且つ躬行實踐し易し。譯文平易にして流暢、節々句々人をして自ら襟を正さしむ。

『大阪朝日新聞』評 歷史言行錄及び著者が實地に見聞せし所に材を取り、廣汎なる意義に於て品性を解說す、品性の陶冶を重んずる人士の好讀本と云ふべし。

『教育時論』評 吾等は方今拜金的成功を說けるものゝ世に歡迎せらるゝを以て健全なる風潮に非ずとなすもの、本書の如きは青年座右の規箴として缺くべからざるものなりと信ず。

『中央新聞』評 古今の事實を擧げ諄々として品性は人の最も高尙なる使命にして、社會の良心を形づくるもの、又社會の最大原動力となるべきものたることを切論したり。戰後の國民教育に精神の修養を急務とする今日此書の我國民の德性を涵養し、道念を堅實ならしむるの功、蓋し鮮少ならざるべきを信ず。

版元 東京本郷區駒込西片町十番地（振替貯金口座番號第三五五） 內外出版協會

中央公論定價表

一冊	金拾五錢	郵税共
六冊	金八拾五錢	
十二冊	金壹圓六十五錢	

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵税六錢を要す

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし
一弊社は**振替貯金三十四番**（麻田駒之助名義）に加入いたし居り候此規則により御送金の方は登記料貳錢を必ず加えられたく候
一郵券代用の場合は必す壹割増のこと
一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年八月廿七日印刷
明治三十九年九月一日發行

發行兼編輯人 武田福松
印刷人 清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場